

# 空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書 3

— 芝山町上宿・井森戸遺跡 —

平成16年3月

千葉県企業庁  
財団法人 千葉県文化財センター

# 空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書 3

— しばやま かみじょうく いもりと  
芝山町上宿・井森戸遺跡 —



## 序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、千葉県文化財センター調査報告第469集として、千葉県企業庁の空港南部工業団地の開発事業に伴って実施した山武郡芝山町上宿・井森戸遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代早期の土器が礫を伴って出土したり、弥生時代中期初頭の須和田式土器が多量に出土するなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

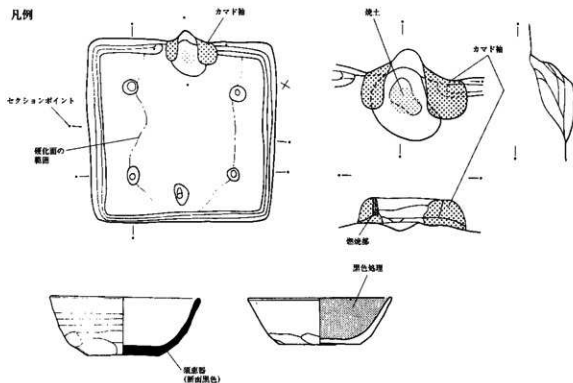
平成16年3月25日

財団法人千葉県文化財センター  
理事長 清水新次

## 凡 例

- 1 本書は、千葉県企業庁による空港南部工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第3冊目である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県山武郡芝山町岩山字大宿1734-1ほかに所在する上宿遺跡(遺跡コード 409-015)、千葉県山武郡芝山町岩山字井森戸126ほかに所在する井森戸遺跡(遺跡コード 409-014-2)である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県企業庁の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は、本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、上席研究員 西口 徹が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県企業庁、芝山町教育委員会はか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
  - 第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「多古」(NI-54-19-10-2)、「新東京国際空港」(N1-54-19-10-1)
  - 第2図 芝山町役場発行 1/2,500都市計画図「芝山9」を基に加筆を行った。
- 8 周辺航空写真は、京業測量株式会社による平成12年に撮影したものをを使用した。
- 9 基準点測量及び地形測量は日本測地系に基づいて行われた。
- 10 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 11 挿図に使用したスクリーンパターン及び記号は、以下のとおりである。

### 凡例



# 本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	調査の方法	2
第2節	遺跡の位置と環境	2
第2章	上宿遺跡	6
第1節	縄文時代	6
1	遺構	6
2	遺物	10
第2節	弥生時代～平安時代	10
1	遺構	10
2	遺物	10
第3節	中・近世	12
1	遺構	12
2	遺物	12
第3章	井森戸遺跡	14
第1節	旧石器時代	14
1	第1石器集中か所	14
2	第2石器集中か所	14
3	第3石器集中か所	14
4	単独出土の旧石器	14
第2節	縄文時代	21
1	遺構と遺物	21
2	包含層出土土器	26
3	包含層出土土器片鏟	36
4	包含層出土石器	37
第3節	弥生時代	52
1	遺構と遺物	52
第4節	古墳時代以降	60
1	遺構と遺物	60
第4章	まとめ	74
	報告書抄録	114

## 挿図目次

第1図	遺跡位置図	4	第22図	縄文時代～弥生時代(6H～7I区)包含層遺物出土状況図	31
第2図	上宿遺跡・井森戸遺跡周辺地形図	5	第23図	縄文時代～弥生時代SK(土坑・陥穴)出土遺物実測図	32
上宿遺跡			第24図	縄文時代包含層出土土器片実測図	32
第3図	上宿遺跡上層確認トレンチ及び本調査範囲、遺構配置図	7	第25図	縄文時代包含層出土土器1	33
第4図	上宿遺跡下層確認グリッド配置図	8	第26図	縄文時代包含層出土土器2	34
第5図	縄文時代陥穴、土坑	9	第27図	縄文時代包含層出土土器3	35
第6図	縄文時代・弥生時代遺物実測図	11	第28図	縄文時代包含層出土土器4	37
第7図	中・近世井戸状遺構	13	第29図	縄文時代包含層出土土器5	38
第8図	中・近世遺物実測図	13	第30図	縄文時代包含層出土土器6	39
井森戸遺跡			第31図	縄文時代包含層出土土器7	40
第9図	井森戸遺跡上層確認トレンチ配置図	14	第32図	縄文時代包含層出土土器8	41
第10図	井森戸遺跡下層確認グリッド配置図及び本調査範囲図	15	第33図	縄文時代包含層出土土器9	42
第11図	井森戸遺跡上層遺構配置図	16	第34図	縄文時代包含層出土土器10	43
第12図	旧石器時代第1石器集中か所石器出土状況図	18	第35図	縄文時代包含層出土土器11	44
第13図	旧石器時代第1石器集中か所出土石器実測図	18	第36図	縄文時代包含層出土石器実測図1	46
第14図	旧石器時代第2石器集中か所石器出土状況図	19	第37図	縄文時代包含層出土石器実測図2	47
第15図	旧石器時代第2石器集中か所出土石器実測図	19	第38図	縄文時代包含層出土石器実測図3	48
第16図	旧石器時代第3石器集中か所出土状況及び石器実測図	19	第39図	縄文時代包含層出土石器実測図4	50
第17図	SK(土坑)平面図及びセクション図	22	第40図	縄文時代包含層出土石器実測図5	51
第18図	SK(陥穴)平面図、セクション図及びエレベーション図1	22	第41図	縄文時代包含層出土石器実測図6	53
第19図	SK(陥穴)平面図、セクション図及びエレベーション図2	27	第42図	縄文時代包含層出土石器実測図7	54
第20図	縄文時代～弥生時代(6D～7D区)包含層遺物出土状況図	29	第43図	縄文時代包含層出土石器実測図8	55
第21図	縄文時代～弥生時代(4D区-上, 6I～7J区-下)包含層遺物出土状況図	30	第44図	縄文時代包含層出土石器実測図9	56
			第45図	弥生時代包含層出土土器1	58
			第46図	弥生時代包含層出土土器2	59
			第47図	SI-002号住居跡平面図、セクション図、エレベーション図(遺物分布含む)	62
			第48図	SI-002号住居跡マカド平面図、セクション図(遺物分布含む)	62
			第49図	SI-002号住居跡出土遺物実測図	62
			第50図	SI-003号住居跡平面図、セクション図、エレベーション図(遺物分布含む)	64

第51図	SI-003号住居跡出土遺物実測図……………64	第56図	SX-002号土坑出土遺物実測図……………69
第52図	SI-004号住居跡平面図、セクション図、エレベーション図(遺物分布含む)……66	第57図	SX-003号焼土跡平面図、セクション図……………69
第53図	SI-004号住居跡カマド平面図、セクション図(遺物分布含む)……………67	第58図	SX-004号焼土跡平面図……………69
第54図	SI-004号住居跡出土遺物実測図……………67	第59図	SD-001号溝平面図及びセクション図……70
第55図	SX-002号土坑平面図、セクション図及びエレベーション図……………69	第60図	SB-001号建物跡平面図……………71
		第61図	その他グリッド検出遺物実測図……………71

## 表 目 次

第1表	旧石器時代石器一覧……………72
第2表	縄文時代早期～前期グリッド別土器片点数……………72
第3表	SI-002号住居跡土器等観察表……………73
第4表	SI-003号住居跡土器等観察表……………73
第5表	SI-004号住居跡土器等観察表……………73
第6表	住居跡外出土土器観察表……………73

## 図 版 目 次

図版1	遺跡周辺航空写真		全景、井森戸遺跡東区調査前全景、井森戸遺跡東区頂部遺物出土状況、井森戸遺跡東区頂部遺物出土状況
図版2	上宿遺跡上層確認トレンチ(J)全景、上宿遺跡確認グリッド及び上層セクション		
図版3	上宿遺跡上層本調査範囲全景(北北西から)、上宿遺跡上層本踏査範囲全景(南から)	図版8	井森戸遺跡東区頂部遺物出土状況(南東)、井森戸遺跡東区頂部遺物出土状況(南東)、井森戸遺跡東区頂部遺物出土状況(南東)、井森戸遺跡東区頂部遺物出土状況(南東)、井森戸遺跡東区頂部遺物出土状況(南西)
図版4	002号陥穴、006号陥穴、008号陥穴、003号土坑、004号土坑、005号土坑		
図版5	上宿遺跡縄文時代・弥生時代遺物、上宿遺跡中・近世遺物	図版9	SD-001号溝セクション東から、SD-001号溝セクション西から、SD-001号溝全景、SK-002号土坑平面、SX-002号土坑平面、SX-002号土坑セクション南東、SI-002号住居跡セクション北、SI-002号住居跡カマド付近出土状況
図版6	井森戸遺跡西区(中央)、調査風景、井森戸遺跡西端部調査後遠景、井森戸遺跡確認トレンチ6D区、井森戸遺跡確認調査区(西区)、井森戸遺跡確認調査区(西区)、井森戸遺跡斜面出土状況		
図版7	井森戸遺跡斜面出土状況、井森戸遺跡東側		

- 図版10 SI-002号住居跡完掘, SI-002号住居跡カマド内出土状況, SI-003号セクション出土状況, SI-003号住居跡出土状況東から, SI-003号住居跡出土状況南から, SI-003号住居跡完掘
- 図版11 SI-004号住居跡セクション南東から, SI-004号住居跡北東側出土状況南から, SI-004号住居跡北東側出土状況東から, SI-004号住居跡カマド内出土状況, SI-004号住居跡完掘南から, SI-004号住居跡完掘南東から
- 図版12 SK-007号土坑出土状況, SK-007号土坑全掘, SK-008号陥穴セクション, SK-008号陥穴全掘, SK-009号陥穴セクション, SK-009号陥穴全掘
- 図版13 SK-010号土坑全掘, SK-011号土坑全掘, SK-012号土坑全掘, SK-013号土坑全掘, SK-015号土坑全掘, SK-016号陥穴全掘
- 図版14 SK-017号土坑出土状況, SK-018号土坑完掘, SK-019号陥穴セクション, SK-019号陥穴全掘, SK-020号土坑全掘, SK-021号陥穴全掘
- 図版15 SK-022号土坑セクション, SK-022号土坑全掘, SK-023号土坑全掘, SK-024号陥穴全掘, SK-025号陥穴全掘, SK-026号陥穴全掘
- 図版16 3C-30西壁セクション東から, 旧石器時代第1石器集中所(4D区), 4D-73, 74遺物出土状況(縄文時代後・晩期), 4D-93, 94遺物出土状況(縄文時代包含層), 5D-05西壁セクション, 5E-44西壁セクション
- 図版17 旧石器時代第2石器集中所(5D-25付近), 掘之内式土器出土状況, 6D-05区セクション, 6D-15区西壁セクション, 6H-54東壁セクション, 東区7J-10付近遺物出土状況
- 図版18 旧石器時代第3石器集中所(7H-18), 旧石器時代第3石器集中所(7H-07), 旧石器時代第3石器集中所セクション(7H-07付近)
- 図版19 井森戸遺跡旧石器時代第1石器集中所出土石器, 井森戸遺跡旧石器時代第2石器集中所出土石器, 井森戸遺跡旧石器時代第3石器集中所出土石器, 井森戸遺跡縄文時代包含層出土石器1, 2
- 図版20 井森戸遺跡縄文時代包含層出土石器3~5
- 図版21 井森戸遺跡縄文時代包含層出土石器5~9
- 図版22 縄文時代~弥生時代SK(土坑・陥穴)出土遺物, 縄文時代包含層出土石器片錘, 縄文時代包含層出土石器1
- 図版23 縄文時代包含層出土石器1, 縄文時代包含層出土石器2
- 図版24 縄文時代包含層出土石器3, 縄文時代包含層出土石器4
- 図版25 縄文時代包含層出土石器5, 縄文時代包含層出土石器6
- 図版26 縄文時代包含層出土石器6, 縄文時代包含層出土石器7
- 図版27 縄文時代包含層出土石器8, 縄文時代包含層出土石器9
- 図版28 縄文時代包含層出土石器10, 縄文時代包含層出土石器11
- 図版29 縄文時代包含層出土石器12, 弥生時代包含層出土石器1
- 図版30 弥生時代包含層出土石器1, 弥生時代包含層出土石器2
- 図版31 SI-002号住居跡出土1~9
- 図版32 SI-002号住居跡出土10~12, SI-003号住居跡出土1~3, SI-004号住居跡出土1~2
- 図版33 SI-004号住居跡出土3~7, SX-002号土坑出土1~3, その他グリッド出土1~2



# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1 調査の経緯と経過

千葉県企業庁は先端技術産業を中心に導入を図る目的指向型の工業団地の造成を、山武郡芝山町岩山に計画した。この空港南部工業団地は、千葉新産業三角構想の一プロジェクトとして策定された臨空工業団地の核となる。当地は新東京国際空港の南約1kmで、東京都心からは約60km、千葉市中心部から約30kmに位置する。団地全体面積は約41.1haで、工業用地面積はそのうち約31.0haを占める。

まず、事業に先立って昭和58年に千葉県企業庁長から事業地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会へ提出された。同年千葉県教育委員会教育長名で「縄文土器散布地6か所」がある旨の回答があった。そこで関係諸機関と協議した結果、現状保存が困難なため記録保存の措置を講ずることとなり、調査は財団法人千葉県文化財センターが担当することとなった。なお、昭和61年には、古宿・上谷遺跡内で新たに追加照会があり、千葉県教育委員会から「古墳時代集落跡1か所」がある旨の回答があった。

事業地内には南から順に古宿・上谷遺跡、大堀切遺跡、上宿遺跡、井森戸遺跡の合計4遺跡が存在する。古宿・上谷遺跡については平成9年度に「空港南部工業団地埋蔵文化財発掘調査報告書1」、上宿遺跡の一部と大堀切遺跡については平成11年度に「空港南部工業団地埋蔵文化財発掘調査報告書2」として報告書が刊行されている。また、上宿遺跡、大堀切遺跡及び井森戸遺跡は、事業地内を通過する主要地方道成田松尾線及び国道296号線建設に伴って、当センターによって発掘調査が行われており、成果が報告されている。

平成12年度に上宿遺跡の残りの部分の発掘調査、平成14年度に井森戸遺跡の発掘調査が行われた。整理作業は発掘調査に引き続いて開始され、平成15年度をもって報告書刊行の運びとなった。

発掘調査及び整理作業に係わる各年度の組織、担当職員及び作業内容は、下記のとおりである。

#### 平成12年度

期 間	平成13年1月9日～平成13年3月29日		
組 織	東部調査事務所長 折原 繁 担当職員 上席研究員 大塚 一実		
内 容	発掘作業（上宿遺跡）		
	上層	620㎡/6,200㎡(確認調査)	900㎡(本調査)
	下層	248㎡/6,200㎡(確認調査)	0㎡(本調査)

#### 平成14年度

期 間	平成14年5月13日～平成15年1月31日（発掘） 平成15年1月6日～平成15年2月28日（整理）	
組 織	東部調査事務所長 折原 繁 担当職員 主席研究員 宮 重行	

上席研究員 遠藤 治雄・大塚 一実

研究員 永塚 俊司・黒沢 崇

内 容	発掘調査（井森戸遺跡）		
上層	1,654㎡／16,540㎡（確認調査）	5,880㎡（本調査）	
下層	660㎡／16,540㎡（確認調査）	128㎡（本調査）	
整理作業	水洗・注記～実測の一部まで		

平成15年度

期 間	平成15年4月1日～9月30日（整理）
組 織	東部調査事務所長 折原 繁
	担当職員 上席研究員 西口 徹
内 容	整理作業 実測の一部～報告書刊行（井森戸遺跡）
	水洗・注記～報告書刊行（上宿遺跡）

## 2 調査の方法

まず、公共座標（第D（座標系）に従い調査区域に対してグリッドを設定した。方眼の設定に当たっては座標X=-，Y=を起点として、両軸をそれぞれ50m間隔（上宿は40mグリッド）で区切り大グリッドとした。さらにグリッドの中を5m×5mの100個の小グリッドに分割した。大グリッドはY軸が北から南に向かって1，2，3，4…，X軸が西から東に向かってA，B，C，D…という順序で呼称している。そしてそれらの大グリッド中の小グリッドは北西隅小グリッドを始点にして、Y軸が北から南に向かって00，10，20…，X軸が西から南に向かって00，01，02，03…という順序で呼称する。つまり北西隅の小グリッドから南東へと対角線上で見ると00，11，22，…，99というように進んでいくことになる。すべてのグリッドは北西隅に打たれた杭にそのグリッドの呼称を付帯させている。

なお、このグリッドの設定は前回の上宿遺跡、大堀切遺跡、古宿・上谷遺跡の計3遺跡や事業地内の成田松尾線及び国道296号線の路線敷内は、先に述べたように既に当センターによって発掘調査が行われているが、このときのグリッドは任意に設定したものであるため、今回はこれは踏襲しなかった。発掘調査の方法は、まず上層については10%の、下層については4%の確認調査を実施した。本調査については山林や草地のようなⅡa層が残存している地点については、表土層のみ重機で除去し、後は手作業で掘り進んだ。Ⅱ層が残存していない地点については、Ⅲ層上面まで重機で除去し、遺構の確認を行った。旧石器時代や縄文早期の遺物を出土する包含層がある地点はグリッドごとに遺物を取り上げた。土坑や堅穴住居、溝などの遺構は任意に土層観察用のベルトを残し調査した。

## 第2節 遺跡の位置と環境（第1図）

山武郡芝山町は新東京国際空港の南東側に南北に細長く伸びる内陸部の町である。北は成田市、東は多古町、南は横芝町、松尾町、山武町そして西は富里市に接している。下総台地の東部に位置し、北辺部は栗山川水系の高谷川や木戸川の水源となり、両河川は北西から南東に向かって流れ、九十九里海岸平野を経て太平洋に注いでいる。事業地は新東京国際空港のすぐ南側に位置し、空港を境に成田市と接する。事業地内には南から順に古宿・上谷遺跡、大堀切遺跡、上宿遺跡、井森戸遺跡の合計4遺跡が所在する。いずれの遺跡も高谷川支流の河川によって開析された小支谷に面した台地上から緩斜面部に立地する。

今回調査を行った上宿遺跡は山武郡芝山町岩山大字大宿1734-1ほかに所在する。栗山川水系の高谷川支流の標高40mの台地上に位置する。上宿遺跡の調査は過去に成田松尾線および当該事業において2度にわたり調査が行われ、縄文時代の遺物包含層と古墳時代の住居跡、江戸時代の土坑墓等が検出された<sup>1)</sup>。

井森戸遺跡は山武郡芝山町岩山字井森戸126ほかに所在する。栗山川水系の高谷川支流の最奥部の標高42mの台地上および斜面部に位置する。井森戸遺跡の調査は過去に成田松尾線で行われた。また別事業である整備貨物地区で同遺跡の隣接部分の調査が平成14年度～平成15年度にわたって行われている。昭和57年度～58年度にかけて行われた成田松尾線関連の調査では縄文時代早期の土坑および土器片を中心とする遺物、古墳時代後期の住居跡および遺物などが主に検出された。

芝山町には多数の埋蔵文化財が所在し、古くから多くの遺跡の発掘調査が行われてきた。また、隣接する成田市域でも空港を中心に広大な面積の調査がなされており、近年その様子が解明されつつある。特に、この周辺は旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺跡が多いことで知られている<sup>2)</sup>。

注1 伊藤智樹ほか 昭和61年「主要地方道成田松尾線Ⅳ 小池元高田遺跡 柳谷遺跡 上宿遺跡 井森戸遺跡」(財)千葉県文化財センター

2 「芝山町史通史編上」平成7年11月芝山町



新東京国際空港

新東京国際空港

舞田市

井森戸遺跡

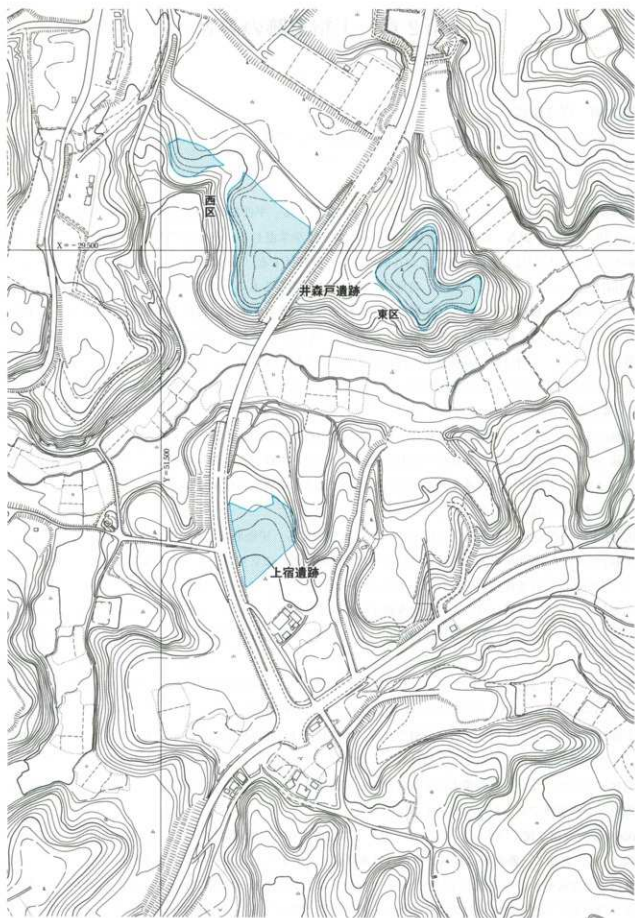
上宿遺跡

第1図 遺跡位置図 (1:25,000 多古・新東京国際空港)

高田西部

高田

多古・新東京国際空港



第2図 上宿遺跡・井森戸遺跡周辺地形図 (S=1/5,000)

## 第2章 上宿遺跡の調査

### 第1節 縄文時代

縄文時代の遺構は、陥穴3基、土坑4基が検出された。遺構からは若干の縄文時代の土器片が出土しているものもある。

#### 1 遺構

002号陥穴（第5図，図版4）6C-74グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸3.80m、短軸1.50m、深さ1.85mを測る。ローム粒主体でロームブロック少量混じり、やや密で軟らかい褐色土である。断面形は短軸で壁がほぼ垂直に立ち上がり開口部でやや外反する。長軸で坑底から0.5m～1.0mの高さまで0.6mほどオーバーハングしている。坑底は北側にやや傾斜するもののほぼ平坦である。土層セクションは上から1層～5層に分層される。1層はローム粒を含み締まりがある暗褐色土である。2層はローム粒を含み1層より明るく締まりがある暗褐色土である。3層はローム粒を含み2層より明るく締まりがある暗褐色土である。4層はローム粒を多く含み締まりがある褐色土である。5層はローム粒、ロームブロックを多く含み締まりがある褐色土である。覆土中より縄文時代後期の土器片が1点出土している。

003号土坑（第5図，図版4）5C-44グリッドに位置する。平面形はやや不整な楕円形で、長軸1.47m、短軸0.90m、深さ0.23mを測る。坑底はやや凸凹気味で壁際はやや斜めに立ち上がる。覆土は1層～2層に分層される。堆積状況は自然堆積と思われる。1層はローム粒を少し含み締まりが普通の黒褐色土である。2層はローム粒を多く含み締まりがある暗褐色土である。遺物等の検出はないものの覆土状況から判断して縄文時代の土坑であると判断した。

004号土坑（第5図，図版4）5D-65グリッドに位置する。平面形は丸みの強い楕円形で、長軸1.25m、短軸1.00m、深さ0.30mを測る。坑底はほぼ平坦で壁際は斜めに立ち上がる。覆土は1層～3層に分層される。堆積状況は自然堆積と思われる。1層はローム粒、ハードロームブロックを僅かに含み締まりのある黒褐色土である。2層はローム粒を含み締まりがある暗褐色土である。3層はローム粒を多く含み締まりがある暗褐色土である。遺物等の検出はないものの覆土状況から判断して縄文時代の土坑であると判断した。

005号土坑（第5図，図版4）4C-87グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸1.03m、短軸0.82m、深さ0.18mを測る。坑底は平坦で壁から開口部にかけてやや斜めに緩やかに立ち上がる。覆土は南側がやや攪乱気味であるが1層～2層に分層される。堆積状況は自然堆積と思われる。1層はローム粒を含み締まりが普通の暗褐色土である。2層はローム粒を多く含み締まりが普通の暗褐色土で1層よりやや明るい。遺物等の検出はないものの覆土状況から判断して縄文時代の土坑であると判断したが攪乱部分の状況が不明瞭なため遺構であるかどうか若干の疑問が残る。

006号陥穴（第5図，図版4）4C-86グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸2.15m、短軸1.15m、深さ1.85mを測る。断面形は短軸で壁がほぼ垂直に立ち上がる。長軸でも壁がほぼ垂直に立ち上がる。坑底は方形で緩やかに中央部が窪む。土層セクションは上から1層～10層に分層される。1層はローム粒を多く含み締まりがない暗褐色土でこの層のみ自然堆積と思われる。2層はローム粒を含みハードロームブ

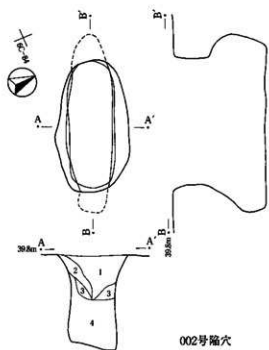


第3図 上宿遺跡上層確認トレンチ及び本調査範囲、遺構配置図 (S=1/1,000)

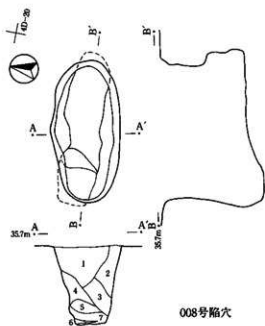


第4図 上宿遺跡下層確認グリッド配置図 (S=1/1,000)

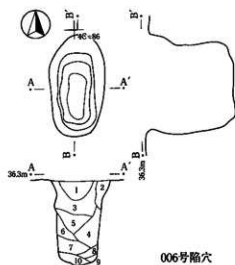




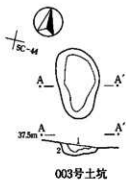
002号陥穴



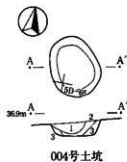
008号陥穴



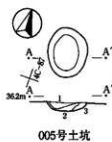
006号陥穴



003号土坑



004号土坑



005号土坑



第5图 縄文時代陥穴、土坑 (1/80)

ロックを少し含み1層よりやや明るく締まりがない暗褐色土である。3層はローム粒を含みハードロームブロックを少し含み締まりがない黒褐色土である。4層はローム粒を少し含み締まりがない黒褐色土である。5層はローム粒を僅かに含み締まりがない黒褐色土である。6層はローム粒、ハードロームブロックを少し含み締まりがない黒褐色土である。7層はローム粒を僅かに含みハードロームブロックを少し含み締まりがない黒褐色土である。8層はローム粒を僅かに含みハードロームブロックを含む黒褐色土である。9層はローム粒を僅かに含み締まりがない黒褐色土である。10層はローム粒、焼土粒を僅かに含み締まりがない黒褐色土である。2層～10層までは人為堆積と考えられる。覆土は全体的に締まりがない。覆土中より縄文時代中期加曾利E式の土器片が1点出土している。

008号陥穴（第5図、図版4）4C-29グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長軸3.22m、短軸1.45m、深さ2.05mを測る。断面形は短軸でやや斜めに立ち上がる。長軸では坑底西側部分がやや下がり東側に向かってやや高くなる。壁は両側ともにオーバーハング気味に立ち上がる。土層セクションは上から1層～7層に分層される。1層はローム粒、ハードロームブロックを少し含み締まりがある黒褐色土である。2層はローム粒を多く含みハードロームブロックを少し含み締まりが普通の暗褐色土である。3層はローム粒を含みハードロームブロックを多く含み締まりがある暗褐色土である。4層はローム粒を多く含みハードロームブロックを少し含み締まりが普通の暗褐色土である。5層はローム粒を含みハードロームブロックを僅かに含み締まりが普通の黒褐色土である。6層はローム粒を含み締まりが普通の黒褐色土である。7層はローム粒を多く含みハードロームブロックを含み締まりがある暗褐色土である。自然堆積と思われる。覆土中より遺物の検出はなかったが形態より陥穴と判断した。

## 2 遺物

包含層他出土遺物（第6図1～11、図版5）縄文時代の遺物は遺構内の覆土及び調査区から少量出土している。1は縄文時代前期岡山I期の深鉢形土器の底部破片で上に羽状縄文、下に異節縄文を施文している。2～4は縄文時代中期後半加曾利E式の土器片である。縄文を地文に太い沈線を配している。2、3は加曾利EⅡ頃の土器片である。3は006号陥穴の覆土から出土しており陥穴の作られた時期もそれ以前である可能性は高い。4は胴部破片で縄文を地文にして縦方向に粘土の隆帯を貼り付けてあり、2、3より若干古いと思われる。5～11は縄文時代後期の土器片である。加曾利B式の土器が主体で検出された土器片の多くを占めている。5は口縁部破片である。縄文を地文にして口唇部に粘土紐を指頭で貼り付け装飾を施す。7ではさらに沈線を施す模様構成もみられる。8は002号陥穴の覆土中から検出されている。前回の調査区からも該期の土器片が多数検出されており、同様な傾向が窺われる。10は胴部破片である。下半部は磨きによる無文帯、上半部は細い粘土紐による刻みの入った隆帯で区画より上を磨り消し縄文を地文にして斜め方向の沈線を充填してある。

## 第2節 弥生時代～平安時代

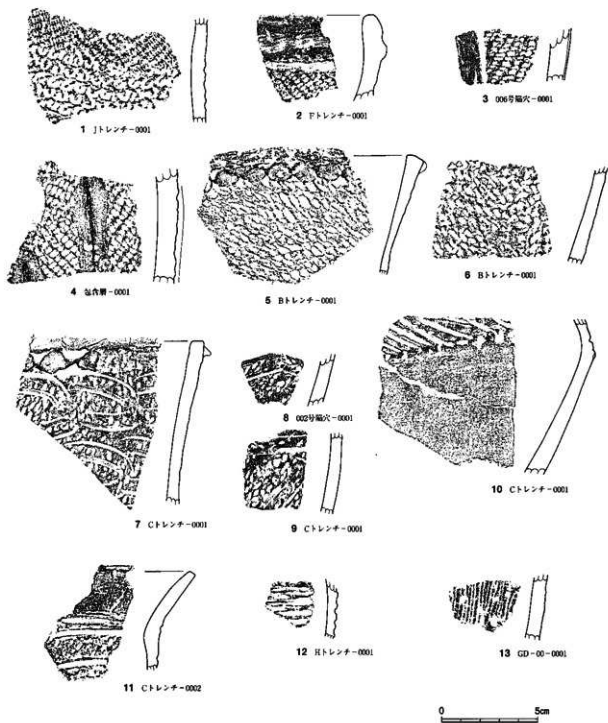
### 1 遺構

弥生時代から奈良・平安時代の遺構は、全く検出されなかった。

### 2 遺物

包含層他出土遺物（第6図12～13、図版5）

包含層出土の土器片の中に弥生時代の土器片と思われるものが2点確認されたのでここで上げておく。い



第6図 縄文時代・弥生時代遺物実測図 (1/2)

いずれも胴部破片である。12は条痕文、13は条線の施されたものである。いずれも小破片である。対岸の井森戸遺跡でも弥生時代の包含層が確認されているため関連があるかもしれない。

### 第3節 中・近世

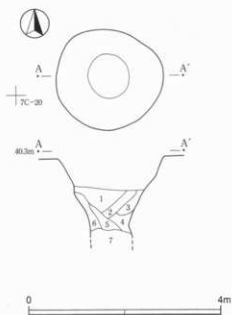
中・近世の遺構は、井戸状遺構1基が検出された。

#### 1 遺構

001号井戸状遺構（第7図）7C-20グリッドに位置する。平面形は円形で、径2.20m、深さ2.00m以上である。下底部径0.90mほどで深くなるようであるが危険防止のため以下は下げるのを中止した。断面形は崩落のため扇状に開口する。元々円筒形になると思われる。土層セクションは上から1層～7層に分層される。1層はローム粒を含み、ハードロームブロックを少し含み、炭化物、焼土粒を僅かに含み締まりがない暗褐色土である。2層～7層はローム粒、砂を少し含み締まりがない黒褐色土である。覆土中からの遺物は検出されなかったが、覆土の状況、形態等から中世末～近世初頭にかけての井戸ではないかと思われる。

#### 2 遺物

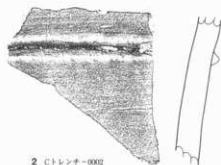
包含層他出土遺物（第8図1～8、図版5）中・近世の遺物は遺跡の調査区から少量出土している。1は中世末の大甕の底部破片で外面を砥石として再利用したものである。2は火鉢の破片で他に同一個体の破片が数点見られる。時期的には4のカワラケと同時期になるものかと思われる。4はカワラケで岩山地区のカワラケ編年1）によるとⅡ期（17世紀後半から18世紀はじめ）にあたる。3は大皿の破片、5は土師質の播鉢の底部破片、6～7は染め付け茶碗の破片、8は皿の破片である。いずれもカワラケとほぼ同時期のものと思われる。



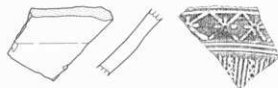
第7図 中・近世井戸状遺構 (1/80)



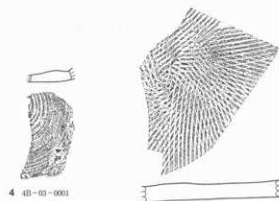
1 表層-0001



2 Cトレンナ-0002



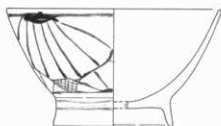
3 Jトレンナ-0001



4 4B-01-0001



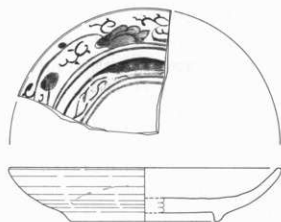
5 6D-60-0001



6 Aトレンナ-0001



7 Aトレンナ-0001



8 表層-0001

第8図 中・近世遺物実測図 (1/2)

## 第3章 井森戸遺跡の調査

### 第1節 旧石器時代

旧石器時代は、3か所で総計17点の石器剥片類が検出されている。Ⅳ層の第1、第2石器集中地点、Ⅵ層の第3石器集中地点と分布しているがいずれも規模は小さい。他に2か所で単独で出土している。

#### 1 第1石器集中か所（第12, 13図1～3, 図版16, 19）

出土状況 4D-42, 51, 52グリッドを中心に黒曜石が5点出土している。出土層位は概ねⅣ層に当たるものと思われる。

遺物 1は黒曜石の剥片である。黒曜石はいわゆる細かな夾雑物が多く入るやや不透明で黒みの強いものである。そのほかの黒曜石もほぼ同一の黒曜石と思われる。背が厚く多方位より小剥離が繰り返えされ一見小さい石核のようである。また縁辺部には細かなリタッチも見られる。2は比較的厚みのある小形の剥片で1と同様に多方位の剥離面を背面側に残す。3はやや縦長の不整形な剥片で側面に小剥離面を残す。1～3はいずれも同一の黒曜石の石材であるが接合はしない。また他に2点の黒曜石の破片も見られるがいずれも接合はしない。

#### 2 第2石器集中か所（第14, 15図1～3, 図版17, 19）

出土状況 5D-26グリッドを中心に珪質頁岩2点、黒曜石1点、礫1点、合計4点が出土している。出土層位は概ねⅣ層に当たるものと思われる。

遺物 1は珪質頁岩のリタッチ・ド・フレイクである。珪質頁岩は濃い緑～灰色がかつたもので一部に乳白色のガラス質の部分が認められる。いわゆる嶺岡産の珪質頁岩と思われる。背部はそれほど厚くなく、左側、上方向からの剥離が認められる。また右側縁部の加工と思われる小剥離が見られる。2はやはり1と同様に珪質頁岩である。比較的厚みのある小形の剥片で1と同様に多方位の剥離面を背面側に残す。また背面の一部に礫面を残す。3は比較的薄い黒曜石の小剥片である。

#### 3 第3石器集中か所（第16図1～2, 図版18, 19）

出土状況 7H-07グリッド, 7H-19グリッドを中心に珪質頁岩2点、礫8点の合計10点が出土している。出土層位は概ねⅢ層～Ⅶ層に当たるものと思われる。便宜上一つの石器群として説明を行う。

遺物 1は珪質頁岩のリタッチ・ド・フレイクである。石材は焦げ茶色のガラス質の強いものである。縦長の剥片の片側縁部には使用痕とおぼしき不連続の大小様々な剥離が見られる。Ⅵ層～Ⅶ層にかけての石器と思われる。周辺部分を拡張してみたが関連する遺物は検出されていない。2は珪質頁岩の小剥片である。全体に風化が著しい。斜面に向かうところで正確な出土層位は不明である。その他の礫であるが斜面に落ち込むように分布している。調査時の見解では縄文時代のもかもしれないとあったが、2次堆積の層から出ているためどちらともいえない。

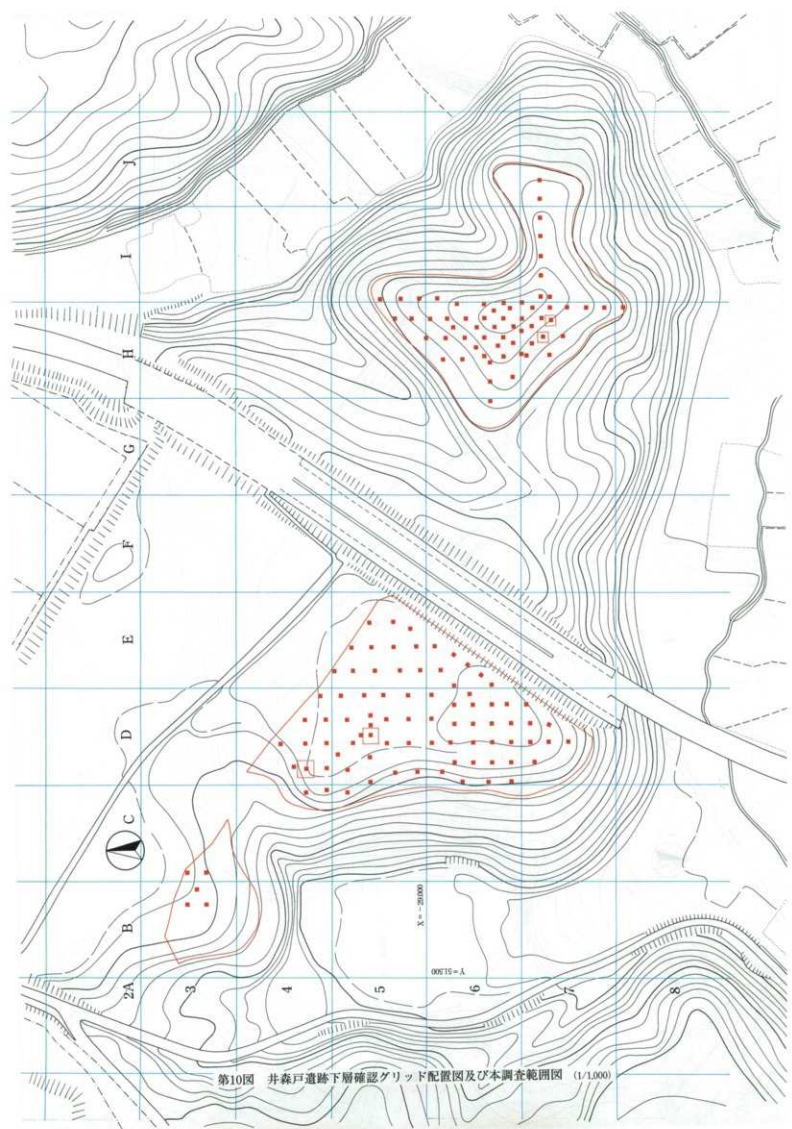
#### 4 単独出土の旧石器（第36図1～2, 図版19）

出土状況 6D-03, 6H-69グリッドで各1点ずつ縄文時代の包含層の調査中に旧石器時代の遺物が検出されている。

遺物 1はいわゆるトロトロ石と呼ばれる安山岩B製の尖頭器である。両面とも丁寧な調整で柳葉

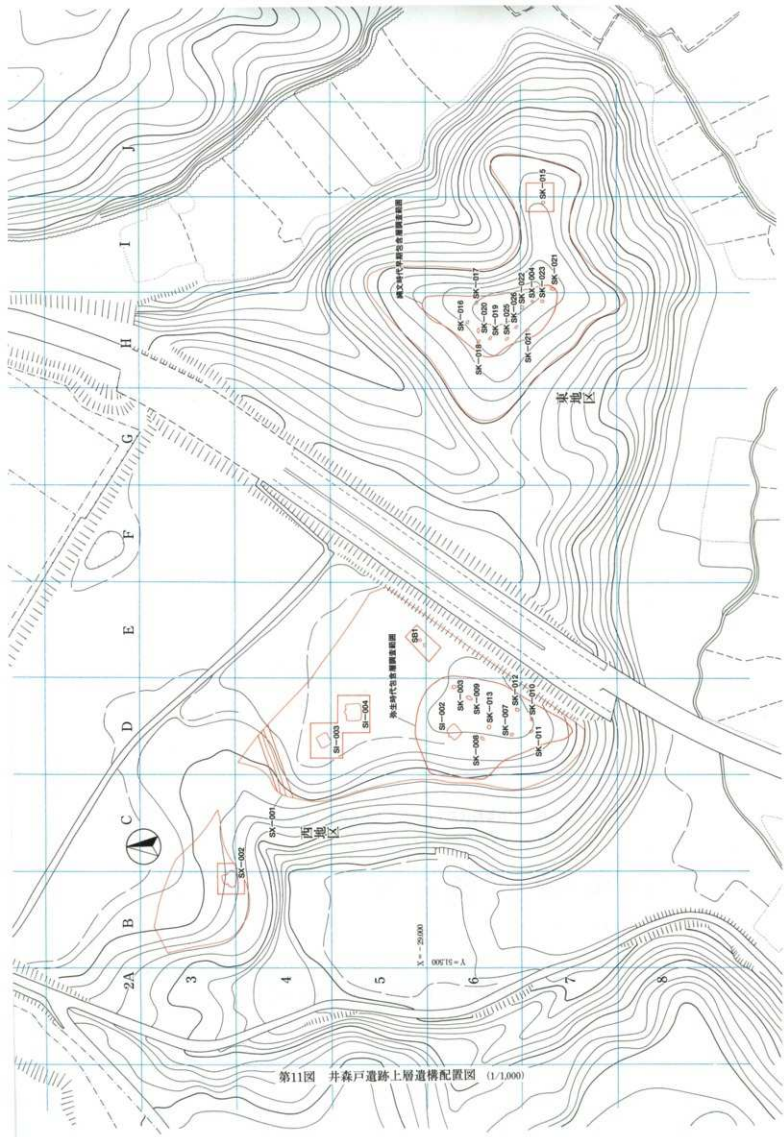


第9図 井森戸遺跡上層確認トレンチ配置図 (1/1000)

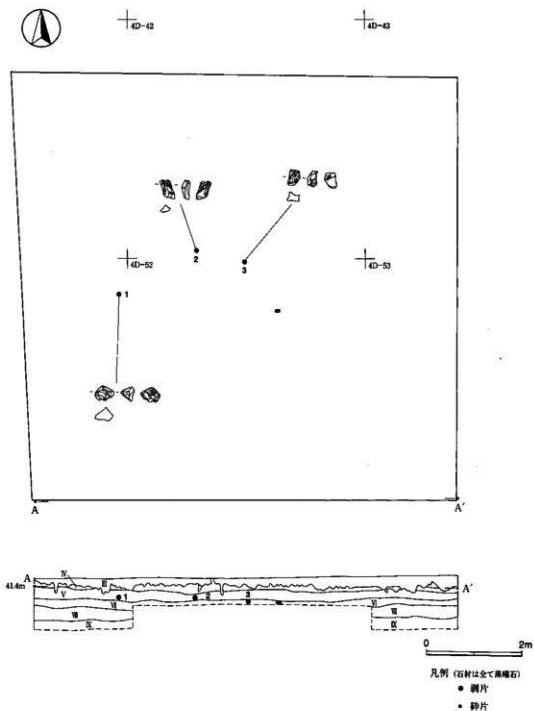


第10図 井森戸遺跡下層確認グリッド配置図及び本調査範囲図 (1/1,000)

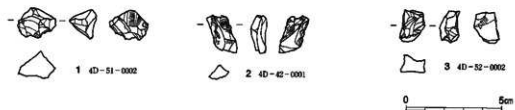




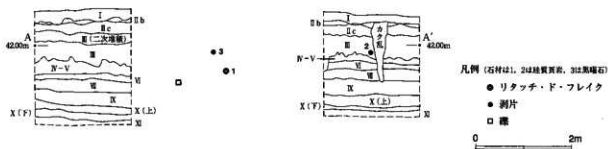
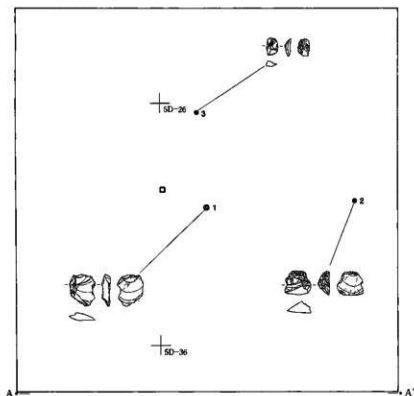
第11图 井森戸遺跡上層遺構配置图 (1/1,000)



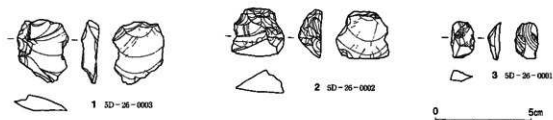
第12図 旧石器時代第1石器集中場所出土状況図 (S-1/80)



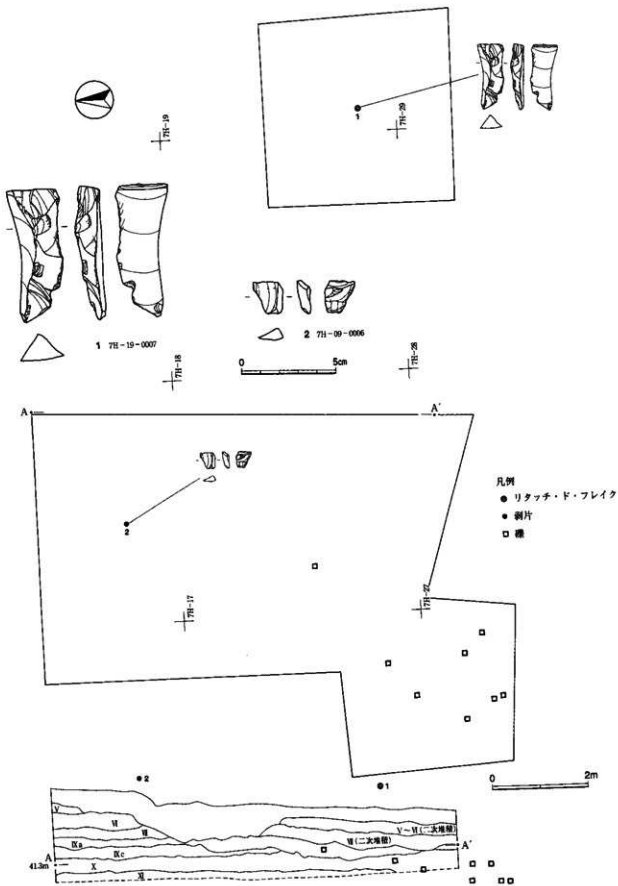
第13図 旧石器時代第1石器集中場所出土石器実測図 (S-1/2)



第14図 旧石器時代第2石器集中か所石器出土状況図 (S=1/80)



第15図 旧石器時代第2石器集中か所出土石器実測図 (S=1/2)



第16図 旧石器時代第3石器集中か所出土状況 (S=1/100) 及び石器実測図 (S=1/2)

形に仕上げられてある。全長5.1cm, 幅1.7cm, 厚み0.65cm, 重量5.1gである。2はチャート製の細石核である。方形の厚みのある小剥片の背部側に2条の剥離面が観察される。全長1.7cm, 幅1.4cm, 厚み1.0cm, 重量3.2gである。どちらも元々はⅢ層上位の遺物と思われる。

## 第2節 縄文時代

縄文時代の遺構は、陥穴7基, 土坑10基が検出された。遺構からは若干の縄文時代の土器片が出土しているものもある。

### 1 遺構と遺物

#### SK-008号陥穴（第18, 23図7～10, 図版12, 22）

（遺構）6D-54グリッドに位置する。平面形はやや隅丸長方形気味で、長辺2.00m, 短辺1.38m, 深さ2.20mを測る。坑底はほぼ平坦で長方形になる。ピット等は全く見られない。壁際はほぼ垂直に立ち上がり崩落のため開口部に向かってやや外反する。覆土は上から1層～10層まで分けられる。1層はローム細粒を多く含み締まりのある暗～黒褐色土である。2層は炭化粒, 焼土粒を含む黒褐色土である。3層はローム細粒, 焼土粒を含み締まりのある暗褐色土である。4層は2, 3層と同質の暗～黒褐色土である。5層はローム粒を含み締まりがある黄褐色土である。5'層は5層のより明るい部分である。6層は砂質で粒子が細かい。ⅡC層に似ているがやや軟らかい。褐色土である。7層はローム細粒, 炭化粒を多量に含み締まりなく軟質の暗褐色土である。8層はローム細粒が主体で軟らかく締まりのない褐色土である。9層は8層よりさらに軟質で大きなロームブロックが見られない褐色土である。10層はローム堆積土で貼り床状になり, 堅く締まる黄褐色土である。なお上部の堆積土層からカマドもしくは炭窯等の覆土の混入の可能性がある。

（遺物）遺物は覆土上層一括で縄文前期（黒浜期）の土器片, 土師器片等が検出されている。7は土師器の甕の胴部破片, 8は土師器の鉢等の破片と思われる。9, 10は縄文時代前期（黒浜期）の土器片である。

遺構は縄文時代前期以前に作られた陥穴と思われる。

#### SK-009号陥穴（第18図23図11, 図版12, 22）

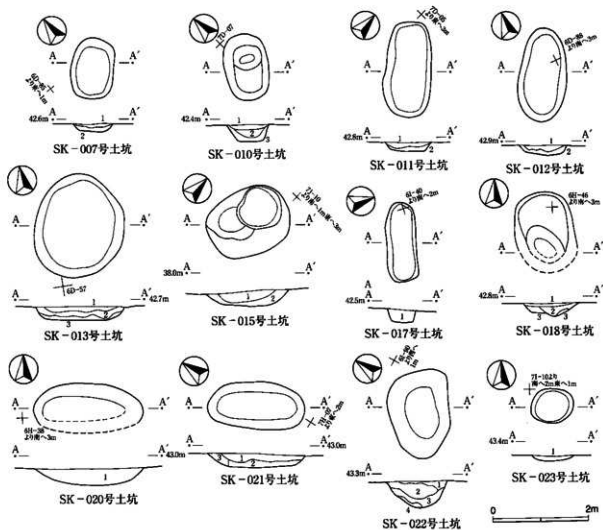
（遺構）6D-39グリッドに位置する。平面形はやや隅丸長方形気味で、長辺1.75m, 短辺1.10m, 深さ2.05mを測る。坑底は中央部分でやや下がり気味である。壁はほぼ垂直に立ち上がり, 崩落のためオーバーハング気味の部分も見られる。覆土は上から1層～6層まで分けられる。1層は炭化粒, 焼土粒を多量に含み締まりのある暗褐色土である。2層は黄褐色土, 暗褐色土のブロック混じりで締まりがややある褐色土である。3層は砂が多く混ざるⅢ層ソフトローム層の崩落土である褐色土である。4層は締まりがなく粒の粗い褐色土である。5層は軟質の黄褐色土である。6層は締まりがなくロームブロックを多量に含む褐色土である。

（遺物）遺物は覆土一括で縄文時代後期～晩期の土器片が1点検出されている。11は小破片なので詳細は不明であるが細沈線で施文されており, 異方向の細沈線部分が見られる。あるいは弥生時代の土器片かもしれない。

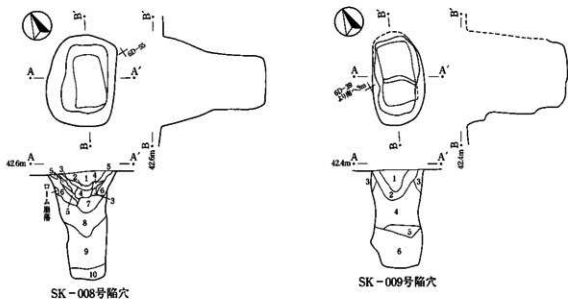
遺構は縄文時代の陥穴になると思われる。

#### SK-010号土坑（第17図, 23図12, 図版13, 22）

（遺構）7D-07グリッドに位置する。平面形はやや隅丸長方形気味で、長辺1.42m, 短辺0.92m, 深さ0.38



第17図 SK (土坑) 平面図及びセクション図 (S=1/80)



第18図 SK (陥穴) 平面図, セクション図及びエレベーション図1 (S=1/80)

mを測る。坑底は北東中央部分でやや下がりが気味である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は上から1層～3層まで分けられる。1層は締まりのややある黒褐色土である。2層は締まりがややあり、ローム粒が斑に含まれる暗褐色土である。3層は締まりがあり、ロームが主体の黄褐色土である。

(遺物) 遺物は覆土一括で縄文時代早期I群(井草式)の土器片鋸が1点出土している。12は全長3.3cm、幅0.55cm、重量12.7gである。

遺構の性格については不明である。

#### SK-012号土坑(第17図, 図版13)

(遺構) 6D-88グリッドに位置する。平面形はほぼ楕円形で、長軸2.02m、短軸1.04m、深さ0.40mを測る。坑底はやや中央部が皿状にくぼみ周辺の壁際がやや上がり気味である。壁はやや斜めに立ち上がる。覆土は上から1層～2層に分けられる。1層は締まり、粘性ともややある黒褐色土である。2層は締まりがややあり、ロームが多量に含まれる暗褐色土である。

(遺物) 遺物は全く見られない。

縄文時代の土坑と考えられるが遺構の性格については不明である。

#### SK-013号土坑(第17, 23図15～19, 図版13, 22)

(遺構) 6D-57グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、径1.88m～2.18m、深さ0.32mを測る。坑底はほぼ平坦で壁は比較的緩やかに立ち上がる。覆土は上から1層～3層に分けられる。1層はローム粒が微量に含まれる黒褐色土である。2層はロームが斑に含まれる暗褐色土である。3層は締まり、粘性がありローム主体の黄褐色土である。

(遺物) 遺物は覆土中より縄文時代前期、花積下層式の土器片が少量検出されている。15～19は縄文時代の前期前半花積下層式の土器片である。いずれも深鉢の破片であるが接合関係は認められない。

当該時期頃の小さな貯蔵穴のような用途が考えられる土坑であろうか。

#### SK-015号土坑(第17図, 図版13)

(遺構) 7J-10グリッドに位置する。平面形はやや楕円形で、長軸1.68m、短軸1.38m、深さは0.36mを測る。坑底は中程でやや落ち込み、一部で段差が見られる。全体に凹凸があり平坦ではない。壁際はやや緩やかに立ち上がるようである。覆土は上から1層～2層に分けられる。1層はロームブロック、炭化粒を含み締まりのある黒褐色土である。2層はロームブロック、炭化粒を含み締まりのある暗褐色土である。

(遺物) 遺物は全く見られない。

周辺より縄文時代早期の土器片が検出されている。縄文時代の土坑であろうか。

#### SK-016号陥穴(第19図, 図版13)

(遺構) 6H-38グリッドに位置する。平面形はほぼ楕円形で、長軸2.05m、短軸1.25m、深さは2.30mを測る。坑底は中程でやや落ち込み、漏斗状に傾斜し、一部で段差が見られる。全体に凹凸があり平坦ではない。壁際はほぼ垂直に立ち上がり一部で崩落のためオーバーハングする。覆土は上から1層～10層に分けられる。1層は焼土粒、炭化粒を少量含み締まりの弱い黒色土である。2層はソフトローム主体で締まりの弱い暗褐色土である。3層はロームブロック、炭化粒微量に含み締まりの弱い黒色土である。4層はソフトローム主体で締まりの弱い暗褐色土である。これらは自然堆積と考えられる。5層はロームブロックを含み粘性の強い黒褐色土である。6層は炭化粒を微量に含み締まりがない暗褐色土である。7層はローム小ブロックを微量に含む灰褐色土である。8層はロームブロックを斑に含み、炭化粒を微量に含み、締

まりが弱い褐色土である。9層はやや白みを帯び締まりがなく粘性のある褐色土である。10層は地山ロームが主体で粘性、締まりがある明褐色土である。

(遺物) 遺物は全く見られない。

形態から考えると縄文時代の陥穴であろう。

#### SK-017号土坑 (第17, 23図20, 図版14, 22)

(遺構) 6I-40グリッドに位置する。平面形はやや長方形に近い楕円形で、長軸1.56m、短軸0.63m、深さは0.28mを測る。坑底はほぼ平坦である。壁際はほぼ垂直に立ち上がる。覆土はローム粒が少量混ざり締まりがある暗褐色土である。

(遺物) 遺物は縄文時代の後期の土器片が少量検出されている。20は浅鉢の口縁部から胴部下下部にかけての破片である。LR縄文を地文にして胴部以下は磨り消しされている。

土坑墓とも考えられるが確証はない。

#### SK-018号土坑 (第17図, 図版14)

(遺構) 6H-49グリッドに位置する。平面形は確認調査時に一部を消失したものの楕円形に近い形状になると思われる。長軸は不明であるが短軸は1.35m、深さ0.20mである。坑底は中央部分が落ち込みボール状になる。壁もやや斜めに立ち上がる。覆土は上から1層～3層に分かれる。1層は締まりが弱く炭化粒が微量に含まれる暗褐色土である。2層は締まりが弱くロームブロックが少量、炭化粒が微量に含まれる暗褐色土である。3層は締まりが弱くロームが斑に多く含まれ、炭化粒が微量に含まれる暗黄褐色土である。

(遺物) 遺物は全く見られない。

形態から考えると縄文時代の土坑と思われる。用途は不明である。

#### SK-019号陥穴 (第19図, 図版14)

(遺構) 6H-56グリッドに位置する。平面形は開口部では楕円形、坑底部分で長方形になる。長軸は1.92m、短軸1.17m、深さ2.07mである。坑底は中央部がやや下がりが気味であるが、ほぼ平坦になる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は上から1層～7層に分かれる。1層は炭化粒、ローム粒が少量含まれる黒色土である。2層は炭化粒が微量に含まれる黒色土とソフトロームが混ざる土である。3層は締まりが弱くロームブロックが少量混ざる褐色土である。4層は締まりが弱くロームブロックが少量混ざる暗褐色土である。5層は締まりが弱くロームブロックが少量混ざる黄褐色土である。6層は締まりが弱くロームブロックが少量混ざる暗黄褐色土である。7層は締まりが弱くロームブロックが少量混ざる灰黄褐色土である。

(遺物) 遺物は全く見られない。

形態から考えると縄文時代の陥穴である。

#### SK-020号土坑 (第17図, 図版14)

(遺構) 6H-47グリッドに位置する。平面形は確認調査時に一部を消失したものの長楕円形に近い形状になると思われる。短軸は不明であるが長軸は2.18m、深さ0.33mである。坑底は中央部分が落ち込みボール状になる。壁もやや斜めに緩やかに立ち上がる。覆土は1層で締まりがなく粘性がややあり、炭化粒が微量、ロームブロックが少量に含まれる暗褐色土である。

(遺物) 遺物は全く見られない。

形態から考えると縄文時代の土坑と思われる。用途は不明である。あるいはSK-021号土坑のように焼土を伴うような施設であった可能性も考えられる。



#### SK-021号土坑 (第17, 23図21, 22, 図版14)

(遺構) 6H-97グリッドに位置する。平面形は長楕円形に近い形状になると思われる。長軸は2.07m, 短軸0.97m, 深さ0.30mである。坑底はほぼ平坦で壁際はやや斜めに上がり気味である。壁はやや斜めに立ち上がる。覆土は上から1層～3層に分けられる。1層は炭化粒, 焼土粒が比較的多く見られ締まり粘性とともにある暗褐色土である。2層は炭化粒, 焼土粒が微量に含まれ, 締まり粘性とともにある黄白褐色土である。3層は炭化粒, 焼土粒が微量に含まれ, 締まり粘性とともあり, ローム小ブロックが含まれる黄褐色土である。1層中にはまとまった焼土ブロックも見られる。

(遺物) 21は小破片なので判別しづらいが, 縄文時代早期三戸式土器の破片であろう。胎土が砂粒が多くやや粗い感じで無文である。22は縄文時代早期沈線文系の土器片, おそらく田戸下層相当と思われる土器片である。

形態から考えると縄文時代の土坑と思われる。用途は地床炉かあるいはそれに類するものの可能性が高い。

#### SK-022号土坑 (第17, 23図23～26, 図版15)

(遺構) 6H-99グリッドに位置する。平面形は楕円形に近い形状になると思われる。長軸は1.78m, 短軸1.22m, 深さ0.55mである。坑底は中央部が一番深く壁際に向かってややボール状に立ち上がる。壁もやや斜めに立ち上がる。覆土は上から1層～4層に分けられる。1層はローム粒を斑に多く含み, 締まりがやや弱く粘性がある黒褐色土である。2層はロームを少量含み, 締まりがやや弱く粘性がある黒色土である。3層はロームブロックを少量含み, 締まりがやや弱く粘性がある黒褐色土である。4層はロームと黒色土が混ざり, 締まりがやや弱く粘性がある暗褐色土である。

(遺物) 遺物は縄文時代の早期, 沈線文系の土器片が見られる。22は横方向の細沈線で施文されている。25, 26は斜め方向の沈線と横方向の沈線で区画されている。三戸～田戸上層にかけての土器片である。

土坑の形態から用途を限定することはできない。

#### SK-023号土坑 (第17図, 図版15)

(遺構) 7I-10グリッドに位置する。平面形は円形に近い形状になると思われる。径0.68m～0.88m, 深さ0.10mである。坑底はほぼ平坦で壁も斜めに立ち上がる。壁床面ともはつきり検出できた。覆土は炭化粒が多量に検出, 焼土粒が微量に検出されるため炉という可能性は非常に高い。縄文時代早期の土器群の包含層中から検出されているため, なおかつ住居跡がまわりにあった可能性も否定できない。

(遺物) 全く検出されていない。

#### SK-024号陥穴 (第19, 23図27, 図版15, 22)

(遺構) 7I-21グリッドに位置する。平面形は長楕円形に近い形状になると思われる。長軸2.18m, 短軸1.00m, 深さ2.00mである。旧石器時代の確認調査時に検出されたもので縄文時代早期頃の陥穴と思われるものである。坑底部分は細長いもののほぼ平坦で壁際から長軸方向ではやや斜めに立ち上がり開口部付近では急激に, 短軸方向ではほぼ垂直に立ち上がる。覆土は上から1層～11層に分けられる。1層はローム粒, ロームを少量含み締まりが普通の黒褐色土である。2層は1層よりロームが含まれる黒褐色土である。3層はローム粒, ロームブロックを含み締まりが普通の暗褐色土である。4層はローム粒, ロームブロックを少量, 黒色土をやや含み締まりが普通の暗褐色土である。5層はローム粒主体, ロームブロック含みで締まりが普通の暗褐色土である。6層はローム粒主体, ロームブロック含みでやや締まりがあり密な暗

褐色土である。7層はローム粒主体、ロームブロック含みで締まりが普通の暗褐色土である。8層はローム粒主体、ロームブロック含みで締まりがやや軟らかい暗褐色土である。9層はローム粒主体、ロームブロック含みで締まりが普通の暗褐色土である。10層はローム粒主体、ロームブロック含みで締まりがない暗褐色土である。11層はローム粒主体、ロームブロック含みで締まりがある暗褐色土である。

(遺物) 27は覆土中層から検出されている。縄文時代早期沈線文系土器の破片と思われる。無文でやや焼成は不良である。胎土も砂粒が多く粗い。

#### SK-025号陥穴 (第19図, 図版15)

(遺構) 6H-76グリッドに位置する。平面形は楕円形に近い形状になると思われる。長軸1.80m, 短軸0.70m, 深さ1.78mである。旧石器時代の確認調査時に検出されたもので縄文時代早期頃の陥穴と思われるものである。坑底部分は細長く南東方向に落ち込み北西側で階段状に上がる。壁は長軸、短軸両方向に急激に立ち上がる。覆土は上から1層~7層に分けられる。1層はローム粒主体、ロームブロック、黒褐色土を少し含む暗褐色土である。2層はローム粒主体、ロームブロックを含み、1層よりやや明るく軟らかい暗褐色土である。3層はローム主体で粘性があり、軟らかい暗褐色土である。4層はローム粒主体でロームブロック混じり、炭化粒を少量含み粗く軟らかい褐色土である。5層はローム粒主体でロームブロックが少量混じり、やや密で軟らかい褐色土である。6層はローム粒とロームブロック主体で暗褐色土混じりで硬い暗褐色土である。全体に色調がほぼ同じで短期間に埋め戻しが行われた可能性が高い。

(遺物) 全く検出されていない。

#### SK-026号陥穴 (第19図, 図版15)

(遺構) 6H-87グリッドに位置する。平面形は長楕円形に近い形状になると思われる。長軸2.30m, 短軸0.65m, 深さ2.10mである。旧石器時代の確認調査時に検出されたもので縄文時代早期頃の陥穴と思われるものである。坑底部分は細長いもののほぼ平坦で壁際から長軸方向ではやや斜めに立ち上がり開口部付近では急激に、短軸方向ではほぼ垂直に立ち上がる。覆土については黄褐色土を主体とするローム崩落土で埋められていたもようである。

(遺物) 全く検出されていない。

## 2 包含層出土土器

### 第I群土器

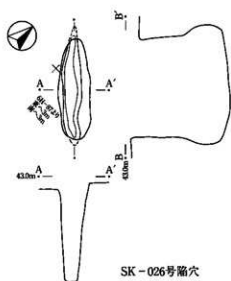
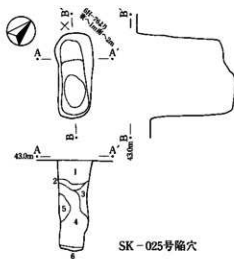
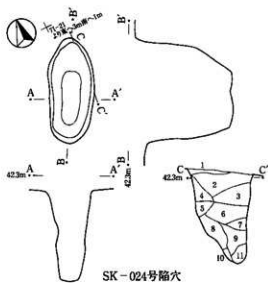
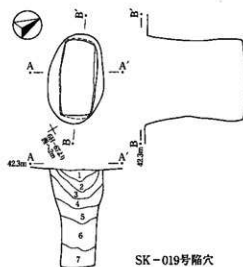
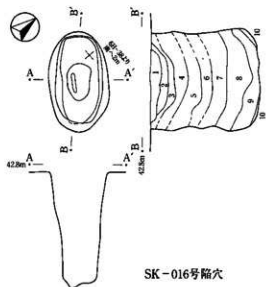
縄文時代早期の土器群である。

#### 第I類 (第25図1~19, 図版22, 23)

燃糸文系土器群である。全部で173点出土し、6D, 6Hグリッド付近より特に多く出土した。1~4は口唇部が大きく外反し、口唇部に原体が圧痕される。口唇部直下は横方向の縄文や指頭圧痕、横ナデなどが観察される。井草I式に比定される。5~19は口唇部がやや外反するもののあまり顕著ではない。口唇部直下には縦方向の燃糸文や縄文を施したものが多い。井草II式~稲荷台式に比定される。

#### 第II類 (第28図20~52, 図版24)

沈線文系土器群である。全部で318点出土し、6D, 6Hグリッド付近より特に出土した。20~30は三戸式土器に比定される。横方向の細い平行沈線で施文されている。胎土には細かな石英砂が多く含まれる。24, 26は無文で斜めの条線状の細線が見られる。比較的大粒の石英砂が多く含まれる。29はこれらの尖底部分である。30は三戸式土器の口縁部~胴部下端部までの個体である。胎土は小粒の石英砂が多く含まれる。口



0 2m

第19図 SK (陥穴) 平面図, セクション図及びエレベーション図2 (S=1/80)

縁部から胴部にかけては横方向の複数の条線を基本に右斜め、左斜めの条線を交互に配したり、一部では格子状に交差している部分も見られる。胴部以下では24, 26で見られるように無文帯となる。ただしこの辺りでは土器自体の焼成が甘く表面模様が消失した可能性もある。

31~50は田戸上層・下層式あたりに比定される。31~38, 41, 42で見られるように押し引き文による比較的大きめの沈線文を主体として斜め方向の細沈線で充填しているものも多く見られる。43のように底部では貝殻腹縁文が施されているものもある。44~46は底部最下端部で工具によるナデ仕上げが認められる。

### 第三類 (第29図53~79, 図版25)

条痕文系土器群である。全部で139点出土し、6D, 6Eグリッド付近より特に出土した。胎土に多くの繊維を含み貝殻条痕文で施文されたものが多い。52~63は茅山下層式を中心とした土器群である。胎土に多くの繊維を含み土器の表裏に貝殻の条痕を持つものも多く見られる。64~75は6Eグリッド付近でまともな検出された鶴ヶ島台式土器で胎土に若干の雲母片を含み黒色化が著しいものである。沈線文で三角に区画した中に円形刺突文や貝殻などで施文している。77~79は比較的手厚の土器底部破片で表面は擦痕で調整されて胎土は繊維を含む。子母口式土器の破片と思われる。

### 第二群土器

縄文時代前期の土器群である。

### 第一類 (第30, 31図80~128, 図版25, 26)

前期前半の羽状縄文系土器を一括した。全部で791点出土し、6Dグリッド付近より特に出土した。胎土に多く繊維を含む。80~92は花積下層式土器群と思われる。80~84は貝殻条痕文と殻表丘痕文によって施文されている。86, 87などは羽状縄文と麻手文がみられ関山式土器群に似た模様構成である。97~99は底部である。

88~128は黒浜式土器群である。縄文時代包含層から検出された土器片でこの時期のものが一番多く見られる。胎土に繊維を多く含む。工具を使って刺突文、沈線文を構成するが胴部は比較的羽状縄文のみで構成され模様は単純化されたものが多い。口縁部の沈線刺突文にバリエーションをもたせたものも多く見られる。

### 第二類 (第32図129~140, 図版27)

前期後半の竹管文系土器を一括した。全部で162点出土し、6H, 6D, 7Jグリッド付近に集中して出土した。129は浮島Ⅲ式の土器の大形破片でまともな検出されている。波状口縁を持ち、口縁部上端には縦の条線文があり、以下は貝殻を使用した波状の三角文、さらに中心に縦方向に貝殻を使用した縄目状の刺突文と斜め横方向の所謂肋骨文と呼ばれる条線文、さらに横方向に貝殻を使用した三角文を配し、胴部以下は無文となる。大形の深鉢形土器になる。130は横方向の条線文で施文された土器片である。

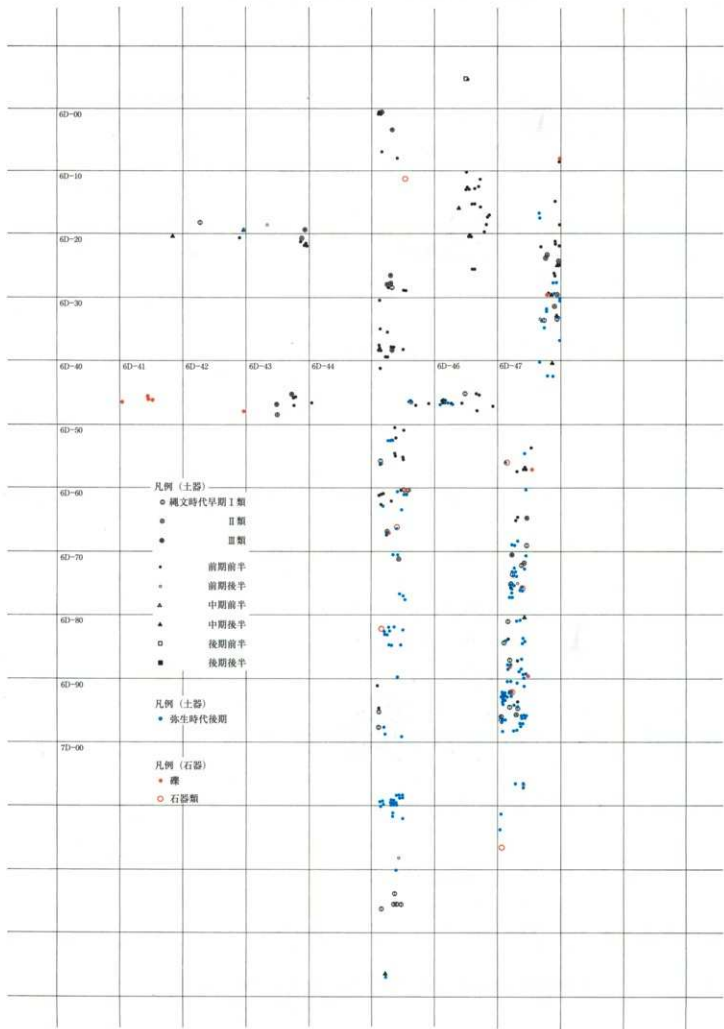
131~140は興津式土器群に比定される土器片と思われる。131, 132は縦方向の貝殻条線文が施されている。133は貝殻腹縁文が施されている。134は縦方向の条線文が施されている。136は横方向に波状の貝殻条線文が施されている。139, 140は口縁部に波状の貼付文を持つ土器片である。

### 第三群土器

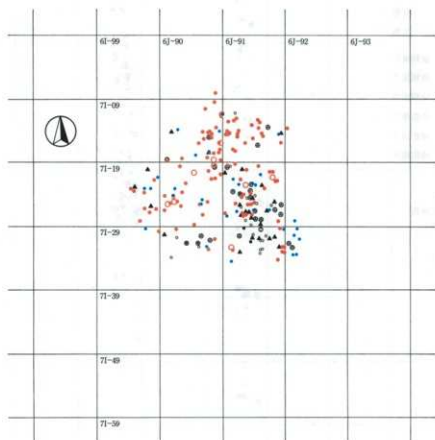
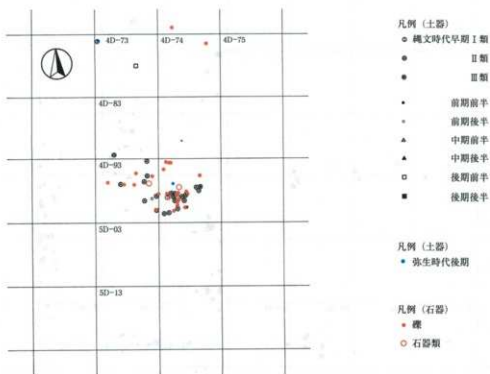
縄文時代中期の土器群である。あまり強いまとまりのある分布は認められなかった。

### 第一類 (第33図145, 151, 図版28)

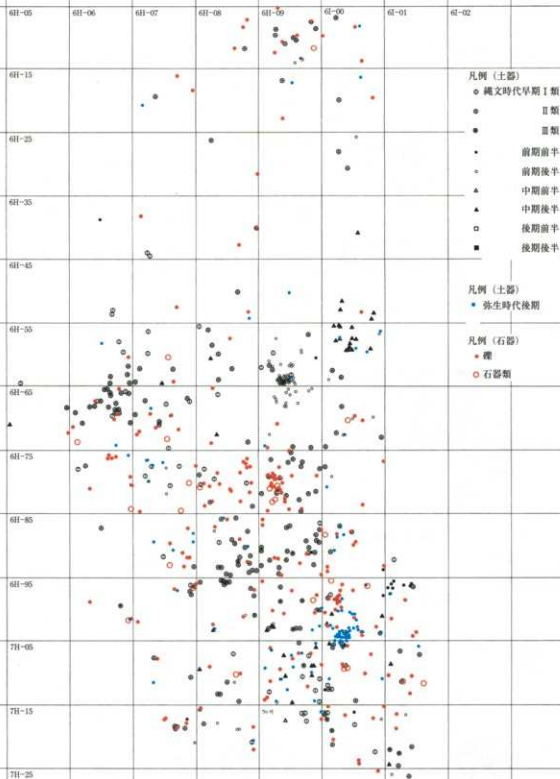
中期初頭から前半の土器である。この時期の土器片は実測可能な破片はあまり確認できなかった。145は



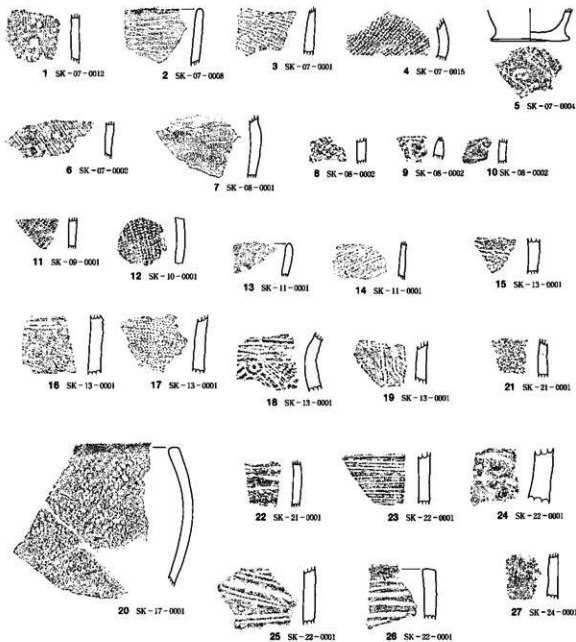
第20図 縄文時代～弥生時代 (6D～7D区) 包含層遺物出土状況図 (S=1/300)



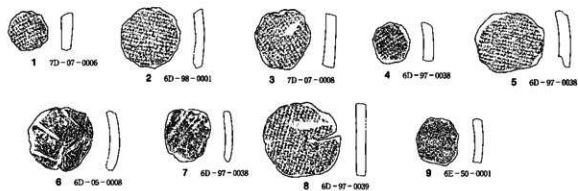
第21图 縄文時代～弥生時代(4D区-上, 6I~7J区-下)包含層遺物出土状況図 (S=1/300)



第22図 縄文時代～弥生時代 (6H～7H区) 包含層遺物出土状況図 (S=1/300)

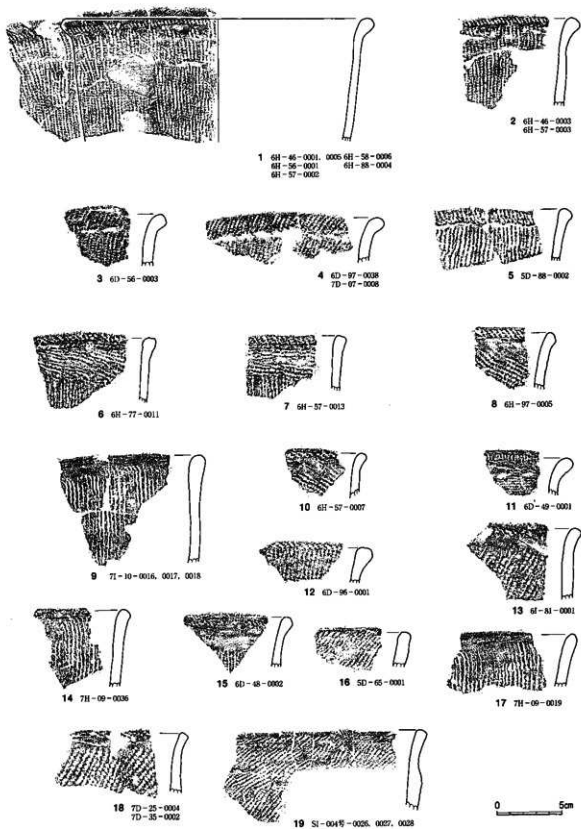


第23図 縄文時代～弥生時代SK(土坑・陥穴)出土遺物実測図 (S=1/3)

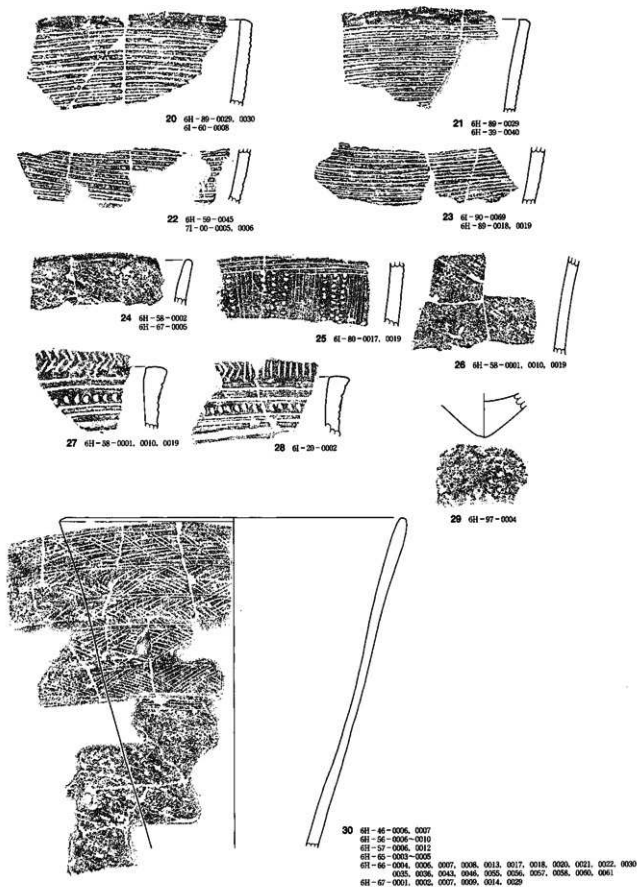


第24図 縄文時代包含層出土土器片実測図 (S=1/3)

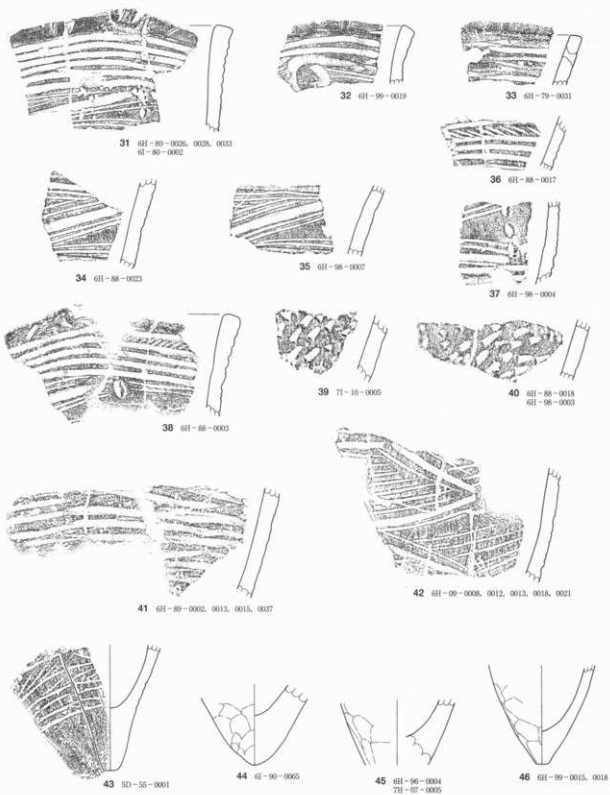




第25圖 縄文時代包含層出土土器 1 (S=1/3)



第26圖 縄文時代包含層出土土器 2 (S=1/3)



第27图 縄文時代包含層出土土器 3 (S=1/3)

口縁部破片である。口唇部に凸帯を巡らし沈線で区画している。口唇部直下にキャタピラ文を施している。151は把手部分の破片である。左右に粘土紐を貼った凸帯を巡らし、上面に小刻みなキャタピラ状の模様を施している。いずれも阿玉台式土器の一部と思われる。

第2類（第33図141～144、146～150、152～168、図版28）

縄文時代中期後半の加曾利E式土器である。141は口縁部を粘土紐による凸帯で区画、胴部以下は沈線で区画されていると思われる。143、148のように区画内に縄文の代わりに沈線を充填しているものも多く見られる。150のように胴部以下でも縄文の代わりに沈線を充填するものも見られる。遺跡の中でこの時期の胴部の大きな破片は多いが接合するものは非常に稀である。

#### 第IV群土器

縄文時代後期～晩期の土器群である。あまり強いまとまりのある分布は認められなかった。

第1類（第34図169～171、図版28）

縄文時代後期、称名寺および堀之内式土器である。170、171は称名寺Ⅱ式土器の破片である。細沈線内を列点文で施文している。169は堀之内Ⅱ式土器の大形の土器片である。口縁部は沈線で区画し、胴部にかけては縦方向、斜め方向に粘土紐による隆帯で区画し、区画内は縄文を地文にして渦巻き状の平行沈線を充填している。この個体の破片のみ出土している。

第2類（第34図172～191、図版29）

縄文時代後期、加曾利B式土器である。172～191は浅鉢形土器の破片である。縄文を地文に沈線や条痕文を施したものが多く、内面には丁寧なミガキが施されている。

3 包含層出土土器片錘（第24図1～9、図版22）

1は7D-07で検出された土器片錘である。縄文時代早期井草式土器の破片を使用して作られている。最大長3.1cm、幅0.8cm、重量9.9gである。

2は6D-98で検出された土器片錘である。縄文時代早期井草式土器の破片を使用して作られている。最大長4.6cm、幅0.7cm、重量21.1gである。

3は7D-07で検出された土器片錘である。縄文時代早期井草式土器の破片を使用して作られている。最大長4.6cm、幅0.8cm、重量22.0gである。

4は6D-97で検出された土器片錘である。縄文時代早期井草式土器の破片を使用して作られている。最大長3.2cm、幅0.8cm、重量8.7gである。

5は6D-97で検出された土器片錘である。縄文時代早期井草式土器の破片を使用して作られている。最大長5.3cm、幅0.9cm、重量27.3gである。

6は6D-05で検出された土器片錘である。縄文時代中期加曾利E式土器の破片を使用して作られている。最大長5.0cm、幅0.8cm、重量22.2gである。

7は6D-97で検出された土器片錘である。縄文時代中期加曾利E式土器の破片を使用して作られている。最大長4.1cm、幅0.6cm、重量10.7gである。

8は6D-97で検出された土器片錘である。縄文時代早期井草式土器の破片を使用して作られている。最大長6.0cm、幅0.7cm、重量32.4gである。

9は6E-50で検出された土器片錘である。縄文時代中期加曾利E式土器の破片を使用して作られている。最大長3.6cm、幅0.7cm、重量10.7gである。

#### 4 包含層出土石器 (第36~44図3~47, 図版19~21)

3は3C-22で検出された安山岩Bの剥片である。一部に風化面を残し、背面は横方向からの剥離面が2条見られる。旧石器時代の剥片である可能性が高い。全長3.7cm, 幅2.6cm, 厚み1.2cm, 重量9.7gである。

4は3C-41で検出された安山岩(黒曜石に近い)のリタッチ・ド・フレイクである。横広の剥片で断面は台形状で縁辺部分は小剥離が多く見られる。全長2.8cm, 幅5.5cm, 厚み1.3cm, 重量19.0gである。

5は4D-93で検出された砂岩の磨石である。比較的扁平な楕円磔を利用して両面ともに長軸方向に平行に擦痕を残す。全長7.8cm, 幅4.6cm, 厚み2.5cm, 重量114.9gである。

6は4D-94で検出されたホルンフェルスの磨石である。やや扁平な楕円磔で比較的平滑面に長軸方向に擦痕を多く残す。全長10.6cm, 幅6.5cm, 厚み4.1cm, 重量33.1gである。

7は4D-94で検出された安山岩の叩き石である。円磔の半分が欠損している。縁辺部分及び片面の中央部分に打撃痕が見られる。残全長6.6cm, 幅4.0cm, 厚み3.6cm, 重量122.0gである。

8は5D-96で検出された砥石である。比較的扁平な楕円磔で表裏とも平滑面の長軸方向よりやや斜め方向に平行な擦痕を多く残す。全長8.1cm, 幅3.9cm, 厚み2.6cm, 重量124.0gである。

9は6D-15で検出された石鏃である。赤色のチャートの剥片を使用して作られており、基部は凹基で側



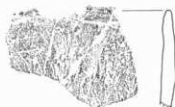
47 6H-99-0001, 0024, 0028-0031



48 6H-56-0003, 0004, 0012, 0013  
6H-67-0031



49 6H-66-0005, 0039  
6H-67-0013, 0015, 0017



50 5D-95-0001

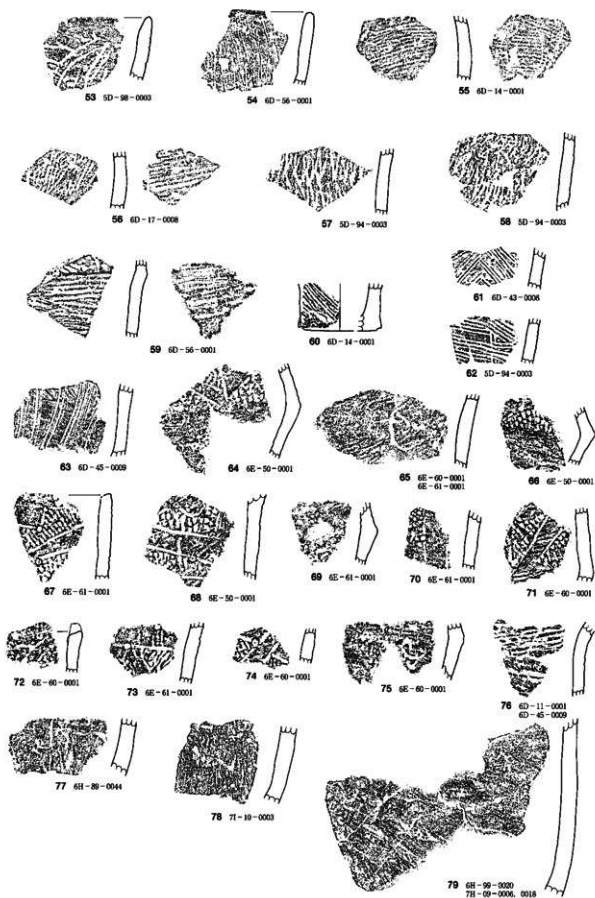


51 6D-23-0003



52 6D-76-0001

第28図 縄文時代包含層出土石器4 (S=1/3)

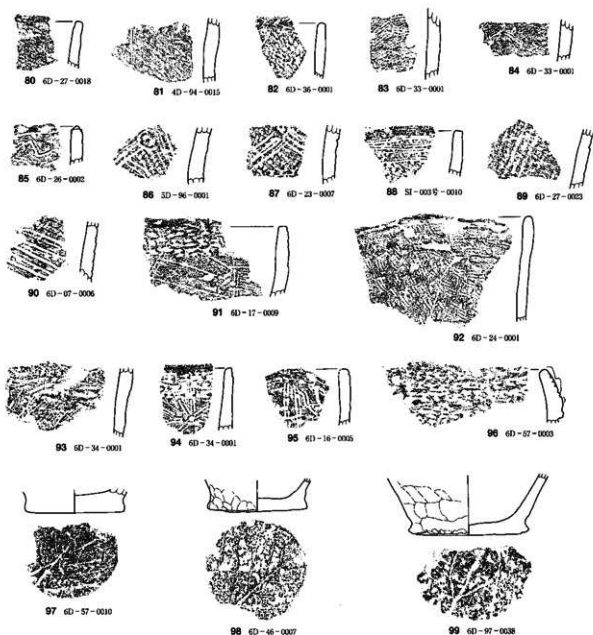


第29圖 縄文時代包含層出土土器 5 (S=1/3)

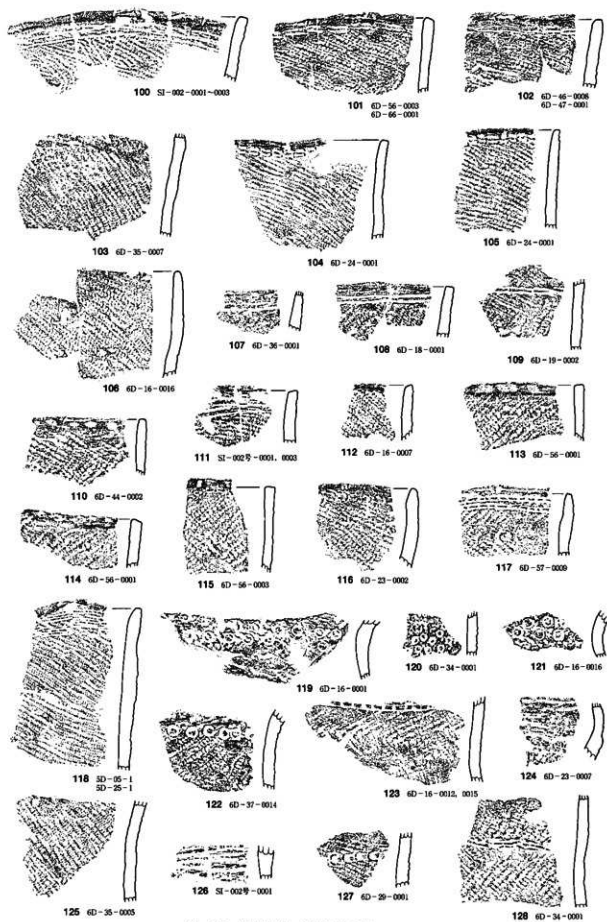
縁はやや丸みを持たせた形である。両面ともに丁寧に仕上げられている。全長2.7cm、幅1.8cm、厚み0.4cm、重量1.4gである。

10は6D-34で検出された石鏃である。粒の細かい安山岩の剥片を使用して作られており、基部はやや凹基気味で二等辺三角形に近い形である。両面ともに丁寧に仕上げられている。全長2.1cm、幅1.6cm、厚み0.5cm、重量1.2gである。

11は6H-36で検出された石鏃である。やや灰色がかった半透明のチャートの剥片を使用して作られており、基部は凹基である。先端部分は欠損している。全体に調整が荒く形もやや不整形である。全長1.9cm、幅1.7cm、厚み0.4cm、重量1.2gである。

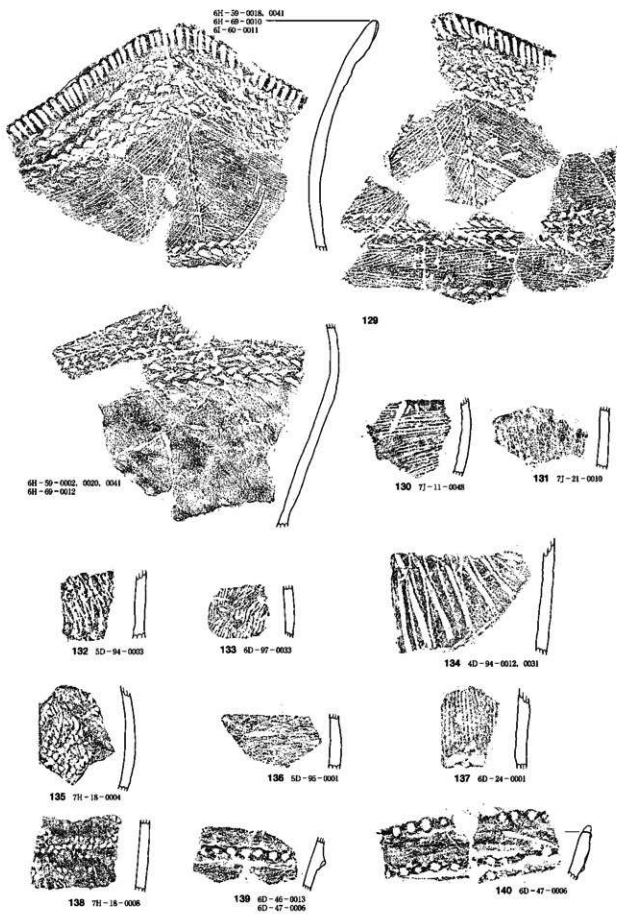


第30図 縄文時代包含層出土器6 (S=1/3)

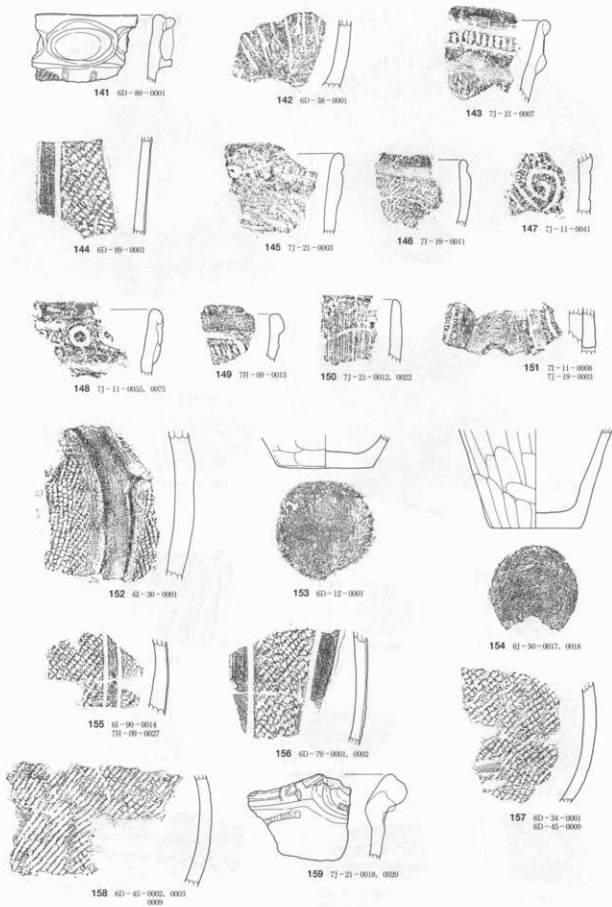


第31图 縄文時代包含層出土土器 7 (S=1/3)

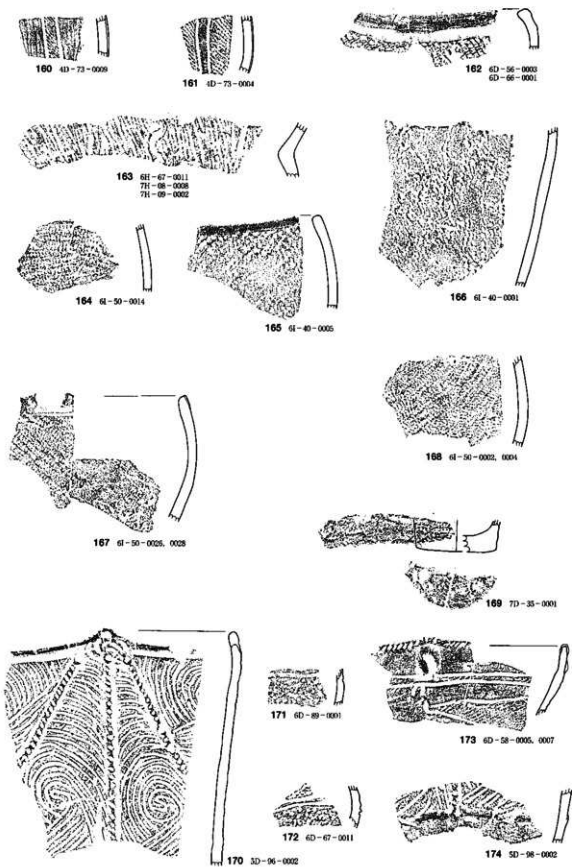




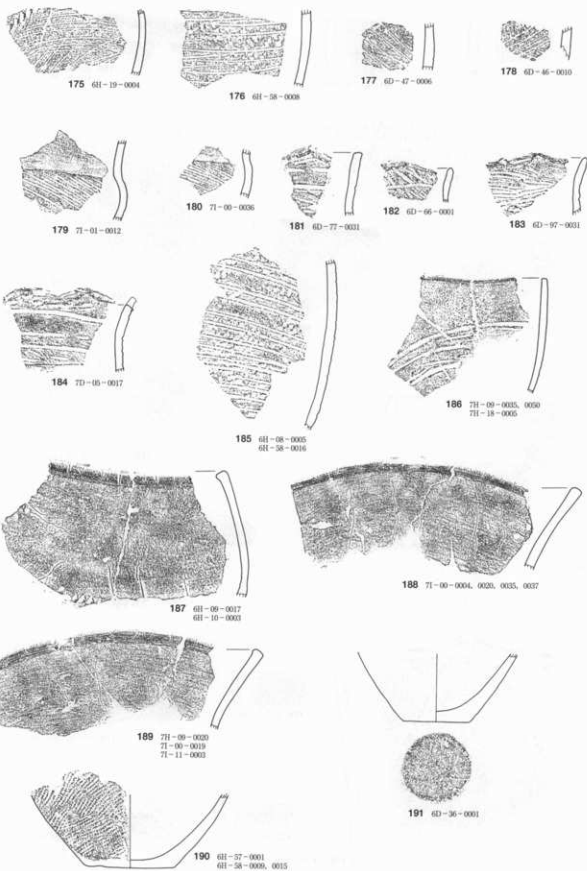
第32图 縄文時代包含層出土土器 8 (S=1/3)



第33図 縄文時代包含層出土土器9 (S=1/3)



第34図 縄文時代包含層出土土器10 (S-1/3)



第35圖 縄文時代包含層出土土器11 (S=1/3)

12は6H-45で検出された石鏃である。赤色のチャートの剥片を使用して作られており、基部は凹基である。全体に調整が荒く形もやや不整形である。全長2.0cm、幅1.8cm、厚み0.4cm、重量1.2gである。

13は6D-45で検出された石鏃である。やや灰色がかかった半透明で黒色の帯状の模様が入ったチャートの剥片を使用して作られており、基部は凹基である。全体に調整は細かく丁寧に仕上げられているが、片脚は欠損している。全長2.7cm、幅1.5cm、厚み0.3cmである。

14は6D-45で検出された石鏃である。やや灰色がかかった珪質頁岩の剥片を使用して作られており、基部は凹基である。全体に調整は細かく丁寧に仕上げられている。全長2.4cm、幅1.5cm、厚み0.4cmである。

15は6D-53で検出された凹石である。比較的扁平な安山岩の楕円礫を使用している。約2/3程度遺存しており、白っぽく焼けている。中央部分が両面ともに打痕により窪んでいる。残全長5.9cm、幅4.3cm、厚み3.2cm、重量108.4gである。

16は6D-56で検出された叩き石である。比較的大粒の安山岩の楕円礫の片側先端を叩きつぶすようにしてスタンプ状に仕上げている。また片面側の数か所に細かな打痕も見られる。全長7.5cm、幅5.1cm、厚み5.5cm、重量356.0gである。

17は6D-57で検出された磨製石斧である。砂岩の礫を使用して作られており、先端～胴部にかけて1/2程度遺存している。全体に形態を整えた後に刃部を顕著に磨いている。残全長6.1cm、幅5.5cm、厚み3.4cm、重量140.0gである。

18は6D-65で検出された凹石である。比較的扁平な粗粒安山岩の楕円礫を使用して作られており、全体の1/3程度遺存している。片面の中央部分が打痕により窪んでいる。残全長6.6cm、残幅4.7cm、厚み4.3cm、重量197.0gである。

19は6D-65で検出された石斧未製品である。安山岩を使用した扁平な板状の加工品で打製石斧の素材ともなりうる石片と考えられる。片面は斜め方向に擦痕が観察される。周辺は大まかに剥離されているが、細かい調整まで行っているようには思われない。全長13.7cm、幅7.3cm、厚み2.7cm、重量403.0gである。

20は6D-66で検出された叩き石である。頁岩の楕円礫の片側先端部分と片面中央部分を中心に打撃痕が顕著に観察される。全長7.1cm、幅5.1cm、厚み3.4cm、重量175.0gである。

21は6D-86で検出された剥片である。背部がほぼ礫面で覆われているチャートの剥片で縁辺部は薄いため多少の欠損が見られる。全長4.2cm、幅5.3cm、厚み1.3cm、重量2.8gである。

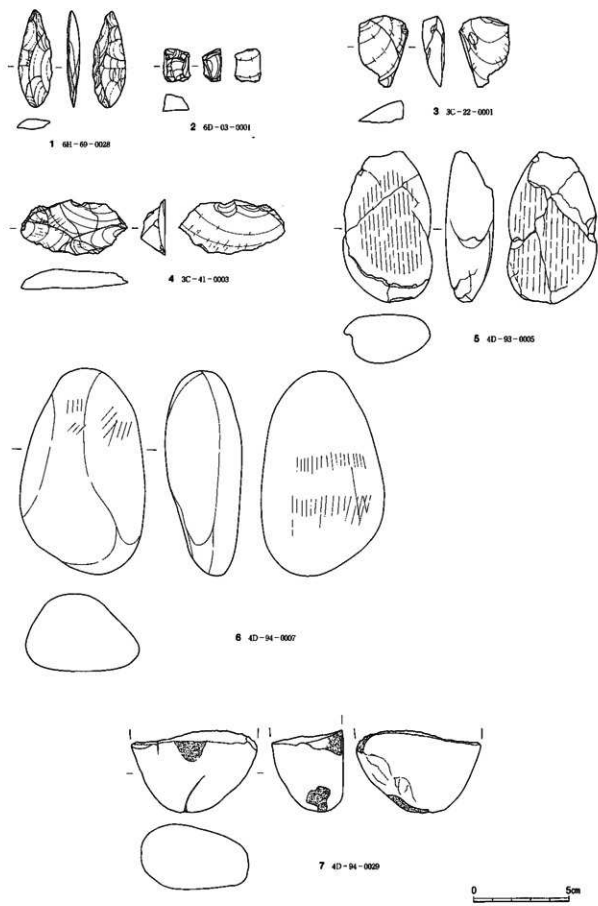
22は6D-97で検出された砥石片である。砂岩礫の一部を使用して作られており、両面とも顕著な擦痕が観察される。全長4.2cm、幅2.5cm、厚み1.2cm、重量18.9gである。

23は6D-96で検出された砥石である。扁平な砂岩礫を使用している。両面とも顕著な擦痕が認められ、窪んでいる。全長12.8cm、幅10.3cm、厚み5.5cm、重量1105.5gである。

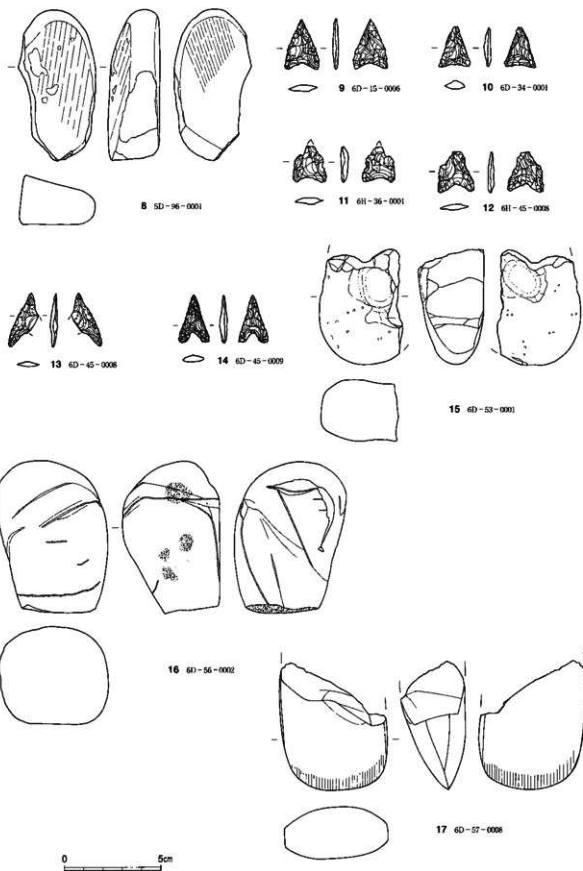
24は6D-96で検出された磨石である。扁平な硬質砂岩の円礫を使用して両面に打痕及び擦痕が観察される。特筆に値するのが側縁部分に大きく認められる鏡面仕上げともいえる光沢面である。このレベルまで磨くという行為は、何らかの実用的な行為以上のことであり、精神的な面をもここに認めなくてはならないと思われる。全長10.2cm、幅7.6cm、厚み4.1cm、重量513.0gである。

25は6H-57で検出された叩き石である。砂岩の楕円礫を半割したものを素材にして縁辺部分に打撃痕が残されている。全長5.5cm、幅3.5cm、厚み2.9cm、重量57.7gである。

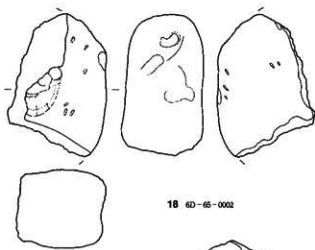
26は6H-66で検出された石斧片である。玄武岩の比較的薄い楕円礫を使用して作られていた石斧と思わ



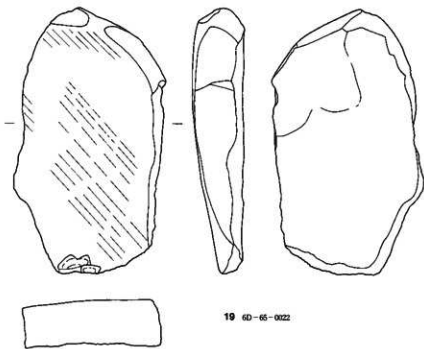
第36图 縄文時代包含層出土石器実測図1



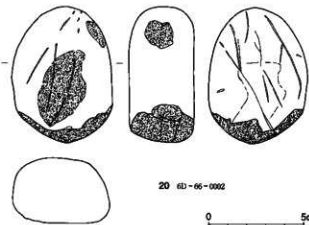
第37図 縄文時代包含層出土石器実測図2



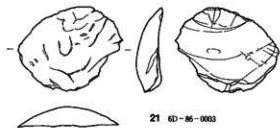
18 6D-65-0002



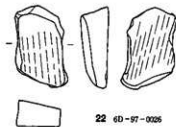
19 6D-65-0022



20 6D-66-0002



21 6D-86-0003



22 6D-97-0026



第38图 縄文時代包含層出土石器実測図3



れるが縦方向に折れてしまっている。周辺部分を調整して形を整えていたと思われる。残全長8.3cm, 残幅4.4cm, 厚み1.2cm, 重量48.7gである。

27は6H-67で検出された磨石である。扁平な玄武岩の楕円礫を使用して作られており、片側の平面に単一方向の擦痕が多く見られる。全長7.1cm, 幅5.7cm, 厚み2.8cm, 重量164.0gである。

28は6H-76で検出された礫器もしくは石核である。珪質頁岩の楕円礫の一方から打ち欠くようにして形作られている。大形剥片を剥ぎ取ったような剥離面を残しているため礫器とした方がよいと思われる。全長7.7cm, 幅5.6cm, 厚み3.8cm, 重量206.5gである。

29は6H-78で検出された叩き石もしくは凹石である。安山岩の楕円礫を使用して縁辺部及び中央部に著しい打撃痕が見られ、打撃のため1/3程度破損している。全長6.5cm, 幅5.6cm, 厚み2.5cm, 重量99.7gである。

30は6H-77で検出された磨石である。比較的厚みのある安山岩の楕円礫を使用して一部に打撃痕を残すものの全体に多方向の細かな磨きが顕著に見られるものである。全長12.2cm, 幅7.8cm, 厚み5.6cm, 重量960.0gである。

31は6H-87で検出された石鏃である。黒曜石の剥片を使って縁辺剥離のみで形を整えただけのものである。あるいは未製品とも考えられる。背面、主剥離面ともにそのままの状態で残されている。全長2.3cm, 幅2.7cm, 厚み0.8cm, 重量3.3gである。

32は6H-97で検出された叩き石である。扁平な砂岩の円礫を使用して縁辺部分、中央部分に顕著に打撃痕を残している。全長6.3cm, 幅5.7cm, 厚み2.7cm, 重量147.0gである。

33は7H-08で検出された凹石である。扁平な安山岩の円礫を使用している。縁辺部分を中心に顕著に打撃痕が見られる。片面中央部分が窪んでいる。使用時に破損したものである。全長5.2cm, 幅5.8cm, 厚み3.1cm, 重量150.0gである。

34は7H-19で検出されたリタッチ・ド・フレイクである。横長の黒曜石の剥片で先端部分に細かな小剥離が見られる。比較的厚みのある剥片である。全長1.9cm, 幅3.4cm, 厚み0.9cm, 重量6.1gである。

35は6I-60で検出された石核である。逆三角形のやや厚みのある黒曜石の周辺部分から多方向の剥離を行っているものである。全長2.0cm, 幅2.4cm, 厚み1.4cm, 重量6.9gである。

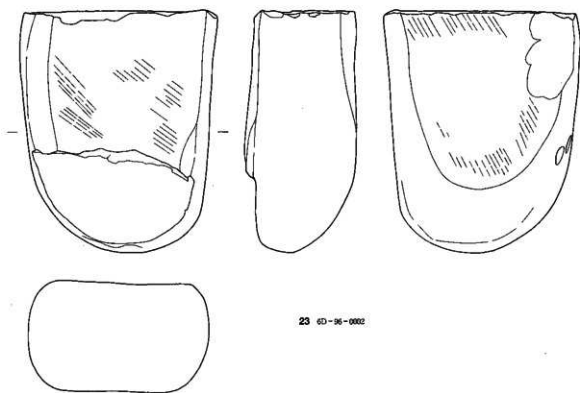
36は6I-80で検出された叩き石である。安山岩の長楕円礫を使用している。長軸方向の片側は欠損しているが、片側平面中央部分、両側縁には著しく打撃痕が見られる。全長7.9cm, 幅5.5cm, 厚み3.9cm, 重量22.1gである。

37は6I-90で検出された叩き石である。凝灰岩の楕円礫を使用している。縁辺部分と縁の部分を中心にやや小規模な打撃痕が多く認められる。全長7.8cm, 幅6.0cm, 厚み4.7cm, 重量282.0gである。

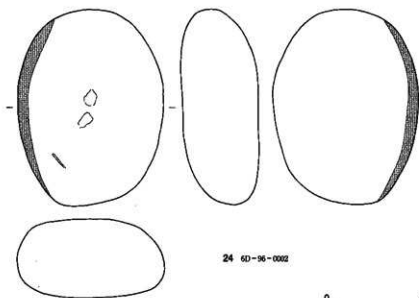
38は7I-00で検出された磨製石斧である。珪質頁岩のおそらく小形の扁平楕円礫を使用して作られていると思われる。基部は折れているがその後打撃痕が付けられているため再利用されている可能性が考えられる。先端の刃部は特に刃部再生を頻繁に行っていたと考えられる。全長3.0cm, 幅2.2cm, 厚み0.7cm, 重量8.0gである。

39は7I-00で検出された叩き石である。安山岩の楕円礫を使用している。両面の中央平坦部分に集中的に打撃痕が認められる。全長7.8cm, 幅5.9cm, 厚み3.5cm, 重量231.0gである。

40は7I-01で検出された叩き石である。安山岩の扁平な円礫を使用している。周辺部分に集中的に打撃



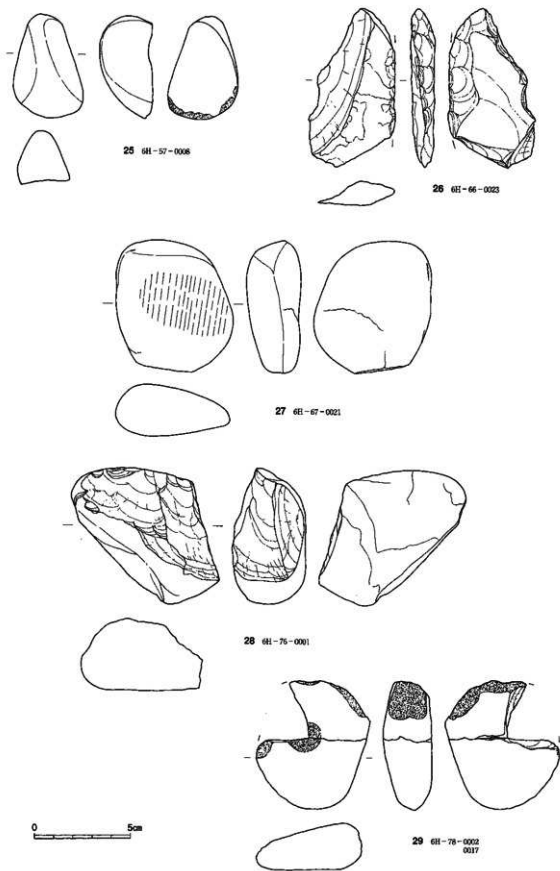
23 60-96-0002



24 60-96-0002



第39圖 縄文時代包含層出土石器実測図4



第40图 縄文時代包含層出土石器実測图 5

痕が認められる。全長6.6cm, 幅6.4cm, 厚み3.0cm, 重量193.0gである。

41は7I-10で検出された打製石斧である。粘板岩の扁平な礫を使用して短冊状に仕上げている。特に刃部については使用のためか比較的大きな剥離痕が多く見られる。基部から胴部にかけては節理面で破損して変形していると考えられる。全長10.3cm, 幅4.1cm, 厚み1.6cm, 重量87.2gである。

42は7J-11で検出された石鎌である。黒曜石の小剥片を使用して作られており、片側の脚部が欠損している。両面ともに細かな調整で丁寧に作られていたものと思われる。残全長1.9cm, 残幅0.8cm, 残厚み0.4cm, 残重量0.46gである。

43は7I-21で検出された石鎌である。黒曜石の小剥片を使用して作られており、先端部分が欠損している。両面ともに細かな調整で丁寧に作られていたものと思われる。残全長1.3cm, 残幅1.8cm, 残厚み0.3cm, 残重量0.46gである。

44は7J-00で検出された叩き石である。安山岩のやや扁平な楕円礫を使用している。縁辺部、特に先端部分に集中的に打撃痕が残る。全長7.6cm, 幅6.3cm, 厚み4.3cm, 重量284.0gである。

45は7J-00で検出された叩き石である。凝灰岩のやや不定形な扁平礫を使用している。縁辺部、特に両端部分に集中的に打撃痕が残る。全長9.7cm, 幅6.5cm, 厚み4.3cm, 重量336.0gである。

46, 47はSI-003号住居跡の覆土中より検出された石器である。46は当初、縄文時代の礫器と考えたが住居跡の所属時期のもので珽瑠製の火打ち石と判断した。縁辺部に往復で剥離痕が見られ、なおかつ潰れた状態も観察されることから火打ち石と思われる。両面平坦部分に黒く丸い汚れのようなものが観察される。使用時のものかと思われる。全長9.0cm, 幅7.5cm, 厚み3.1cm, 重量274.0gである。

48は同じくSI-003号住居跡の覆土から検出された叩き石と思われる。ホルンフェルスの棒状の礫の両端に潰れるくらいの打撃痕が見られる。形態、石材等から縄文時代の叩き石と考えるのが妥当であろう。全長7.7cm, 幅3.9cm, 厚み3.2cm, 重量131.4gである。

### 第3節 弥生時代

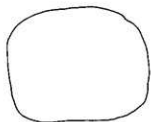
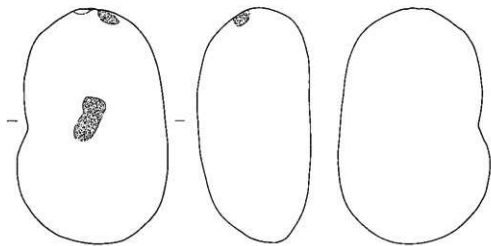
弥生時代の遺構は、土坑2基が検出された。6D区からは多量の弥生土器片が検出された。全体に浅いため住居跡などの遺構は検出できなかった。

#### 1 遺構と遺物

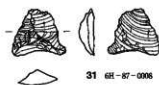
SK-007号土坑(第17, 23図1~6, 図版22)

(遺構) 6D-85グリッドに位置する。平面形状はやや隅丸長方形で長辺1.28m, 短辺0.92m, 確認面からの深さは最大20cmである。床面はほぼ平坦であるが特に硬化面等は観察されていない。壁はやや斜めに立ち上がるようである。覆土は上下2層に分かれる。上層はロームを多量に含む暗褐色土, 下層はロームが主体の暗褐色土である。床付近並びに周辺に弥生土器片が多量に散布しているため弥生時代の土坑とした性格は明らかではない。あるいは住居跡等の一部である可能性も考えられるが確証はない。

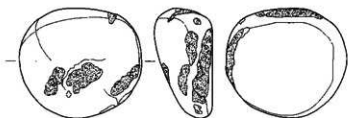
(遺物) 覆土中より18点の弥生式土器の破片が検出された。そのうち比較的大きな物について1~6まで載せておいた。1は壺の底部と思われる破片で一部に沈線が見られる。胎土は比較的にキメ細かく焼成は比較的良好で淡赤褐色である。2は鉢形土器の口縁部破片で表面は横方向の条痕文で施文されている。胎土は比較的にキメが細かい。焼成は良好で淡黄褐色である。3は鉢形土器の波状口縁部の一部で条痕文で施文されている。胎土は比較的にキメ細かい。焼成は良好で、やや還元焼成気味と思われ黒~灰色気味である。



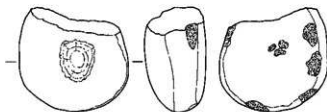
30 6H-77-0001



31 6H-87-0006



32 6H-97-0000



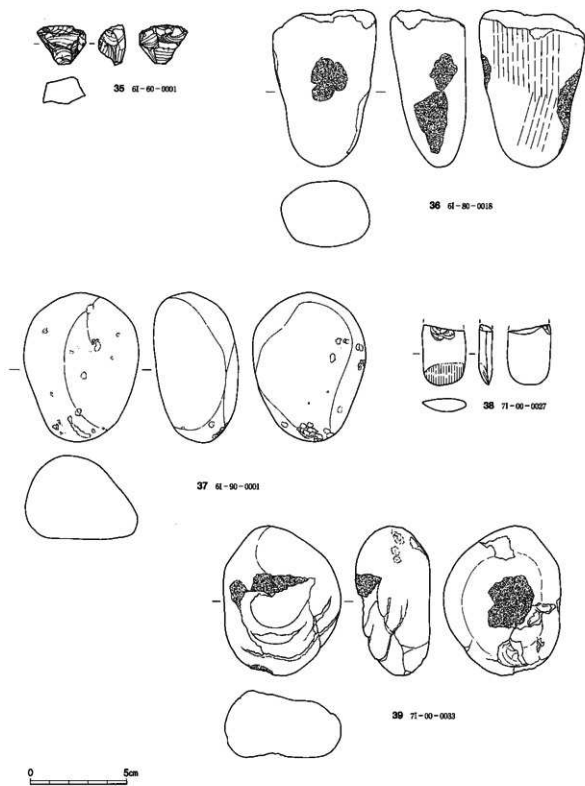
33 7H-08-0011



34 7H-18-0004



第41圖 縄文時代包含層出土石器実測圖 6



第42図 縄文時代包含層出土石器実測図 7



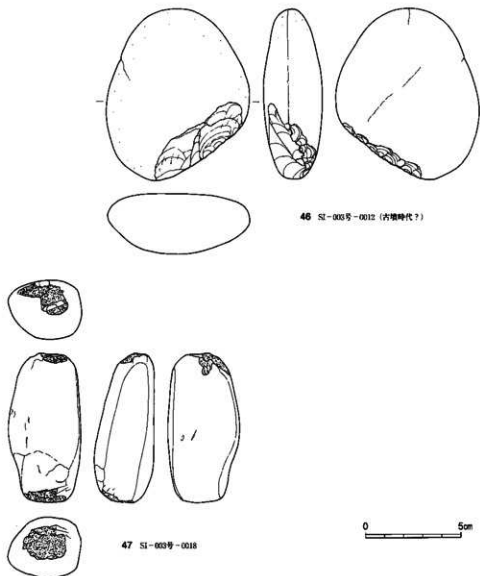
第43图 繩文時代包含層出土石器実測図 8

4は壺形土器の胴部破片と思われる。表面は縄文が施文されている。何点か同一個体の破片が見られる。胎土は石英砂粒を多く含みややキメが粗い。焼成はやや良好で、還元焼成気味で黒灰色を呈する。5は壺形土器の底部で木葉痕を残す。内面の調整は棒状工具痕が残されている。胎土は全体に砂粒が粗い。焼成は明るい褐色で比較的良好と思われる。6は壺形土器の胴部破片と思われる。胎土は石英小粒が多く見られやや粗い。焼成は良好で、やや還元焼成気味と思われ黒～灰色気味である。

同一個体があまり認められない廃棄状態は何を意味しているのだろうか。

SK-011号土坑（第17, 23図13, 14, 図版22）

（遺物）7D-05グリッドに位置する。平面形状はやや隅丸の長方形で長辺1.98m, 短辺0.97m, 確認面からの深さは最大20cmである。床面はほぼ平坦であるが特に硬化面等は観察されていない。壁はやや斜めに



第44図 縄文時代包含層出土石器実測図9

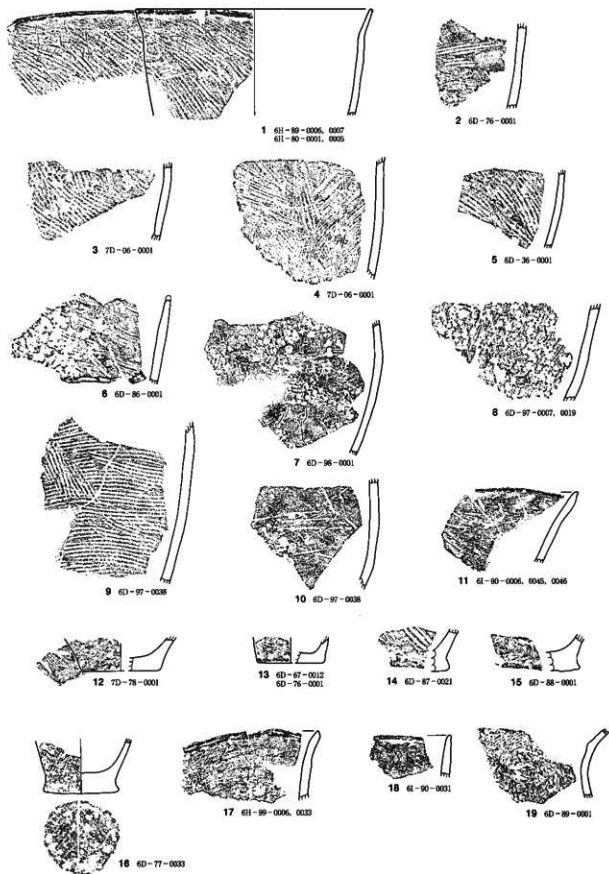


立ち上がるようである。覆土は上下2層に分かれる。上層はロームを多量に含む暗褐色土、下層は炭化物が含まれ、ロームが主体の暗褐色土である。覆土中より少量の弥生土器片が検出されているため弥生時代の土坑とした。形態等から土坑墓かとも考えられるが確証はない。

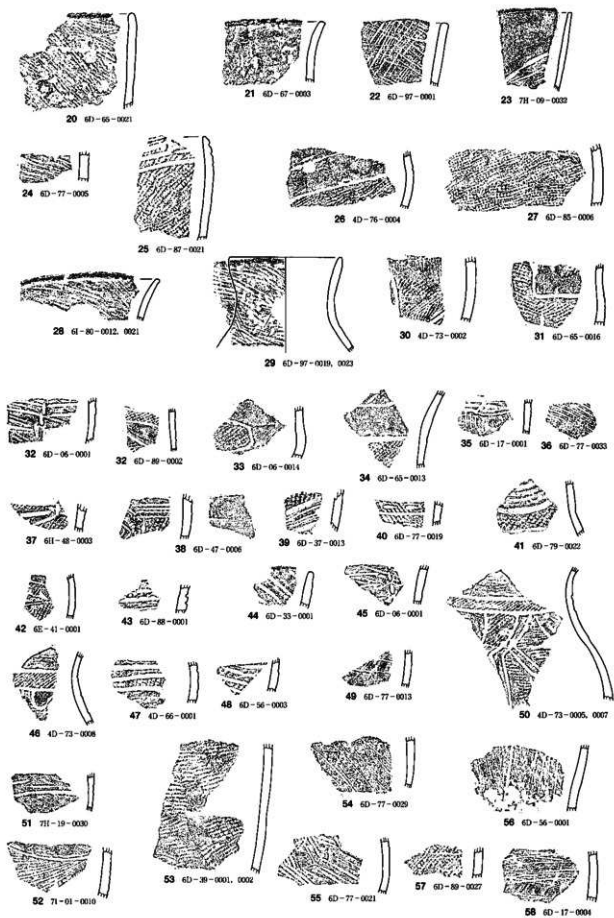
(遺物) 13は薄手の鉢形土器の破片と思われる。無文である。胎土は石英小粒が少量含まれており、やや粗い。14は壺形土器の頸部の小破片と思われる。条痕文が施文されている。胎土は石英小粒を多く含みやや粗い。焼成は淡黄灰色で還元焼成気味である。

#### 包含層出土土器(第45, 46図1~58, 図版29, 30)

1は6H-89, 6H-80から検出された薄手の鉢形土器の口縁部から胴部にかけての大形破片である。口縁部から胴部に条痕文が見られる。2~5は鉢もしくは壺の胴部の破片である。2は6D-76より検出され斜め方向のはっきりした条痕文が見られる。3は7D-06より検出され縦方向と斜め横方向の2方向から条痕文が施されている。4は7D-06より検出され比較的細めの条痕を左右の斜め横方向、あるいは縦方向からと多方向からの施文が観察される。5は6D-36から検出され左斜め横方向から比較的大きめの条痕が施されている。6は口縁部の破片で6D-86より検出されている。縦斜め方向の比較的大きめの条痕、横斜め方向のやや細めの全面にわたる条痕で施文されている。7, 8は6D-97, 98より検出されている。壺形土器の胴部下半部の大形破片である。表面はやや荒れているものの縦方向の条痕文が多く見られる。9は6D-97で検出されたものである。壺形土器の胴部下半部の大形破片である。表面はやや太めの横方向の条痕文で施文後、縦方向の条痕が一部見られる。10は6D-97で検出されたものである。おそらく壺の胴部破片であろう。横方向の若干の沈線文が見られるものである。11は6I-90で検出されたものである。鉢形土器の口縁部破片である。条線でやや磨り消し気味に仕上げられており口縁部は細く折り曲げて仕上げられている。12~16は底部破片である。12は7D-78で検出されたものである。壺の破片で底部に細かな条線が見られる。13は6D-67, 6D-76で検出されたものである。細い条線が一部見られる。14は6D-87で検出されたものである。斜め方向の条痕が見られる。15は6D-88で検出されたものである。条線が一部見られるが無文に近い。16は6D-77で検出されたものである。壺形土器の底部で底面に木葉痕が残されている。17~19はおそらく壺形土器の口縁部破片である。17は6H-99で検出されたものである。横方向の条線が若干見られるもののミガキで磨り消されている。18は6I-90で検出されたものである。横方向の条線が若干認められる。19は6D-89で検出されたものである。壺形土器の頸部に近い部分で斜め方向の条痕が認められる。20~23は鉢もしくは壺形土器の口縁部破片と思われる。20は6D-65で検出されたものである。斜め方向に異方向の条痕文が顕著に見られる。21は6D-67で検出されたものである。若干の条線は認められるものの無文に近い。22は6D-97で検出されたものである。左右の斜め方向からの細い沈線で施文されている。23は7H-09で検出されたものである。斜め方向の太さの異なる複数の沈線で施文されている。24は6D-77で検出されたものである。壺か壺の破片で比較的高い密度の条痕文で施文されている。25は6D-87で検出されたものである。無頸壺の口縁部破片で口縁部と平行する沈線文と縄文で施文されている。26は4D-76で検出されたものである。壺の胴部破片と思われる。沈線で縄文と無文帯を区画している。27は6D-85で検出されたものである。壺と思われる胴部の破片で縄文で施文されている。28は6I-80から検出されたものである。壺もしくは壺の口縁部の破片である。口縁部直下に横方向の条痕文が施されている。29は6D-97から検出されたものである。壺形土器の口縁部である。全体に顕著な条痕文が施されている。30は4D-73から検出されたものである。壺形土器の胴部下半部と思われる。31は6D-65から検出された



第45图 弥生時代包含層出土土器1 (S=1/3)



第46圖 弥生時代包含層出土土器2 (S=1/3)

ものである。鉢形土器の破片で沈線で無文帯と縄文を区画している。32は6D-06から検出されたものである。鉢形土器の破片と思われる。中央部分の刺突文と条痕と沈線で施文されている。33は6D-89から検出されたものである。壺の胴部の破片と思われる。沈線と縄文と無文帯を区画している。34は6D-65から検出されたものである。壺の頸部である。平行する沈線と縄文と無文帯を区画している。35は6D-17から検出されたものである。鉢形土器の破片である。横方向の沈線文と縦方向の短い沈線で構成される。36は6D-77から検出されたものである。鉢形土器の破片である。斜めの条痕文が施されている。37は6H-48から検出されたものである。鉢形土器の破片である。条痕文を地文にして沈線で区画している。38は6D-47から検出されたものである。鉢の胴部の破片である。表面は縄文を地文に沈線で区画している。裏面には一部条線が見られる。39は6D-37から検出されたものである。縄文を地文にして沈線を施している。40は6D-77から検出されたものである。鉢の破片で縄文を地文にして沈線と刺突文を施している。41は6D-79から検出されたものである。壺の頸部の破片で縄文を地文にして横方向の沈線で区画している。42は6E-41から検出されたものである。壺形土器の破片で縄文を地文に横方向の沈線で区画されている。43は6D-88から検出されたものである。鉢形土器の破片で横方向の沈線と刺突文で施文されている。44は6D-33から検出されたものである。鉢形土器の口縁部破片で条線と沈線で施文されている。45は6D-06から検出されたものである。鉢形土器の破片で刺突文と沈線で施文されている。46は4D-73から検出されたものである。壺形土器の頸部で縄文を地文に沈線と磨り消された無文の区画で構成される。47は4D-66から検出されたものである。鉢形土器の破片で縄文を地文にして横方向の平行沈線で区画されている。48は6D-56から検出されたものである。鉢形土器の破片で縄文を地文にして斜め横方向からの平行沈線で区画されている。49は6D-77から検出されたものである。50は4D-73から検出されたものである。壺形土器の頸部～胴部にかけての破片で縄文を地文に沈線で区画されている。51は7H-19から検出されたものである。鉢形土器の破片で沈線文で区画されている。52は7I-01から検出されたものである。鉢形土器の破片である。沈線文とそれに対し放射状に条痕を施文している。53は6D-39から検出されたものである。壺形土器の破片で縄文を施文している。54は6D-77から検出されたものである。鉢形土器の破片と思われる。斜め方向の条線が施文されている。55は6D-77から検出されたものである。鉢形土器の破片と思われる。斜め方向の条痕文が施文されている。56は6D-56から検出されているものである。鉢形土器の破片と思われる。地文は条痕で縦方向の沈線で区画されている。57は6D-89から検出されているものである。鉢形土器の破片と思われる。縄文を地文に沈線が施文されている。58は6D-17から検出されているものである。鉢形土器の破片と思われる。横方向と斜め方向の条痕文が施されている。

これらの弥生土器の土器片は多量に検出されているものあまりまとまりよく検出されたものではないが、時期的には弥生時代中期初頭の須和田式土器群の時期辺りに相当するのではないと思われる。

#### 第4節 古墳時代以降

古墳時代の遺構は、住居跡3軒、土坑1基が検出された。他に時期が不明確の焼土遺構2基及び中近世の溝が1条検出されている。

##### 1 遺構と遺物

SI-002号住居跡(第47～49図1～12, 図版9, 10, 31, 32)

(遺構) 6C-19グリッドに位置する。平面形状はほぼ正方形である。規模は北西壁5.55m, 北東壁5.72m,

南東壁5.93m, 南西壁5.65mである。主軸方位はN-20°-Wである。覆土は上から1層~11層まで分層される。1層は締まりのある砂質で炭化粒混じりの暗褐色土である。2層は黒褐色土で1層と同質である。3層は暗褐色土で1層とほぼ同質である。4層は2層と3層の中間的色彩で1層と同質の暗~黒褐色土である。5層は砂質で多量の炭化粒を含み焼土粒を含む暗褐色土である。6層は砂質で焼土粒混じりで3層と似た色調の暗褐色土である。7層は山砂主体で炭混じり、壁際崩落土混じりの褐色砂質土である。8層はカマドの袖の崩落土主体の灰褐色土である。9層は砂質でやや軟質の暗褐色土である。10層はやや軟質の暗灰褐色砂質土である。11層は南東側の床面直上に見られる焼土粒、炭化粒を含む褐色砂質土である。

床面には壁際に比較的近い部分より炭化材、焼土ブロックが検出されており、火災住居であった可能性もある。

カマドは北西壁際中央部分に構築されている。カマドの袖、火床部分とも非常に残りがよい。カマド付近よりの遺物の検出も比較的多い。なお、遺物は床面の中央付近でも若干見られる。カマドの覆土は1層~6層まで分かれる。1層は暗灰褐色砂でカマド天井部の崩落部分で締まりがある。2層は褐色砂質土で締まりがややなく軟質である。3層は暗褐色土で砂が多く粘性があり、軟質である。4層は暗褐色土で砂が多く粘性がありロームブロックが多く混ざる。5層は褐色砂質土で焼け砂ブロックを多く含み、やや軟質である。6層は暗灰褐色砂層でカマドの袖部分である。6'の部分はやや軟質である。

柱穴はP1~P4まで4本検出されている。径40cmの円形プランで床面よりの深さは45cm~50cmである。また南東壁近くには梯子ビットとおぼしきP5、P6が並ぶ。

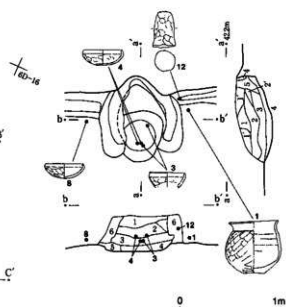
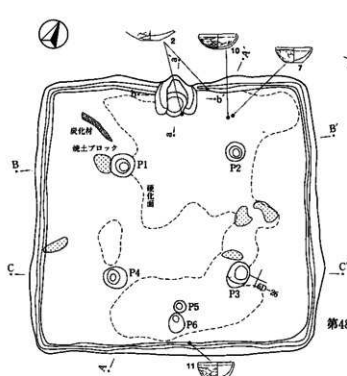
床の硬化面はカマド周辺から梯子ビットを中心とした部分で顕著に見られる。また、壁周溝はカマド部分を除く住居跡の全周に及ぶ。

なお、遺物から判断して当該住居跡の所属時期は古墳時代後期になるものと思われる。

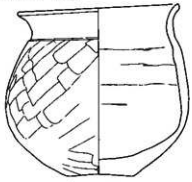
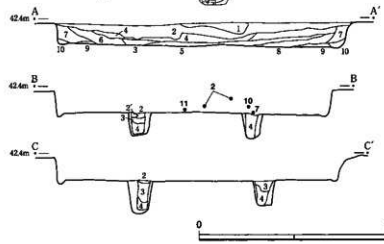
(遺物)住居跡のカマド周辺と床面中央部分を中心に比較的多数の遺物が検出された。図示可能なものは12点である。

1~2は土師器の甕である。1はほぼ完形である。口径16.7cm, 底径7.0cm, 器高17.8cmである。胴部中央よりやや底部より最大径のくる器形である。外面口縁部はヨコナデ、頸部から胴部下半部にかけては斜め横方向のヘラケズリで調整されている。外面底部から底面にかけてはヘラケズリで調整されているが、所々被熱のため剥落が見られる。内面は口縁部はヨコナデで仕上げられている。頸部以下はナデ仕上げであるが、輪積み痕を明瞭に残している。2は土師器の甕の底部破片である。底径6.5cmで他は不明である。1よりやや小型の甕である可能性は高い。外面底部底面はヘラケズリで仕上げられている。内面はヘラナデで仕上げられている。

3~11は土師器の杯である。3は口縁部から底部にかけて1/3程度遺存している。口径12.0cmで平底と思われるが器高は不明である。頸部でやや内曲する器形になるとと思われる。どちらかという鉢に近い形態であろう。外面口縁部はヨコナデ、底部にかけてはヘラケズリ後ナデで仕上げられているが、やや剥落気味である。内面口縁部はヨコナデ、底部にかけてはヘラナデで仕上げられている。4は口縁部を中心に1/5程度遺存している。口径14.0cmで丸底と思われる。胴部でやや折れ曲がり口唇部で直立する器形である。外面口縁部はヨコナデ気味、底部は丁寧なヘラナデで仕上げられていると思われる。調整が丁寧なため単位は不明瞭である。内面口縁部はヨコナデ、底部はナデで仕上げられている。5は口縁部から底部にかけて1/5程度遺存している。口径12.2cmで丸底と思われるが器高は不明である。頸部で比較的大きく内曲する



第48図 SI-002号住居跡カマド平面図，セクション図  
(遺物分布含む) (1/40)

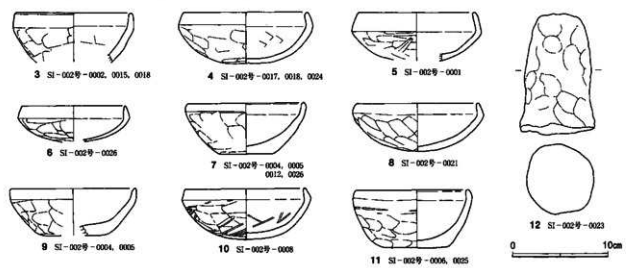


1 SI-002号-0022



2 SI-002号-0009, 0011

第47図 SI-002号住居跡平面図，セクション図，エレベーション図 (遺物分布含む) (1/80)



第49図 SI-002号住居跡出土遺物実測図9 (1/4)

器形である。外面口縁部はヨコナダ後ミガキで仕上げられている。底部にかけてはヘラケズリ後ミガキで仕上げられている。内面口縁部はヨコナダ、底部にかけてはナダ後ミガキで仕上げられている。6は口縁部から底部にかけて1/4程度遺存している。口径10.7cmで丸底と思われるが器高は不明である。頸部でやや内曲し、緩やかに丸底となる器高が低い形態である。外面口縁部はヨコナダ、底部にかけてはヘラケズリで仕上げられている。内面口縁部はヨコナダ、底部にかけてはナダ後弱いミガキで仕上げられているが、調整単位は不明瞭である。7は口縁部から底部にかけて2/5程度遺存している。口径13.0cm、底径6.6cm、器高4.8cmである。全体に丸みがあり、やや厚みがある。外面口縁部はヨコナダ、底部にかけてはヘラケズリ後ナダで仕上げられている。内面口縁部はヨコナダ、底部にかけては丁寧なナダで仕上げられている。8は全体の3/5程度遺存している。頸部でやや内曲し緩やかに丸底になる器形で比較的器高も低い。口径12.8cm、器高5.0cmで丸底である。外面口縁部はヨコナダ、底部は中心に向かって胎土のためか明瞭なヘラケズリ調整が見られる。内面口縁部はヨコナダ、底部にかけては丁寧なナダで仕上げられている。9は全体の3/5程度遺存している。底部より斜めに丸みを持ちながら緩やかに立ち上がり口縁部付近でやや直立する器形である。口径12.1cm、底径5.4cm、器高5.3cmである。外面口縁部はヨコナダ、底部にかけてはヘラケズリ後ナダで仕上げられている。底面はナダで仕上げられている。内面口縁部は強いヨコナダ、底部にかけては丁寧なナダで仕上げられている。内面の一部に赤彩の痕が見られる。10は全体の1/2程度遺存している。丸底で緩やかに立ち上がり頸部でくの字に内曲する器形である。口径12.5cm、器高5.1cmで丸底である。外面口縁部はヨコナダ、底部にかけてはヘラケズリ後ミガキで仕上げられている。内面口縁部はヨコナダ、底部にかけては丁寧なナダ後一部ミガキで仕上げられている。11は3、8と形状が類似しておりやや鉢に近い形態である。全体の3/4程度遺存している。口径11.9cm、底径6.3cm、器高5.9cmである。外面口縁部はヨコナダ、底部にかけてはヘラケズリ後ナダで仕上げられている。胴部に輪積痕を残している。内面口縁部はナダ、底部にかけて丁寧なナダで仕上げられている。一部はミガキで仕上げられている。

12は支脚である。全体に指による成形痕を残す。胎土に繊維を使用している。基部はないものの現存長12.5cmで比較的良好な残存状況を示している。

#### SI-003号住居跡（第50、51図1～3、図版10、32）

（遺構）4D-84グリッドに位置する。平面形状は北東壁側を確認調査時に掘り抜いたため詳細は不明であるが正方形に近いと思われる。規模は北西壁5.92m、北東壁6.4m前後、南東壁5.52m、南西壁5.90mである。主軸方位はN-12°-Wである。覆土は上から1層～4層まで分層される。また、5層～9層までは後世の炭竈かと思われるが、カマドがこの付近にあったと思われるため参考として説明しておく。また住居跡の床面中央付近に焼け跡が2か所検出されているがこれらは平面的であり、炉ではないと思われる。1層は黒色土に褐色土がブロック状に混ざり締まりある黒褐色土である。2層は1層と似ている暗褐色土である。3層は砂を多く含む暗褐色土である。4層は砂混じりで床直に分布している褐色土である。おそらくカマドを壊した時のものと考えられる。5層は締まりのある黒褐色土である。6層はローム粒を含みやや締まりを欠く暗褐色土である。7層は炭が多く混じり締まりを欠く黒褐色土である。8層は締まりを欠く暗褐色土である。9層はロームブロック主体で壁床崩落の褐色土である。

床面はⅢ層上面までの掘り込みで床全体は軟弱である。

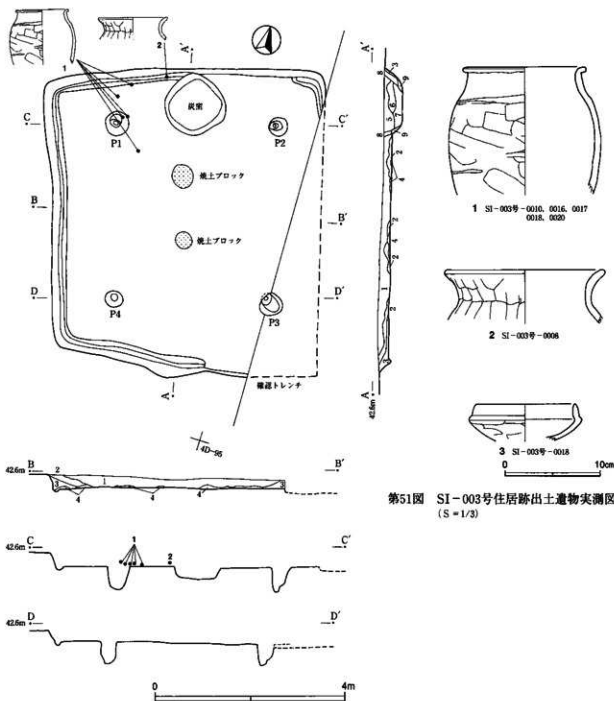
カマドは北西壁際中央部分に構築されていた可能性はあるが、炭竈周辺部分に若干の山砂部分が見られるのみである。

柱穴はP1～P4まで4本検出されている。径40cm前後の円形プランで床面よりの深さは40cm前後である。壁周溝は南西壁及び北西壁の一部、南東壁の一部に見られる。

なお、遺物から判断して当該住居跡の所属時期は古墳時代後期になるものと思われる。

(遺物) 住居跡の北西壁P1付近を中心に若干の遺物が検出された。図示可能なものは3点である。

1～2は土師器の甕である。1は口縁部から胴部下半部にかけて1/2程度残存している。底部以下は不明である。口径12.5cmで他は不明である。胴部上半部に最大径がありやや細長い印象の強い器形になると思



第51図 SI-003号住居跡出土遺物実測図 (S=1/3)

第50図 SI-003号住居跡平面図、セクション図、エレベーション図 (遺物分布含む) (1/80)



われる。外面口縁部ヨコナデ、頸部以下胴部にかけては横方向のヘラケズリで調整されている。内面はナデで仕上げられている。所々被熱のためか剥落している。2は口縁部の大形破片である。口径16.5cmで他は不明である。外面口唇部はヨコナデ、頸部以下は縦方向にヘラケズリで調整されている。内面は横方向のヘラナデ仕上げと思われる。なお口唇部の一部に倒立させて調整した時のものと思われる潰れ部分が観察される。

3は土師器の杯である。口縁部から底部にかけての破片で1/5程度遺存している。丸底で体部の中程で折れ曲がり口縁部が直立する器形である。口径10.4cmで器高は不明である。口縁部は外面ヨコナデ、以下ヘラケズリで調整されている。内面は口縁部ヨコナデ後全面丁寧なナデで仕上げられている。

SI-004号住居跡（第52～54図1～7、図版11、33）

（遺構）5D-07グリッドに位置する。規模は北壁8.48m、東壁8.48m、南壁8.50m、西壁8.55mでほぼ正方形である。主軸方位はほぼ真北である。覆土は上から1層～6層まで分層される。1層はローム粒、炭化粒を含む黒褐色土である。2層はローム粒、炭化粒を含みやや締まりのない暗褐色土である。3層は床直に近い粘性のある褐色土である。4層は砂を多量に含むカマド袖の崩落土主体の褐色土である。5層は炭窯の覆土による攪乱土で黒褐色土である。6層は軟質で締まりのない褐色土である。覆土は全体に木の根による攪乱を受けており残存状況はあまり良好ではない。

なお柱穴部分では比較的残りが良いのでセクションを観察している。柱痕を含み1層～4層に分層されている。1層はローム細粒を含み若干締まる暗褐色土である。2層はロームブロックを多量に含み締まりなく軟質の褐色土である。3層は2層よりロームブロックを多く含む褐色土である。4層は軟質で締まりがなく柱痕に当たる層と思われる褐色土である。

床面はやや攪乱の影響を受けているものの東側の壁際から南東壁コーナー、南壁際、北壁中央カマド付近を中心に硬化面が見られる。また、床面全体に貼り床を施していたと思われる。壁周溝はほぼ全周を巡る。

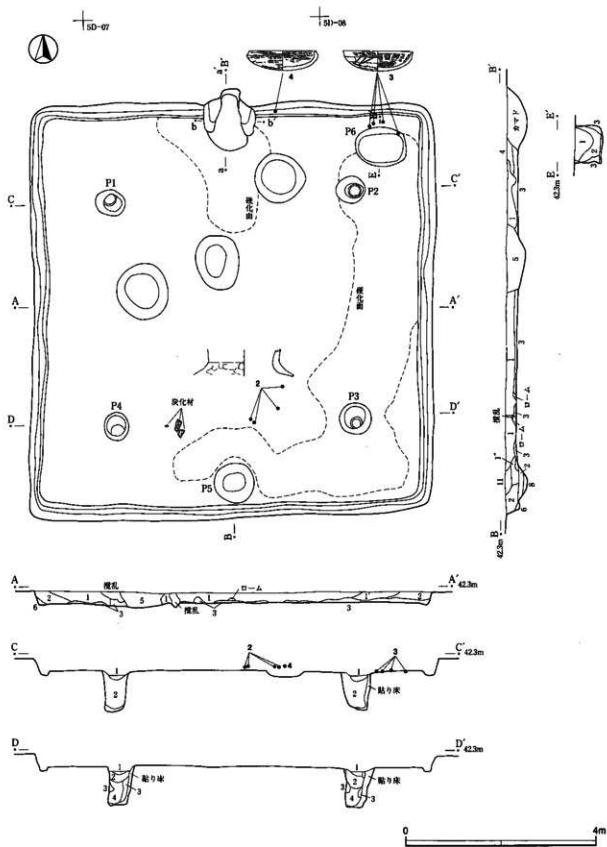
カマドは北壁中央部分に構築されており、両袖部分、煙道部とも遺存状況は良好である。カマドの覆土は1層～8層まで分層されている。6層～8層は赤褐色砂層でカマドの本体袖部分である。1層は暗褐色土で住居の覆土の一部で部分的に砂が多量に混ざる。2層～5層はカマドの天井の崩落土層、及び覆土である。

柱穴はP1～P4まで4本検出されている。径55cm前後の円形プランで床面よりの深さは70cm前後である。また梯子穴と思われる南側のP5、北東コーナー付近には貯蔵穴と思われるP6が検出されている。

なお、遺物から判断して当該住居跡の所属時期は古墳時代後期になるものと思われる。

（遺物）住居跡の北東隅の貯蔵穴付近と南隅中央付近及び北側カマド付近より杯と甕が数点出土している。図示可能なものは7点である。

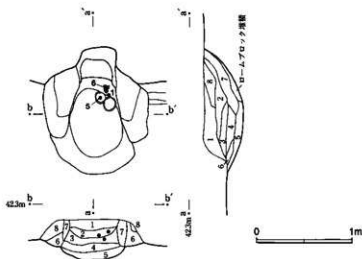
1～2は土師器の甕である。1は口縁部から胴部上半部にかけて1/4程度遺存している。胴部下半部以下の形態は不明である。胴部上半部が最大径になる形態になる可能性がある。口径8.0cmで他は不明である。外面口縁部ヨコナデ、胴部にかけては縦方向のヘラケズリで仕上げられている。内面口縁部ヨコナデ、胴部にかけてはヘラナデで仕上げられている。2は口唇部を除き口縁部のほぼ1/2程度遺存している。外面口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ後ナデで仕上げられている。内面口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラナデで仕上げられている。



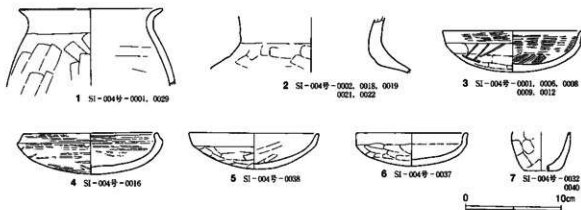
第52図 SI-004号住居跡平面図、セクション図、エレベーション図（遺物分布含む）(1/80)

3～6は土師器の杯である。3、4の胎土は5、6と比較すると細かく緻密である。3はほぼ完形である。口径14.4cm、器高4.2cmで丸底である。外面口縁部ミガキ、底部にかけてヘラケズリ後ミガキで仕上げられている。内面は丁寧なミガキで仕上げられている。内面は黒色処理が施されている。4は杯でほぼ完形である。やや口唇部が内曲する器形である。口径13.9cm、器高4.2cmで丸底である。外面口縁部は横方向のミガキで仕上げられている。底部はミガキと思われるが非常に摩滅しており痕跡は不明瞭である。内面はミガキで仕上げられているが、底面に近いほうは剥落が著しい。5はほぼ完形である。明らかに3、4と胎土が違い砂粒の多い粘土を使用している。口径13.3cm、器高3.7cmで丸底である。外面口縁部ヨコナデ、底部にかけてヘラケズリで仕上げられている。内面口縁部ヨコナデ、底部にかけてはヘラナデで仕上げられている。粘土を板状に成形して両手で一気に押し広げて作った感じの手捏ね風のやや荒い感じのする土器である。6の杯についてもやや小振りながらさらに荒い感じのある土器で胎土についてもほとんど同一と思われるものである。完形品で調整等は同様である。口径11.5cm、器高3.4cmで丸底である。

7は手捏ね土器である。胴部以下1/2程度遺存している。外面はヘラケズリ後雑なナデ仕上げ、内面はナ



第53図 SI-004号住居跡カマド平面図、セクション図（遺物分布含む）(1/40)



第54図 SI-004号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

デで仕上げている。胎土を観察すると砂が多く5と6の杯と似通ったものを使用している。底径4.0cmである。

#### SX-002号土坑（第55、56図1～3、図版9、33）

（遺構）3C-80グリッド付近に位置する。規模は3.60m～4.20mの不整形な形で検出されている。遺構は斜面部にかかり床面の状況はやや斜面方向に下がり、それをもってしても住居跡とは思われない。床面下に1.00m～1.20mの規模の方形の掘り込み施設はある。炭化物を含んでいるところから炭窯の可能性も考えられるがその性格は不明である。杯などの遺物が1層の上部で検出されている。これらの遺物は上からの流れ込みの可能性もあることからこの遺構に伴うものではないかもしれない。遺構の性格は作業場の雰囲気のある場所として捉えたい。覆土は上から1層～7層まで分層される。1層は山砂を多量に含み乾くと白っぽくなり非常に締まる黒褐色土である。2層はローム粒、炭化粒を含みやや締まりのない暗褐色土である。3層は暗褐色土を含む粘性のある褐色土である。4層は砂を多量に含む灰褐色土である。5層はローム粒を含み砂を多量に含む黒褐色土である。6層は砂質で山砂を多く含み締まりのない暗褐色土である。7層は山砂、炭化粒を多く含み締まりを欠く暗褐色土である。

（遺物）1～3は土師器の杯である。1は杯のほぼ3/5程度遺存しているもので器形は丸底で体部で折れ曲がる。内外面口縁部ヨコナデ、底部にかけては外面ヘラケズリ後ミガキ、内面ミガキで仕上げられている。内面については摩滅が著しく調整は不明瞭である。口径13.3cm、器高4.7cmである。

2は杯の2/5程度遺存しているもので器形は丸底で口縁部まで丸みを保ちながら緩やかに立ち上がる。外面口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ後ナデで仕上げられている。内面は丁寧なナデで仕上げられている。口径15.0cm、器高は推定で3.3cm程である。

3は杯で1/5程度遺存しているもので器形は底部から口縁部にかけて途中でくの字に内曲するものの直線的に立ち上がるようである。口径14.0cmで他は不明である。内外面はナデで仕上げられている。

#### SX-003号焼土跡（第57図、図版なし）

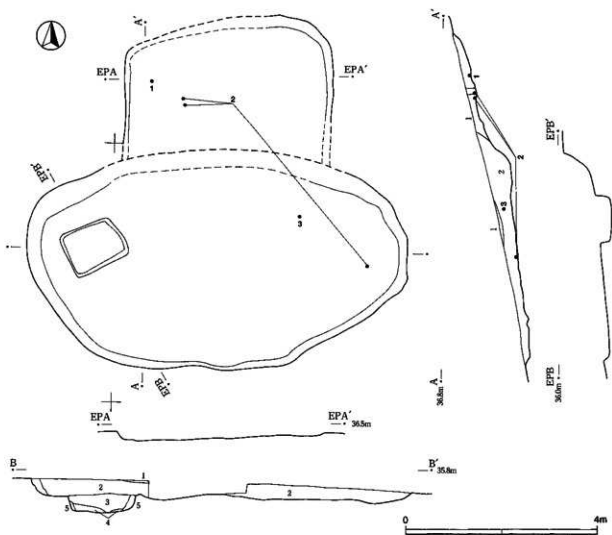
（遺構）6E-20グリッド付近に位置する。径1.20m程の円形の範囲にひろがる焼土粒、焼土ブロックが分布する形で検出されている。IIc層に乗った感じで検出されており、炉にはならないと思われる。非常に短期の焼き火跡のようなものかもしれない。覆土は1層の焼土粒、ブロックを多く含み締まりのある暗赤褐色土の下にIIc層である暗褐色土が見られる。遺物は全く見られない。縄文時代の焼土遺構かもしれないが確認はない。

#### SX-004号焼土跡（第58図、図版なし）

（遺構）7I-00グリッド付近に位置する。径0.40m～0.60m程の楕円形の範囲にひろがる焼土粒、焼土ブロックが分布する形で検出されている。なお北側に炭化物出土範囲も検出されている。火床部のみのため詳細は不明であるが003号焼土跡と同様に非常に短期の焼き火跡のようなものかもしれない。遺物は全く見られない。縄文時代の焼土遺構かもしれないが確認はない。

#### SD-001号溝（第59図、図版9）

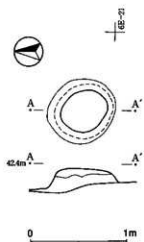
（遺構）東地区のやや北側4D-20～4D-23グリッド付近に位置する。幅0.60m～1.40m程、深さ0.25m～0.40mで断面形はほぼ逆台形になる。覆土は1層～9層まで分層される。1層は表土に似るが黒っぽく締まりがある黒褐色土である。溝埋没後に土手状に盛っていた可能性がある。2層はやや軟らかく宝永火山灰の可能性のある黒色土である。3層は締まりがあり暗褐色土と黒褐色土が混ざりあう黒褐色土である。



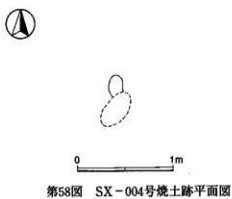
第55図 SX-002号土坑平面図、セクション図及びエレベーション図 (1/80)



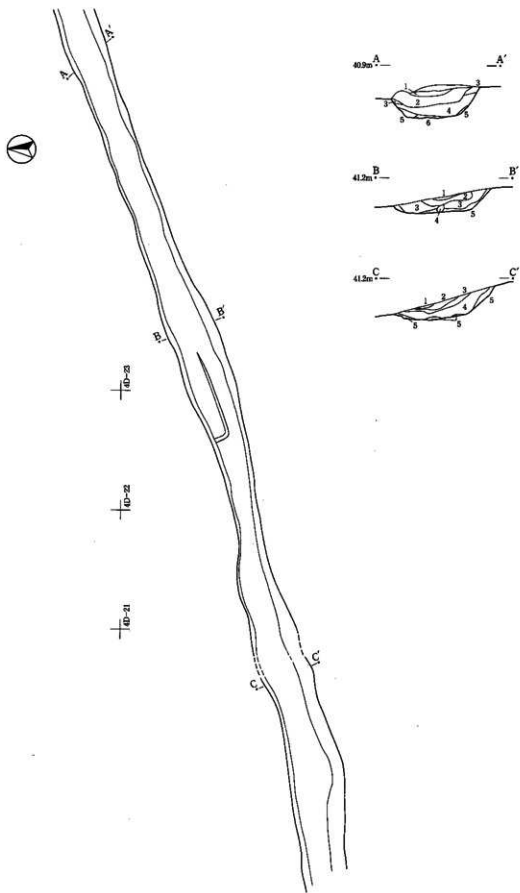
第56図 SX-002号土坑出土遺物実測図 (1/4)



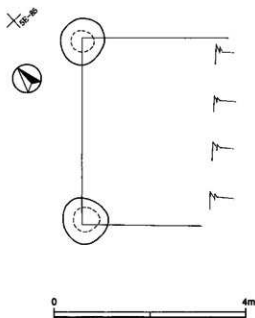
第57図 SX-003号焼土跡平面図、セクション図



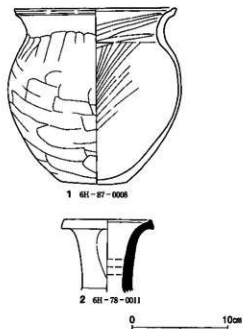
第58図 SX-004号焼土跡平面図



第59図 SD-001号溝平面図 (1/160) 及びセクション図 (1/80)



第60図 SB-001号建物跡平面図 (1/80)



第61図 その他グリッド検出遺物実測図 (1/4)

4層はやや軟質で締まりがある暗褐色土である。5層はやや軟質で締まりがある黒褐色土である。6層はやや軟質で砂が混ざる暗褐色土である。7層は非常に締まりがありロームブロック、砂混じりの暗褐色土である。道路状に強く締まった痕跡が認められる。8層はローム細粒、黒褐色土混じりの暗褐色土である。9層はローム粒を多く含む褐色土である。セクションから判断すると中世末から近世初頭に使われた道路になるのではと思われる。明治時代の迅速図の下総国と上総国の境界線と一致するため古道であるにしても興味深い。

#### SB-001号独立柱建物跡 (第60図, 図版なし)

(遺構) 東地区の5E-85グリッド付近に位置する。規格は1間×1間と思われるが南東側は斜面部にあたるため消失したと思われる。規模はほぼ一間4mで柱跡の中から土師器片が検出している。図示可能なものは皆無であった。柱の底部は砂地で不明瞭であり全体の規模もまた不明であった。古墳時代後期以降の住居跡の一部である可能性もあるが斜面部での調査のため壁等は流失した可能性が高い。

#### その他グリッド検出の遺物 (第61図1~2, 図版33)

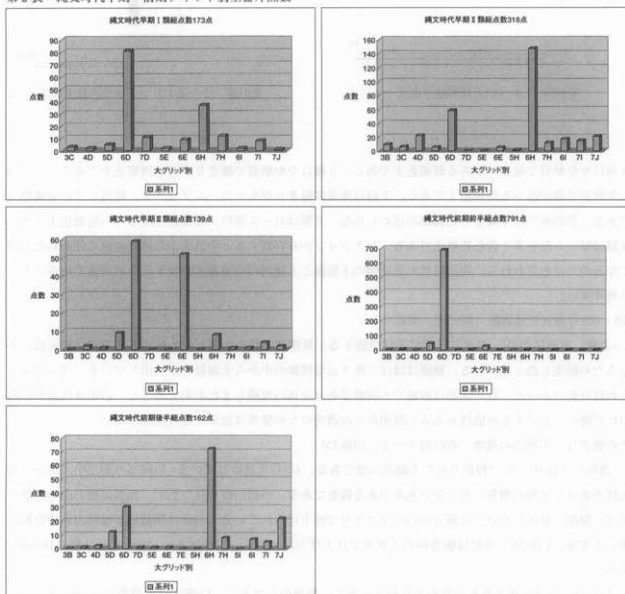
(遺物) 1は6H-87で検出された土師器の甕である。4/5程度遺存している。口縁部と胴部中央部分に最大径があり、比較的胴部の長くない丸みのある器形である。外面口縁部ヨコナデ、頸部は縦方向のヘラケズリ、胴部~底部にかけては横方向のヘラケズリで仕上げられている。内面は胴部以下は縦方向の比較的粗いミガキ、口縁部~頸部は横方向のミガキで仕上げられている。口径16.8cm、底径7.0cm、器高18.4cmである。

2は6H-78で検出された須恵器の長頸壺である。頸部のみである。口径9.0cmで残器高7.3cmである。外面の口唇部~口縁部の一部に自然軸が見られる。

第1表 旧石器時代石器一覧

図版	グリッド名	遺物番号	種別	全長mm	幅mm	厚みmm	重量g	石材	標高m	層位
第13図1	4D-51	2	剥片	15.33	19.46	13.02	2.96	黒曜石	41.210	IV層
第13図2	4D-42	1	剥片	22.40	10.99	7.86	1.93	黒曜石	41.121	IV層
第13図3	4D-52	2	剥片	16.39	11.56	10.77	2.23	黒曜石	41.136	IV層
	4D-52	1	砕片	16.33	9.38	5.37	0.76	黒曜石	41.242	IV層
	4D-52	1	砕片	10.44	8.03	6.30	0.51	黒曜石	41.242	IV層
第15図1	5D-26	3	リタッチ・ド・フレイク	29.28	26.71	8.39	6.79	珪質頁岩	41.438	IV層
第15図2	5D-26	2	剥片	24.59	27.55	13.35	7.96	珪質頁岩	41.870	IV層
第15図3	5D-26	1	剥片	19.12	12.63	6.24	1.26	黒曜石	41.858	IV層
	5D-26	4	礫	48.27	37.57	27.17	42.33	頁岩	41.200	IV層
第36図2	6D-03	1	細石核	17.33	14.08	10.18	3.25	珪質頁岩	—	III層
第36図1	6H-09	28	尖頭器	51.36	17.16	6.52	5.14	安山岩B	—	III~IV層
第16図2	7H-09	6	剥片	18.05	15.19	6.42	1.61	チャート	42.775	III層?
	7H-19	7	リタッチ・ド・フレイク	68.70	25.82	13.78	20.73	珪質頁岩	42.616	IV層

第2表 縄文時代早期～前期グリッド別石器片点数





第3表 SI-002号住居跡出土土器等観察表

検出番号	遺物番号	器種	法量 (cm)	遺存度	動土	色調	焼成	調査
第49図1	22	葉	口径16.7 底径7.0 高さ8.8	ほぼ完形	やや硬質 長石、雲母较多含む	器表：淡褐色 器内：褐色	普通	内面：L1線部ヨコナテ、胴部以下ナテ 外面：ヨコナテ、ヘラズリ後ナテ 内外面赤褐色
第49図2	9, 11	葉	口径 底径6.5	底部1/3遺存	やや硬質 長石、雲母较多含む	器表：淡褐色 器内：淡褐色	普通	内面：ヘラズテ 外面：ヘラズリ
第49図3	2, 15, 18	杯	口径12.0 底径7.0	L1線部1/3遺存	やや硬質 長石、雲母较多含む	器表：淡褐色 器内：褐色	やや良	内面：L1線部ヨコナテ、底部ヘラナテ 外面：L1線部ヨコナテ、底部ヘラズリ後ナテ、削高気味
第49図4	17, 18, 24	杯	口径13.0 底径9.0 高さ6.5	1/2遺存	長石、雲母较多含む	器表：淡褐色 器内：褐色	普通	内面：ヨコナテ、丁字型ヘラナテ 外面：ヨコナテ、ヘラズリ後ナテ
第49図5	1	杯	L1径12.2 底径9.0 高さ6.0	L1線部1/5遺存	長石小粒少量含む	器表：淡褐色 器内：淡褐色	やや良	内面：ヨコナテ後ミガキ 外面：ヨコナテ、ミガキ
第49図6	25	杯	L1径10.7 底径9.0 高さ5.8	1/4遺存	長石、雲母較少量	器表：暗褐色 器内：淡褐色	やや良	内面：L1線部ヨコナテ後ミガキ 外面：L1線部ヨコナテ、底部ヘラズリ
第49図7	4, 5, 12, 27	杯	口径12.2 底径5.4 高さ5.3	3/5遺存	長石、雲母较多含む	器表：明褐色 器内：淡褐色	普通	内面：L1線部ヨコナテ、丁字型ナテ 外面：L1線部ヨコナテ、ヘラズリ後ナテ
第49図8	21	杯	口径10.8 底径9.0 高さ5.1	4/5遺存	長石小粒多く含む	器表：褐色 器内：暗褐色	やや良	内面：L1線部ヨコナテ、底部ミガキ 外面：L1線部ヨコナテ、底部ヘラズリ
第49図9	4, 5	杯	口径12.1 底径5.4 高さ5.3	3/5遺存	長石小粒多く含む	器表：暗褐色 器内：褐色	普通	内面：L1線部ヨコナテ、底部ミガキナテ 外面：ヨコナテ、底部ヘラズリ後ナテ
第49図10	8	杯	口径12.5 底径9.0 高さ5.1	1/2遺存	長石较多含む	器表：暗褐色 器内：暗褐色	普通	内面：L1線部ヨコナテ、底部ナテ 外面：L1線部ヨコナテ、底部ヘラズリ後ミガキ
第49図11	6, 25	杯	L1径11.9 底径8.3 高さ5.9	3/4遺存	長石小粒少量含む	器表：明褐色 器内：淡褐色	普通	内面：ヨコナテ 外面：L1線部ヨコナテ、ヘラズリ後ミガキ
第49図12	23	支脚	残存長12.5	基部跡のみ遺存	繊維を含む 砂较多含む	器表：淡褐色 器内：淡褐色	普通	断面痕を残す、風屈あり

第4表 SI-003号住居跡出土土器観察表

検出番号	遺物番号	器種	法量 (cm)	遺存度	動土	色調	焼成	調査
第51図1	16~18, 22	葉	口径12.5 底径6.0 高さ6.0	口縁部1/2遺存	長石较多含む	器表：褐色 器内：褐色	やや良	内面：ナテ 外面：L1線部ヨコナテ、胴部ヘラズリ
第51図2	8	葉	口径16.6 底径7.0	L1線部のみ1/4遺存	長石顆粒多く含む	器表：淡褐色 器内：淡褐色	やや良	内面：ナテ 外面：ナテ
第51図3	1	杯	口径10.4 底径6.0	L1線部のみ1/5遺存	細かい粒	器表：暗褐色 器内：淡褐色	やや良	内面：ヨコナテ後ミガキナテ 外面：ヨコナテ、ヘラズリ

第5表 SI-004号住居跡出土土器観察表

検出番号	遺物番号	器種	法量 (cm)	遺存度	動土	色調	焼成	調査
第54図1	1, 29	葉	口径14.8 底径6.0	口縁部のみ1/4遺存	白色細粒陶質	器表：淡褐色 器内：淡褐色	やや良	内面：ヨコナテ、ヘラミガキ 外面：ヨコナテ、ヘラズリ後ナテ
第54図2	2, 18, 19, 21, 22	葉	口径16.6 底径6.0	L1線部のみ1/2遺存	白色細粒陶質	器表：淡褐色 器内：淡褐色	やや良	内面：ヨコナテ、ヘラナテ 外面：ヨコナテ、ヘラズリ後ナテ
第54図3	1, 6, 8, 9, 12	杯	口径14.4 底径4.2 高さ9.0	ほぼ完形	白色砂粒陶質	器表：暗褐色 器内：淡褐色	良	内面：紫色気味、ヨコナテ、丁字型ミガキ 外面：ヘラズリ後ミガキ
第54図4	16	杯	口径13.9 底径4.2 高さ9.0	ほぼ完形	白色砂粒、紫色砂粒、 雲母較少量	器表：淡褐色 器内：淡褐色	良	内面：ミガキ、磨滅、表面滑しい 外面：ヨコナテ、ミガキ、磨滅
第54図5	26	杯	口径13.3 底径3.7 高さ9.0	ほぼ完形	白色砂粒、赤褐色スクリヤ少量	器表：赤褐色 器内：赤褐色	良	内面：ヨコナテ、ヘラナテ 外面：ヨコナテ、ヘラズリ後赤褐色ナテ
第54図6	27	杯	L1径11.5 底径3.4 高さ9.0	完形	白色砂粒、雲母少量	器表：赤褐色 器内：赤褐色	良	内面：ヨコナテ、ヘラナテ 外面：ヘラズリ後ナテ
第54図7	32, 40	手捏お土器 (コンテュア)	L1径11.0 底径11.3 高さ9.0	胴~底部1/2遺存	粘土少なかりぬい 砂较多含む 5, 6と同じ粘土	器表：赤褐色 器内：赤褐色	やや不良	内面：ナテ 外面：ヘラズリ後赤褐色ナテ

第6表 住居跡外出土土器観察表

検出番号	遺物番号	器種	法量 (cm)	遺存度	動土	色調	焼成	調査
第56図1	SX-002号 20	杯	口径13.3 底径4.7 高さ9.0	3~4程度遺存	白色砂粒少量	器表：黄褐色 器内：黄褐色	良好	内面：ヨコナテ、ミガキ、磨滅 外面：ヨコナテ、ヘラズリ後ミガキ
第56図2	SX-002号 3, 21, 22	杯	口径15.0 底径4.1 高さ9.0	2~3程度遺存	白色砂粒少量	器表：茶褐色 器内：淡灰色	良好	内面：丁字型ナテ 外面：L1線部ヨコナテ、ヘラズリ後ナテ
第56図3	SX-002号 8	杯	口径14.0 底径4.0 高さ9.0	1~5程度遺存	白色砂粒目立つ	器表：淡褐色 器内：淡褐色	やや良	内面：ナテ 外面：ナテ
第61図1	6H-67 8	葉	口径16.8 底径18.5 高さ9.0	4~5程度遺存	白色砂粒少量	器表：茶褐色 器内：茶褐色	やや良好	内面：ミガキ 外面：ヨコナテ、ヘラズリ
第61図2	6H-76 11	短壺型 長頸壺	口径9.0 高さ6.0	底部のみ遺存	磨滅	器表：淡灰色 器内：淡灰色	良好	内面：ロクロナテ 外面：ロクロナテ、自然釉

## 第4章 まとめ

**旧石器時代** 旧石器時代の石器集中場所はⅣ層の石器群が2か所、Ⅵ層の石器群が1か所で検出されているが、いずれも小規模で短期間の単一な活動結果に基づいて残されたものである可能性が高い。この場所が専ら狩猟採集の場であったことを物語っているのかもしれない。

**縄文時代** 縄文時代の包含層の調査で一括を含め2,000点程の縄文土器片を分類した。その結果1,789点の土器片の時期の特定が可能であった。縄文時代早期の土器群はⅠ類（熱糸文系）が168点、9.4%で調査区の西側6D区を中心に検出されている。東側6H区でもややまとまって検出されている。Ⅱ類（沈線文系）は310点、17.8%と増加している。特に東側の6H区が中心となって増加している。Ⅲ類（条痕文系）は143点、8.0%で西側6D区、6E区を中心に検出されている。Ⅰ類の土器群は井草式の土器がまとまって検出されている。Ⅱ類の土器群は三戸式、田戸下層式の土器が中心である。Ⅲ類の土器群は縄ヶ島台式の土器も若干見られるものの茅山上層式土器が多く見られる。各土器群の分布中心が若干異なることから遺跡の活動範囲が多少ずれることも可能性として考えたものの、住居跡や炉穴等の遺構も全くなく、生活空間として考えるより狩猟採取空間とみたほうがよいであろうか。ただ調査面積の割に陥穴の数は少ないように思われる。なお、石器類の分布状況は早期のⅡ類の土器群の分布状況と重なるものが多いため、この時期の石器が多いと推測される。また礫類については焼成の見られるものも多いが、特定の集中場所は認めるとは困難である。

縄文時代前期前半の土器群は852点、47.6%で西側の6D区に特に集中して検出されている。黒浜期の土器群が非常に多い。花積下層、関山期の土器片も若干見られるようである。縄文時代前期後半の土器群は165点、9.2%で西地区の5D区、6D区、東地区の6H区、7H区、7J区と比較的分散して検出されている。6H区では浮島Ⅲ式の土器が一括で検出されている。他は諸磯系の土器片が多い。前半は6D区に集中する傾向が強いので、活動の主体がこの辺にあったことは想像に難くないが、住居跡など居住の場ではなくやはり狩猟採取空間とみたほうがよいであろうか。ただ土器片の廃棄の量から考えると、生活残滓の場もここに厳然と存在するので居住空間に近い作業場の空間なのかもしれない。

縄文時代中期は130点、7.2%で西地区の6D区、東地区の6I区、7J区で比較的多くまとまって検出されている。中期でも殆ど前半の土器群は見られず、加曾利E式土器群以降の土器しか確認されなかった。住居等の遺構はなく、当該時期と思われる陥穴が数基見られるものの大規模な生産、廃棄の場ではなかったようである。占有期間も割に限定されたものと思われる。

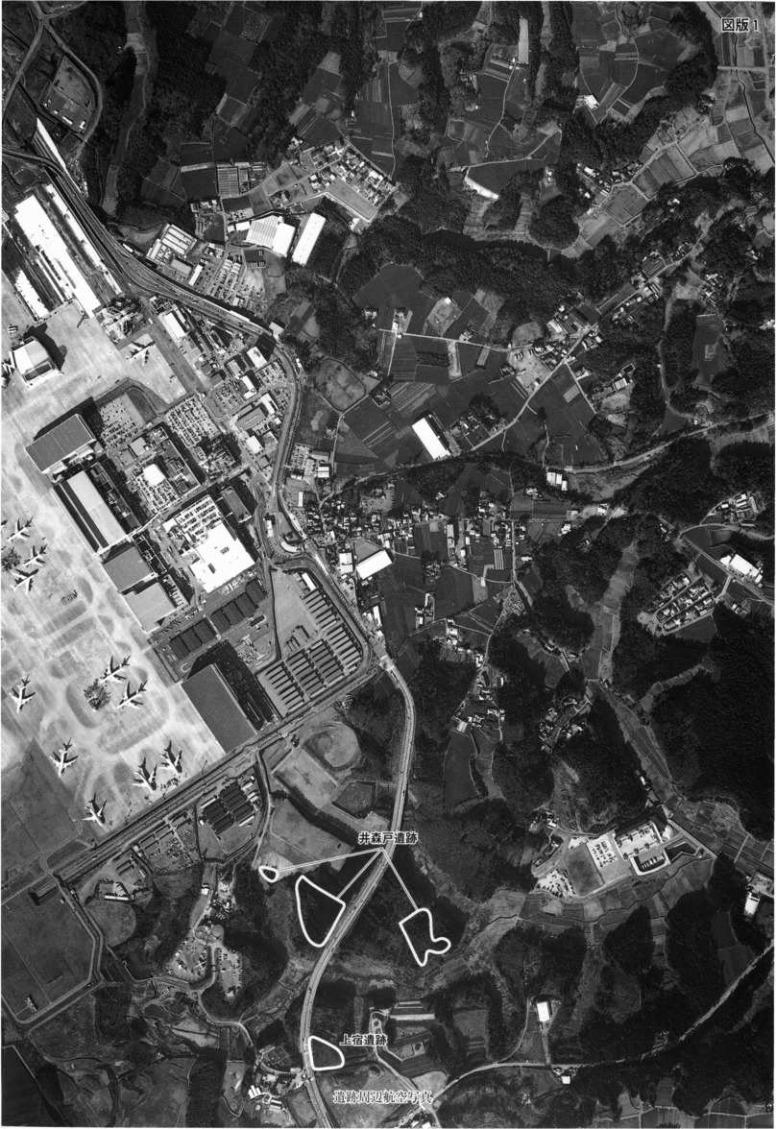
縄文時代後期以降の土器群は西側6D区付近に散見されるものの、あまりまとまって検出されるといった傾向は見られない。この時期の継続的かつまとまった活動はなかったものと思われる。

**弥生時代** まとまった包含層の調査が行われた結果、弥生時代中期の土器片が多量と土坑2基が検出された。包含層は弥生時代中期初頭の須和田式土器群と思われるが、まとまった生活単位というのは認識できなかったためどのくらいの時間で形成された包含層であるかは不明である。表土層に近い部分での検出のため住居跡等の検出はなかったが、比較的短時間に形成された居住空間近くの生産、廃棄の場、あるいは埋葬の場所とも考えられる。

古墳時代　　ほぼ同時期の古墳時代後期の住居跡3軒と土坑1基と小規模な集落構成である。この辺りの他の遺跡と同様な傾向である。隣接地域でも同時期の住居跡が少数検出されている。

中・近世　　井森戸遺跡では中世末頃の道路跡と思われる遺構が確認されている。また、上宿遺跡では前回、今回の調査ともにカワラケ等の中近世の遺物も見ついている。さらに周辺の遺跡では馬土手、屋敷跡等の当該時期の遺構遺物も見つかってきており、さらに隣接地域での調査が進展すればこの時期の生活の一端が明らかになってくると思われる。

# 写 真 图 版



井倉通跡

上宿通跡

新井通跡



上宿遺跡上層確認トレンチ (J) 全景



上宿遺跡確認グリッド及び上層セクション



上宿遺跡上層本調査範囲全景（北北西から）



上宿遺跡上層本踏査範囲全景（南から）



002号陷穴



006号陷穴



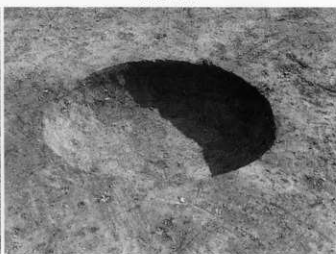
008号陷穴



003号土坑

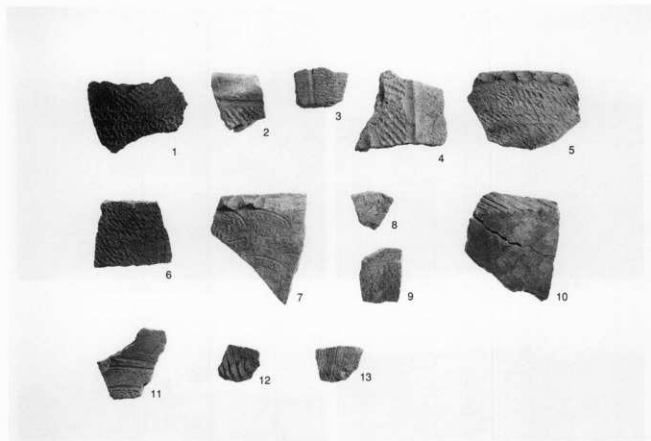


004号土坑

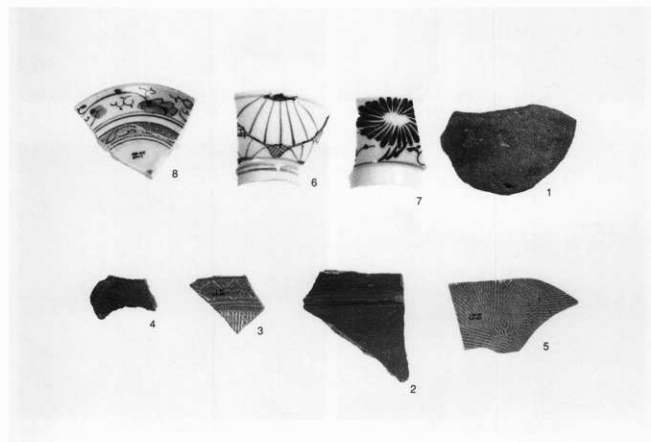


005号土坑





上宿遺跡縄文時代・弥生時代遺物



上宿遺跡中・近世遺物



井森戸遺跡西区（中央）調査風景



井森戸遺跡西端部調査後遠景



井森戸遺跡確認トレンチ6D区



井森戸遺跡確認調査区（西区）



井森戸遺跡確認調査区（西区）



井森戸遺跡斜面出土状況



井森戸遺跡斜面出土状況



井森戸遺跡東側全景



井森戸遺跡東区調査前全景



井森戸遺跡東区頂部遺物出土状況



井森戸遺跡東区頂部遺物出土状況



井森戸遺跡東区頂部遺物出土状況



井森戸遺跡東区頂部遺物出土状況（南東）



井森戸遺跡東区頂部遺物出土状況（南東）



井森戸遺跡東区頂部遺物出土状況（南東）



井森戸遺跡東区頂部遺物出土状況（南東）



井森戸遺跡東区頂部遺物出土状況（南西）



SD-001号溝セクション東から



SD-001号溝セクション西から



SD-001号溝全景



SK-002号土坑平面



SX-002号土坑セクション南東



SI-002号住居跡セクション北



SI-002号住居跡カマド付近出土状況



SI-002号住居跡完掘



SI-002号住居跡カマド内出土状況



SI-003号セクション出土状況



SI-003号住居跡出土状況東から



SI-003号住居跡出土状況南から



SI-003号住居跡完掘



SI-004号住居跡セクション南東から



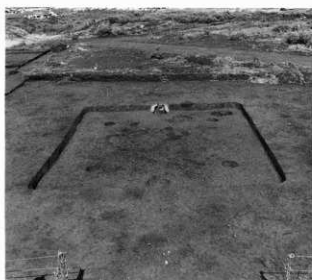
SI-004号住居跡北東側出土状況南から



SI-004号住居跡北東側出土状況東から



SI-004号住居跡カマド内出土状況



SI-004号住居跡完掘南から



SI-004号住居跡完掘南東から



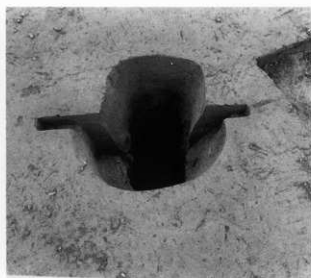
SK-007号土坑出土状況



SK-007号土坑全掘



SK-008号陥穴セクション



SK-008号陥穴全掘



SK-009号陥穴セクション



SK-009号陥穴全掘





SK-010号土坑全掘



SK-011号土坑全掘



SK-012号土坑全掘



SK-013号土坑全掘



SK-015号土坑全掘



SK-016号陷穴全掘



SK-017号土坑出土状況



SK-018号土坑完掘



SK-019号陥穴セクション



SK-019号陥穴全掘



SK-020号土坑全掘



SK-021号陥穴全掘



SK-022号土坑セクション



SK-022号土坑全掘



SK-023号土坑全掘



SK-024号陥穴全掘



SK-025号陥穴全掘



SK-026号陥穴全掘



3C-30西壁セクション東から



旧石器時代第1石器集中か所 (4D区)



4D-73, 74遺物出土状況 (縄文時代後・晩期)



4D-93, 94遺物出土状況 (縄文時代包含層)



5D-05西壁セクション



5E-44西壁セクション



旧石器時代第2石器集中場所 (5D-25付近)



掘之内式土器出土状況



6D-05区セクション



6D-15区西壁セクション



6H-54東壁セクション



東区7-10付近遺物出土状況



旧石器時代第3石器集中か所 (7H-18)



旧石器時代第3石器集中か所 (7H-07)



旧石器時代第3石器集中か所セクション (7H-07付近)



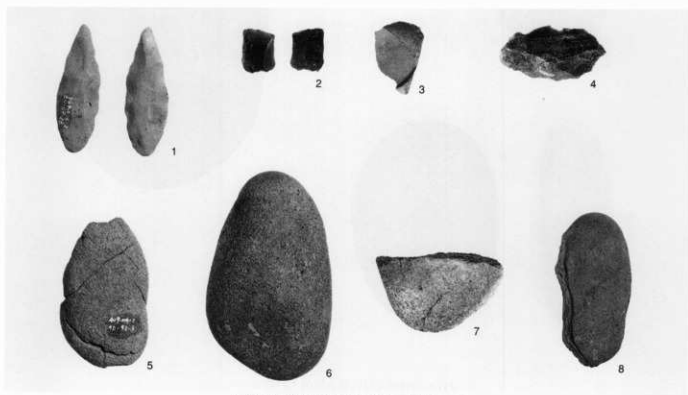
井森戸遺跡旧石器時代第1石器集中か所出土石器



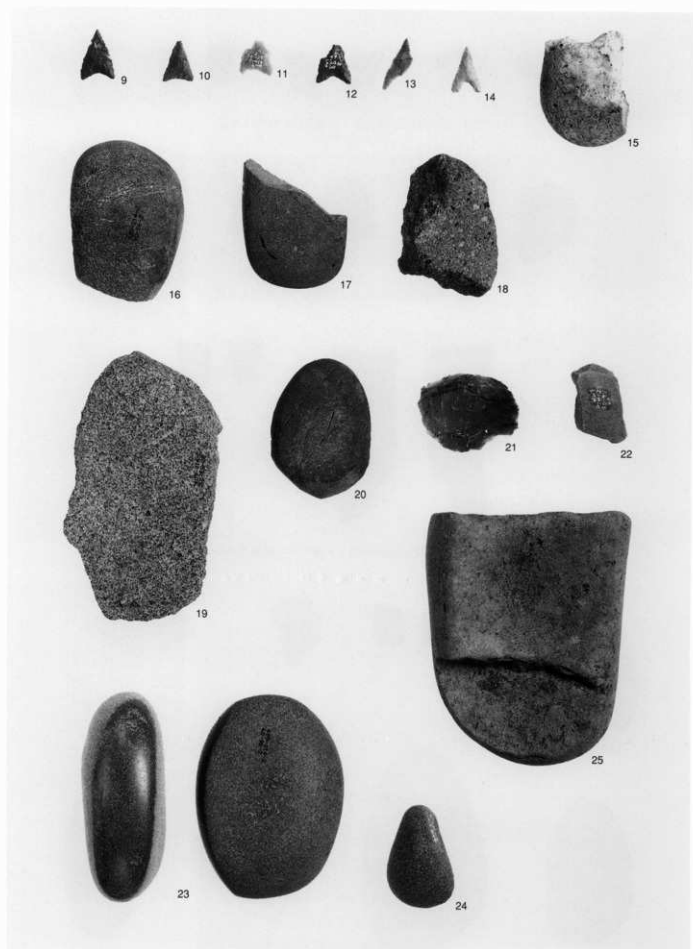
井森戸遺跡旧石器時代第2石器集中か所出土石器



井森戸遺跡旧石器時代第3石器集中か所出土石器

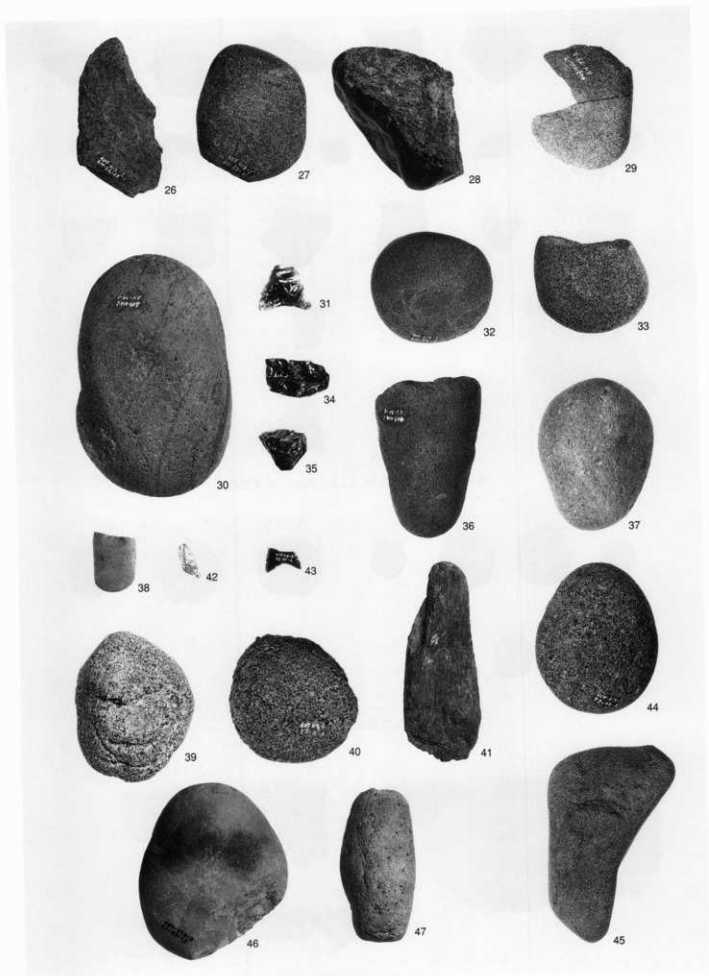


井森戸遺跡縄文時代包含層出土石器1, 2



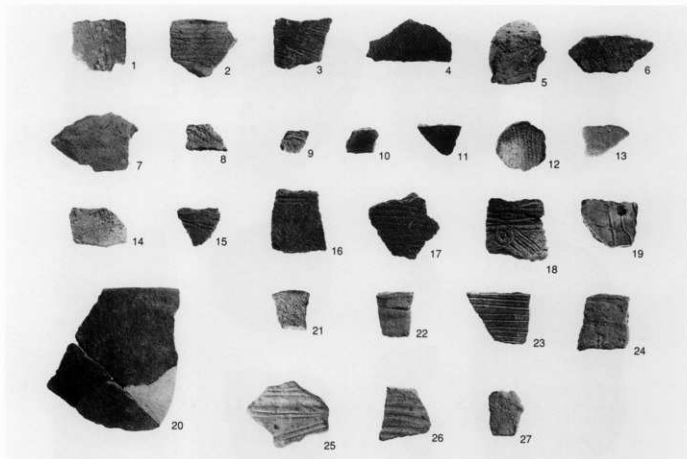
井森戸遺跡縄文時代包含層出土石器 3～5



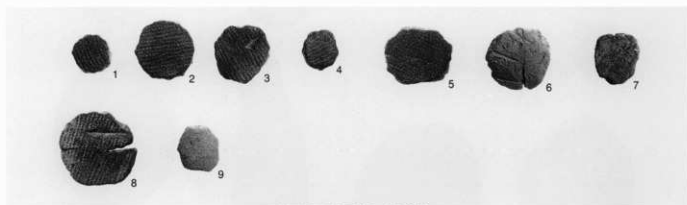


井森戸遺跡縄文時代包含層出土石器5～9

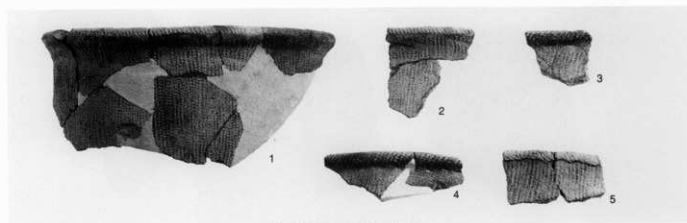
井森戸遺跡



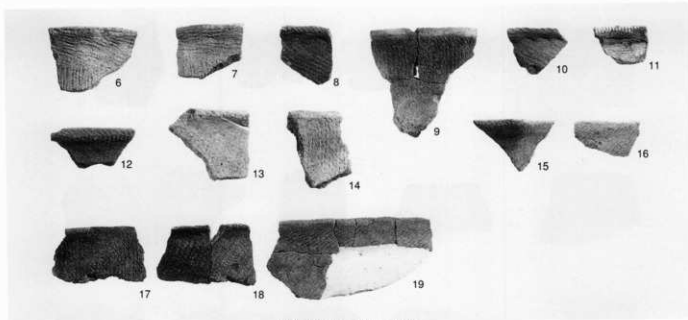
縄文時代～弥生時代SK（土坑・陥穴）出土遺物



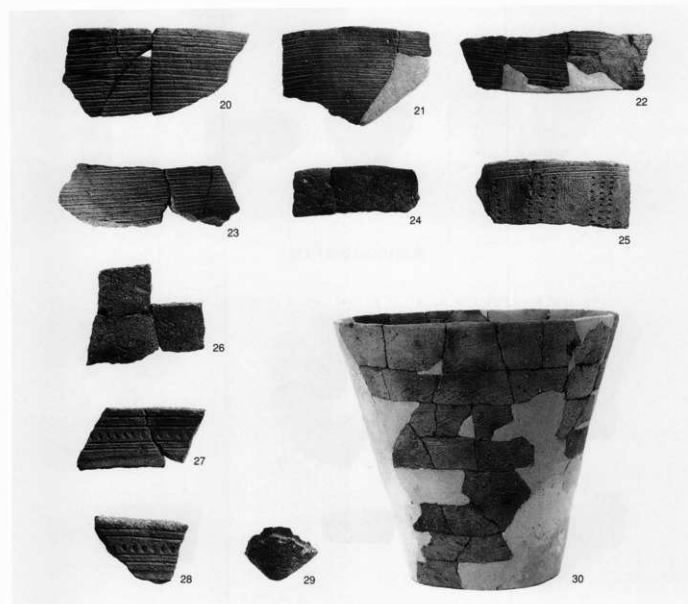
縄文時代包含層出土土器片踵



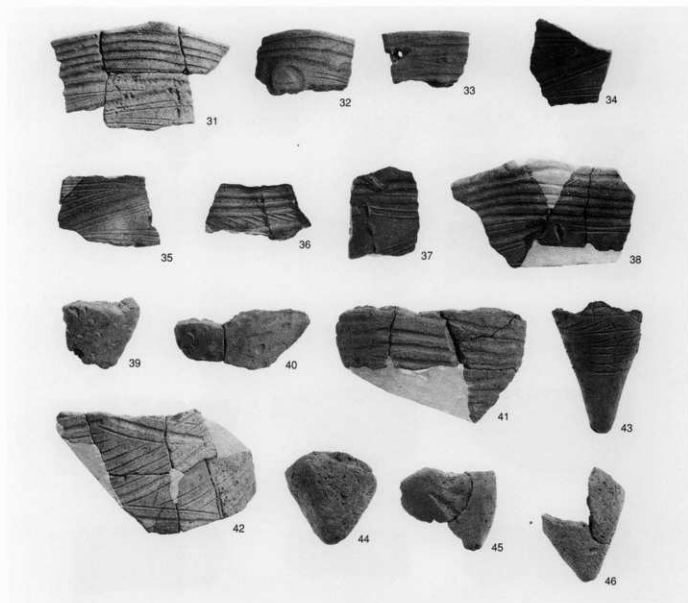
縄文時代包含層出土土器1



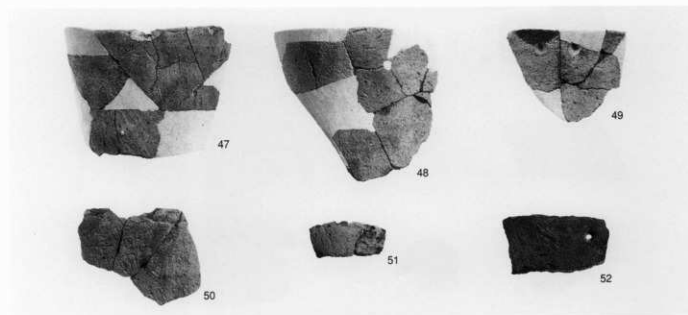
縄文時代包含層出土土器 1



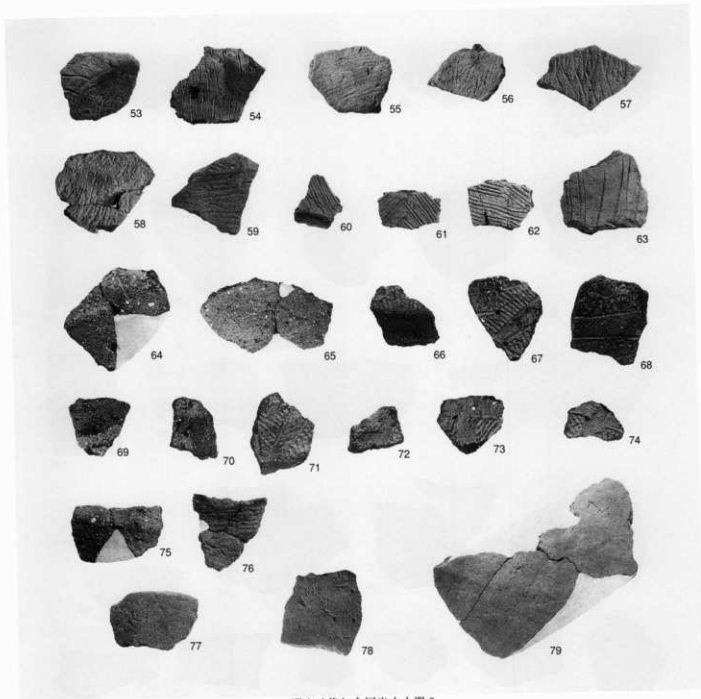
縄文時代包含層出土土器 2



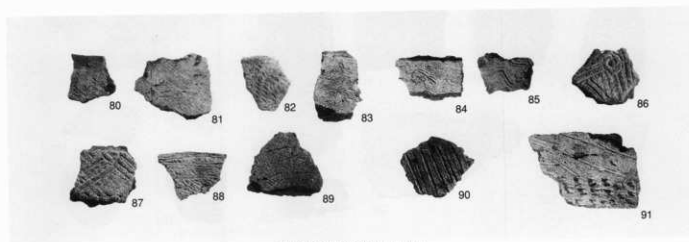
縄文時代包含層出土土器 3



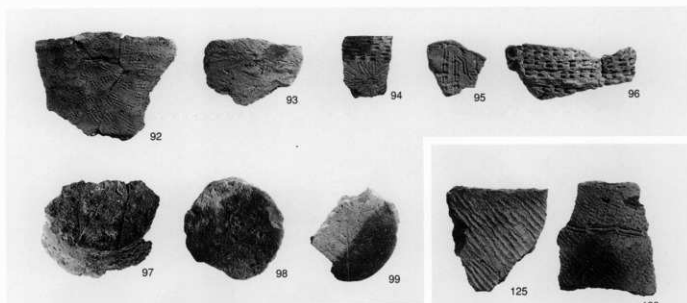
縄文時代包含層出土土器 4



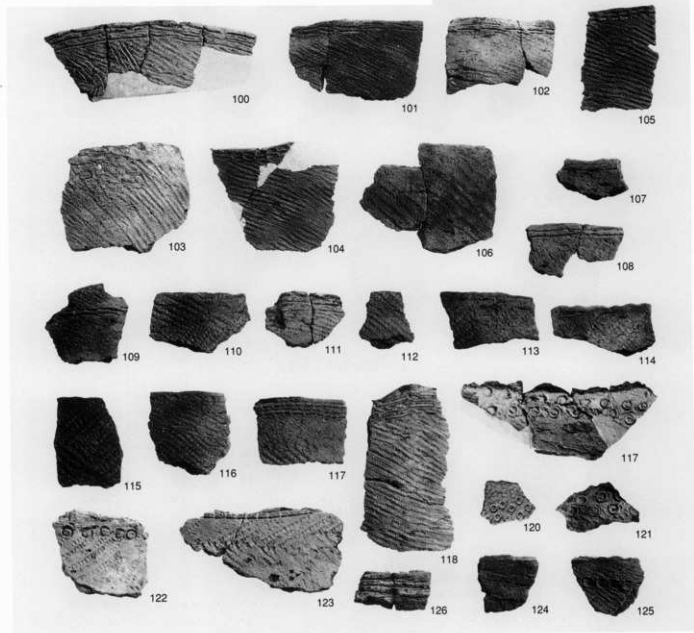
縄文時代包含層出土土器 5



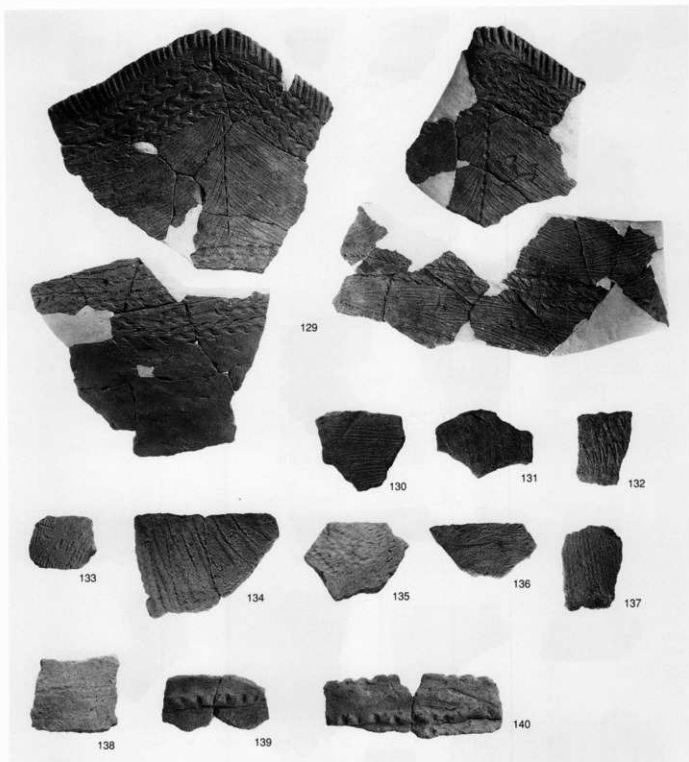
縄文時代包含層出土土器 6



縄文時代包含層出土土器 6



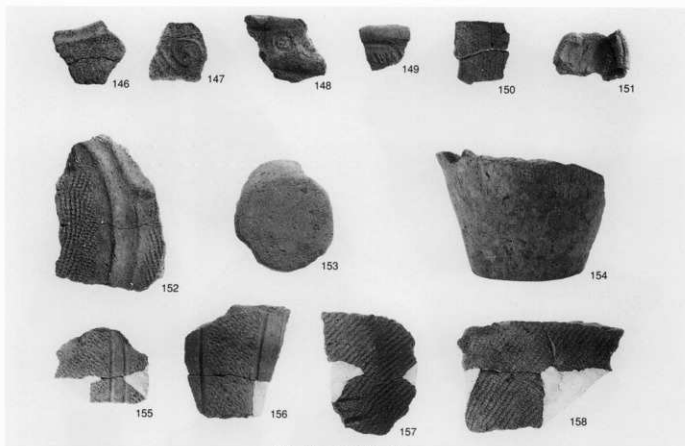
縄文時代包含層出土土器 7



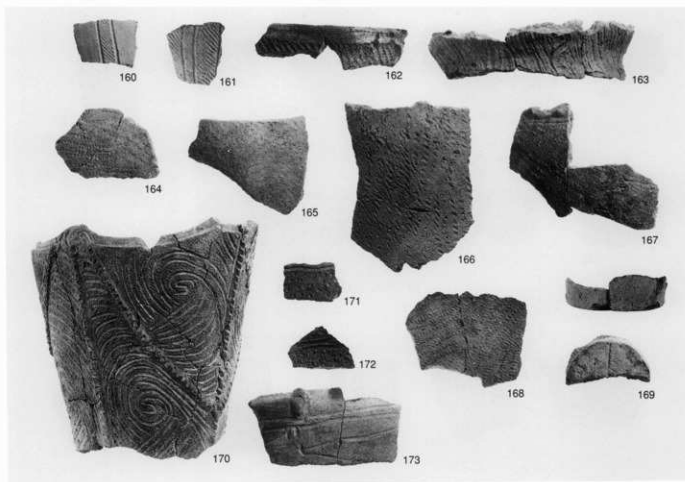
縄文時代包含層出土土器 8



縄文時代包含層出土土器 9

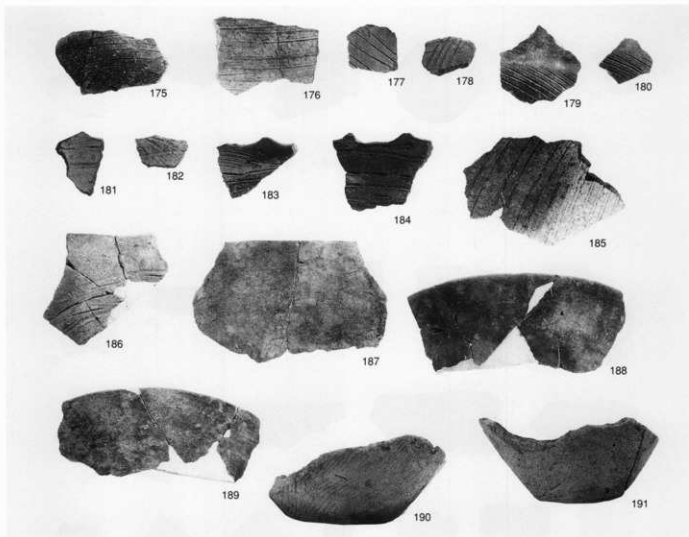


縄文時代包含層出土土器10

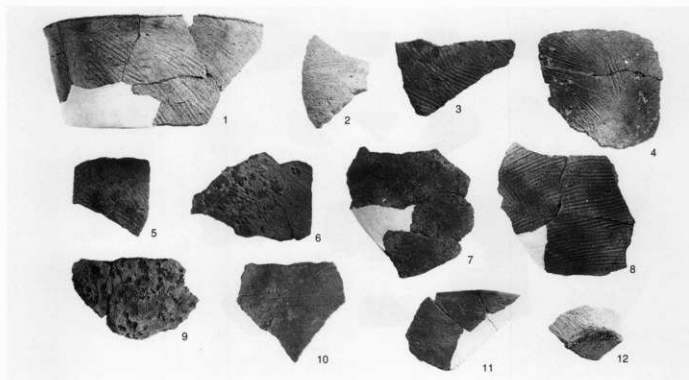


縄文時代包含層出土土器11





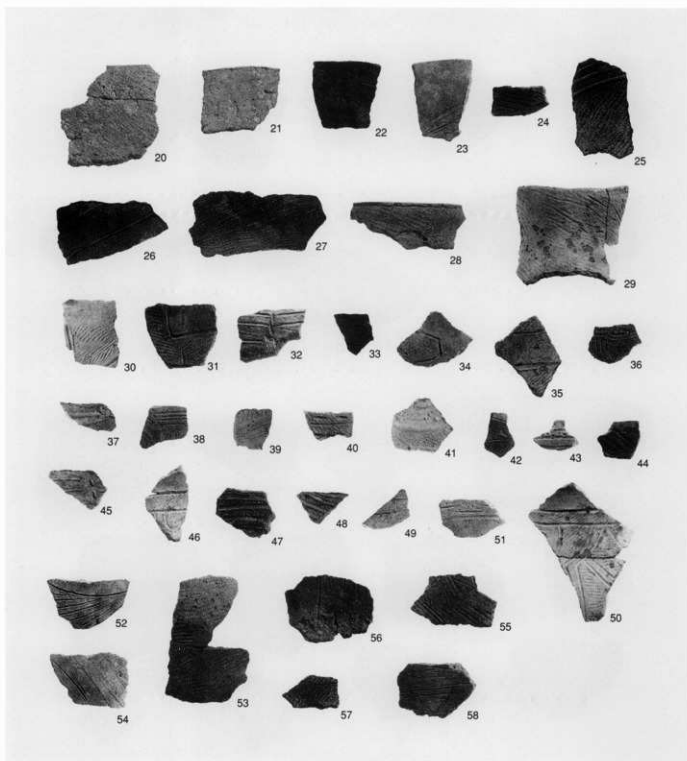
縄文時代包含層出土土器12



弥生時代包含層出土土器1



弥生時代包含層出土土器 1



弥生時代包含層出土土器 2

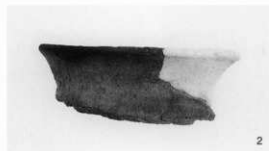


SI-002号住居跡出土1～9

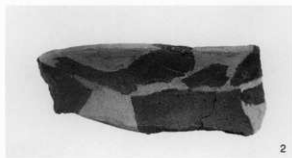
井森戸遺跡



SI-002号住居跡出土10~12



SI-003号住居跡出土1~3



SI-004号住居跡出土1~2



SI-004号住居跡出土3～7



SX-002号土坑出土1～3



その他グリッド出土1～2

報告書抄録

ふりがな	くこうなんぶこうぎょうだんちまいぞうぶんかざいちょうさほうくしょ3							
書名	空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書3							
副書名	芝山町上宿・井森戸遺跡							
巻次	3							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第469集							
編著者名	西口 徹							
編集機関	財団法人千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811							
発行年月日	西暦2004年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道路番号					
上宿	千葉県 山武郡芝山町岩山 字大宿1734-1ほか	409	015	35度 44分 03秒	140度 24分 14秒	20010109～ 20010329	6,200㎡	工業団地の造成に伴う事前調査
井森戸	千葉県 山武郡芝山町岩山 字井森戸126ほか	409	014-2	35度 44分 13秒	140度 24分 16秒	20020513～ 20030131	16,540㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上宿    井森戸	包蔵地	縄文時代	陥穴・土坑	縄文時代土器	縄文時代早期の土器が包含層から礫を伴って出土した。			
		中・近世	井戸	陶磁器				
	集落包蔵地	旧石器時代	石器集中地点2か所	旧石器時代剥片				
		縄文時代	早期包含層 陥穴・土坑・焼土跡	縄文時代土器・石器				
		弥生時代	土坑	弥生土器				
古墳時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡	土師器						
中・近世	溝							

千葉県文化財センター調査報告第469集

空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書 3

— 芝山町上宿・井森戸遺跡 —

---

平成16年 3月25日発行

編 集	財団法人	千葉県文化財センター
発 行	千 葉 県 企 業 庁	千葉県中央区長洲1-9-1
	財団法人	千葉県文化財センター
		四街道市鹿渡809-2
印 刷	株式会社	正文社
		千葉県中央区都町1-10-6

---